

JAPAN AID

1st.

HURRICANE IRENE

THE CONCERT FOR THE UNIVERSITY FOR PEACE

Sat 20th

Sun 21st

DECEMBER

1986

JINGU STADIUM

国際平和年宣言

国際連合創設40周年記念日であった1985年10月24日、国連総会は、国際平和年を正式に宣言することを全会一致で決定した。

国際連合創設40周年記念日は、国連憲章の目的と原則への支持と誓約とを新たに作る稀有な機会をもたらした。

平和は普遍的な理想であり、また平和の推進は国際連合の第一の目的である。

国際的な平和と安全を推進するにあたっては、戦争の防止を狙いとした、各国ならびに諸国民による継続的かつ積極的な行動、核の脅威を含めた平和に対するさまざまな脅威の除去、非暴力の原則の尊重、対立の解消と紛争の平和的解決、信頼関係構築の方策、軍縮、宇宙空間の平和利用の維持、開発、人権と基本的自由の推進と実践、自決の原則にのっとりた非植民地化、人種差別及びアパルトヘイト（人種隔離政策）の撤廃、生活の質の向上、人間にとっての必要の充足と環境の保護、これらの事が必要不可欠である。

諸国民は平和のうちに共存し、寛大さを持って理解しなければならない。教育、情報、科学そして文化はすべて、それに貢献しうると認識されてきた。

国際平和年は、平和を推進するための斬新な思想と行動とを率先するための、時機を得た大きな力をもたらすものである。

国際平和年は、政府、政府間機構、非政府組織およびその他に対し、諸国民の平和への共通の強い願望を現実的に表現する機会を与えるものである。

国際平和年は単なる祝典や記念ではなく、国際連合の目的を達成するために創造的かつ体系的に思考し、行動する機会である。

よってここに、総会は、1986年を国際平和年とすることを正式に宣言し、平和と人類の未来を守るための国際連合の確固たる努力に参加するよう、諸国民に呼びかけるものである。

1985年10月24日、総会にて採択された。

(決議40/3)

CONTENTS

国際平和年宣言	2
国連国際平和年事務局メッセージ	4
平和大学理事長メッセージ	6
平和大学学長メッセージ	8
グラス・ルーツ・ムーブメントとして／ジャパン・エイド・コミッティー	10
東京放送メッセージ	12
フレンズ・オブ・ユニバーシティ・フォー・ピース	13
国際平和デー	15
平和大学の概念	18
ミュージック・フォー・ピース・プログラムの目的	20
ピーター・ガブリエルからのメッセージ	22
リトル・ステイブンからのメッセージ	23
ハワード・ジョーンズからのメッセージ	24
ハリケーン・アイリーン記者会見	25
平和大学概要	27
「話し合い」 田中憲二	32
ジャパン・エイドの意義 ハワード・ゴールドバーグ	33
Rockによるチャリティーの歴史・概説	34
「チャリティーは事務経費節減から始まる」(チャリティー・コンサート 収益リスト)	38
参加アーティスト・プロフィール	
ピーター・ガブリエル	40
リトル・ステイブン	44
ハワード・ジョーンズ	48
ルー・リード	52
ユースー・ンドウール	54
ジョーン・アーマトレイディング	56
ジャクソン・ブラウン	58
ノナ・ヘンドリックス	60
甲斐よしひろ	62
レベッカ	64
白井貴子&クレイジー・ボーイズ	66
サンディー&ザ・サンセッツ	68
フォーラム、コンサート出場者一覧	81



السنة الدولية للسلام
(1986) 国际和平年
International Year of Peace
Année internationale de la paix
Международный год мира
Año Internacional de la Paz

1986

SECRETARIAT FOR THE INTERNATIONAL YEAR OF PEACE

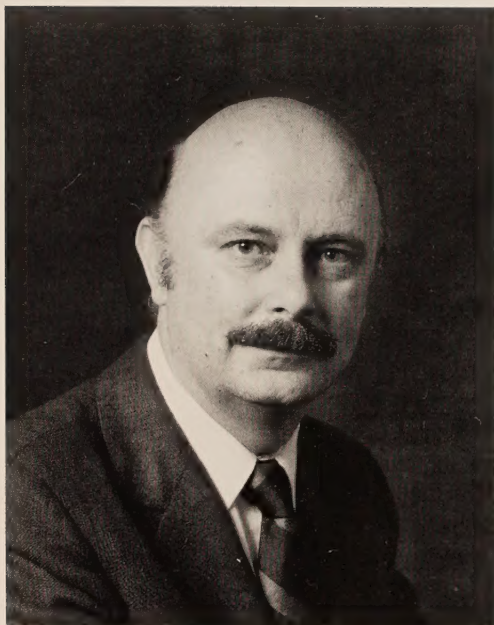
United Nations Secretariat, New York, N.Y. 10017
Tel. (212) 754-5492
Cable address: UNATIONS NEW YORK

The Peace Forum and "Hurricane Irene" are important contributions by the University for Peace and the Japan Aid Committee to the observance of the International Year of Peace. This special year, proclaimed unanimously by the United Nations General Assembly, has been marked throughout the world with projects and events which have brought together people in a common quest for a just and lasting peace. Since its creation, the maintenance and promotion of peace have been the primary tasks of the United Nations.

The search for peace takes many forms. Disarmament, development, the resolution of conflict, promotion of human rights and the satisfaction of basic human needs are among the conditions necessary to achieve peace. At the same time, we must also learn how to live together peacefully, how to increase our understanding and trust for one another, and how to co-operate in solving the problems we face. Historically, culture has provided fertile ground for encouraging people to share their values and ideas. In this context, "Hurricane Irene" will help to bring the message of peace to people around the world and the Tokyo Peace Forum affords an opportunity for discussing further action for peace.

It is especially significant that the forum and the concert take place in Tokyo on the thirtieth anniversary of Japan's joining the United Nations. Over the years, the Japanese people have shown their continuing commitment to the principles and purposes of the Organization. This year has also shown the interest and support of the Japanese people for the objectives of the International Year of Peace. I am certain that this dedication to United Nations efforts in the promotion of peace will continue in the years to come.

Krzysztof Ostrowski
Krzysztof Ostrowski
Executive Secretary
Secretariat for the International Year of Peace



ピース・フォーラムと「ハリケーン・アイリーン」は、国際平和年を記念して国連平和大学とジャパン・エイド・コミッティーが働きかける重要な活動といえましょう。国連総会において満場一致で宣言されたことに始まるこの平和年では、公平で永遠の平和を共に求めているという願いから、世界中においてさまざまな事業やイベントが開かれてきました。国連誕生の折から、平和の維持と促進はその主要な使命のひとつであったからです。この平和の希求は、さまざまな形で実現されています。軍縮、開発、紛争の解決、人権の尊重、および基本的な人間の要求の満足などが、平和を得る上で必須の条件といえるでしょう。同時に、人類が平和に共存する方法、互いの理解と信頼を深め、我々が直面する問題解決に協力しあう方法などをも我々は学ばなければなりません。歴史的には、人類間の価値や考えを分かちあうのにふさわしい舞台は、文化によって提供されつづけてきたこととなります。この意味において、「ハリケーン・アイリーン」は世界中の人々に平和メッセージを送り届ける役割を果たし、東京ピース・フォーラムは平和のためにとるべきこれからの行動を議論する機会となるはずです。このフォーラムとコンサートが、日本の国連加入30周年記念の年に東京で開かれることは、とりわけ意義深いものがあります。過去何年間にもわたり、日本の人々は、国連の原則と目的に対して絶え間ない努力を示してくださいました。今年、この国際平和年において、その目的に対して日本の人々は再び興味と支援を授けてくれます。平和の促進における国連の努力に、このような活動が今後とも続くことを私は確信してやみません。

クリストフ・オストロウスキー（平和年事務局）



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITE POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES/35/55/3/XII/1980
Téléfonos: 49-10-72 - 49-18-24 - Apartado 199, Escazú, Costa Rica, C. A. Telex 2531 Macaso C. R.

Año Internacional de la Paz

A MESSAGE FOR THE PEOPLE OF JAPAN

FROM DR. RODRIGO CARAZO

PRESIDENT OF THE COUNCIL OF THE UNIVERSITY FOR PEACE AND
FORMER PRESIDENT OF COSTA RICA (1978-82)

During 1986 we have been celebrating the International Year of Peace, as declared by the United Nations, and HURRICANE IRENE is one of the last, if not the last, official event of the year. However, I would like us to see this as the first event of an ongoing effort that has to achieve world peace, for the twenty first century shall be peaceful, or it shall not be.

Quite befittingly, this event is in Japan. A country whose people have shown the world that no matter how difficult the road may be, when there is a will there is a way. This is how you rebuilt your country and lifted it from ruins into the world power it now is. But now, you also have a tremendous responsibility, and that is to show the world that through the proper dedication, discipline and courage we can, as human beings, build a better and more peaceful world for the future generations.

We hope that the combined efforts of Japan Aid and the University For Peace, through these events, has made a significant contribution in raising the consciousness of all human beings to our global responsibilities, and we wish to reiterate to you, the Japanese people, our resolve to continue working together in achieving our mutual goals.

May the peace of the Season be upon all your households and the expectations of the New Year fill you with the eagerness of working for a better world.

"Fais pacem, para pacem"



photo by Karen Moak

国連の提唱により、1986年は国際平和年であり、「ハリケーン・アイリーン」はそれを記念しての、最後とはいえなくても、公式行事としては最後の部類にあたるイベントです。しかしながら、今回のこのイベントを、我々は、21世紀が平和となる上で、もしくは平和とはならないまでも世界平和を達成する上での現在進行中の努力の最初の結晶としたいと考えています。

まさしく適切といえましょうか、このイベントは、日本において開催されます。日本、すなわち前途がいかに関しかりとうとも、意志あるところ道ありという希望を世界に対して示してきた国においてです。この言葉の示す通り、日本は再興し、廃墟の中から今日あるがごとくの世界勢力に成長しました。しかしながら今日、日本は膨大な責任を負っていることも事実であり、それはすなわち、正しい奉仕、訓練、そして勇気をもってすれば、我々は人間として、来るべき次世代のためによりよい平和な世界を建設することができるかと世界に対して示すことにほかなりません。

ジャパン・エイドと平和大学の協力が、これらのイベントを通じて、全世界的な責任に対する人類すべての関心を喚起するように大きな貢献を果たすことを願います。そしてまた、日本の人々に、我々共通の目標に向かって、我々も共に努力しあう決意でいることを繰り返し述べておきたい思います。

クリスマス・シーズンを迎えてすべての家庭に幸せが訪れるよう、そして来年への期待がよりよき世界へと働きかける熱意に満ちるよう祈るものであります。

ロドリゴ・カラゾー博士 (平和大学理事長)

平和大学学長メッセージ



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITE POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES./35/55/3/XII/1980
Téléfonos: 49-10-72 - 49-13-24 - Apartado 199, Escaró, Costa Rica, C. A. Telex 2331 Macaze C. R.

São Internacional de la Paz

HURRICANE IRENE PRESS CONFERENCE

A message from Dr. Robert Muller

I had planned to be with you and I wish that I were, but for reasons beyond my human control I will only be with you in spirit on this occasion.

People wisdom says that we pray for peace and we pay for war. The young artists and performers that will be coming together for the Hurricane Irene concert, produced by our University For Peace in coordination with Japan Aid Committee, give us great hope by wanting to sing, to play and to pay for peace.

The first University For Peace on this planet deserves the enthusiastic support of the peoples, specially the young people, who want to benefit from peace, "IF WE WANT PEACE WE MUST EDUCATE FOR PEACE". Our expectations are that this concert will be a resounding success and show the rest of the world the shining example of the country and the youth of Japan.

In peace,

Dr. Robert Muller
Former Assistant Secretary
General of the United Nations
and Chancellor of the University
For Peace

"Si vis pacem, para pacem"



賢い人々は、我々は平和を祈りながら、戦争にお金を使っていると言います。しかし、当平和大学がジャパン・エイド・コミッティーと共同で主催する「ハリケーン・アイリーン」コンサートに集う若きアーティスト・演奏者たちは、平和のために歌い、演奏し、そしてお金を使おうとしており、私たちに大きな希望を与えてくれます。この、地球上で初の平和大学は、諸国民の、特に平和から恩恵を受けることになる若者たちの、「平和を欲するならば、平和のために教育をしなければならない」という熱烈な支援を受けるに値するものです。私たちの望むのは、このコンサートが大成功を博し、日本の国とその若者たちの素晴らしい見本を世界に示すことです。

ロバート・ミューラー博士(前国連副事務総長、平和大学学長)



11月10日ニューヨーク。FRIENDS OF U PEACEのマリーナ宅、午後3時。ジャクソン・ブラウン、リトル・スティーブン、そしてツアー真っ最中のピーターが、このプロジェクトの最終ミーティングのためにかけつけてきた。学者肌のジャクソン・ブラウンとピーターに野武士的なリトル・スティーブン、彼らの発言にスタッフの我々が圧倒されてしまう。
ハリケーン・アイリーン——。

今、世界にはさまざまな問題が山積みされている。飢餓、環境、人権、難民、南北等、数え出したらきりがないほどで、そのすべてが“平和”と大きな関わり合いをもっている。言い換えれば、“平和”に到達できれば、こうした問題もクリアになるわけで、この意味において“平和”を求める動きは何よりも優先されなければならない。

ハリケーン・アイリーン——。

今や米・ソのスイッチひとつで私たちの世界が瞬時の内に消えてしまうほどに、“平和”と裏側の影が強まっている。しかも莫大な予算を使って……。

私たちは何もしなくてよいのだろうか、それとも何もできないのだろうか。

このまま、私たちそれぞれの未来に対して、未来への可能性を自ら閉ざしてしまっているのだろうか。

“平和”を求めることは、まず“平和”を知ることであり、求めるもの同志の連帯を高めていくことだ——と、ニューヨークでの4時間のミーティングを終えた。

「とにかく、グラス・ルーツ・ムーブメントだよな」のリトル・スティーブンの声が耳に残る。

“See you soon!” 僕たちの別れ際の言葉である。

服部年伸 (JAPAN AID COMMITTEE 代表)



photo by Funx



photo by F. Lehr



photo by F. Lehr



皆様既にご存じの通り、本年は国連宣言により国際平和年に制定されております。この国際平和年の公認イベントとして、平和のためのチャリティー・コンサート「JAPAN AID 1st./ハリケーン・アイリーン」が、この度東京で開催されることとなり、東京放送が主催者の一員としてこの意義深い企画に参加出来ますことに大きな喜びを感じております。

このコンサートの収益はすべて、平和大学、日本ユニセフ協会などに寄付され、世界の平和の為に役立てていただきます。

平和のための活動は、世界各地で行なわれていますが、個人の力には限度があります。より多くの人々が力を合わせより効果的に、そして永続的に根気よく行なうことが必要です。東京放送といたしましても、今後とも機会あるたびに、いろいろな形で活動を考えて行きたいと存じますので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします次第であります。

最後となりましたが、お忙しいスケジュールをぬって海外からご参加いただいたアーティストの皆様、企画の意義に賛同してご参加下さった日本のアーティストの皆様、に改めて感謝いたしますとともに、開催にお力添えいただいた関係各位に対し、深くお礼申し上げご挨拶とさせていただきます。

濱口浩三 株式会社 東京放送 代表取締役社長



FRIENDS OF THE UNIVERSITY FOR PEACE FOUNDATION

The Friends of the University for Peace Foundation was founded in New York, to further the work and ideals of the University for Peace. In a world where war, hunger and suffering abound, we felt it was necessary to create a foundation in support of the University, whose objectives are education for peace; the disarmament of the mind for the building of peace, and the dissemination of the knowledge for the promotion of peace.

We are most grateful to the Japan Aid Committee and to the Japanese people for their kind help in supporting our peace event HURRICANE IRENE. This event will permit us to disseminate information on the University for Peace and to raise needed funds for the University.

The Japanese people have once again, responded with energy and enthusiasm to their vital commitment for a peaceful world.

PEACE,
Marina P. Kaufman
Marina Pinto Kaufman
Member of the Organizing Committee
for Hurricane Irene,
Treasurer, Friends of the University
for Peace Foundation

Telephone (212) 873-3338, 180 Sullivan Street, New York, NY 10012

平和大学後援会基金は、平和大学の事業と理想とをさらに推し進めるため、ニューヨークに設立されました。戦争、飢餓、苦痛の絶えないこの世界にあって私たちは、その目的を平和教育、すなわち平和を確立するための心の軍縮化、ならびに平和を促進するための知識を普及することに置いているこの大学を支援する基金の創設が必要である、と実感したのです。

私たちは、私たちの平和イベント「ハリケーン・アイリーン」を支えるために私たちと連動して頂いているジャパン・エイド・コミッティー、そして日本の皆さんに大変感謝しています。このイベントは、平和大学に関する情報を広め、大学に必要な基金を募る機会を私たちにもたらすことでしょう。

日本の皆さんは、彼らの平和な世界の実現への積極的な参加に、活気と熱狂をもって応えたのだということを、もう一度申し上げたいと思います。

平和を、

マリーナ・ピント・カウフマン

(「ハリケーン・アイリーン」実行委員会委員、

平和大学後援会基金財務担当)



CHILDREN



究極の音は、頂点でしか磨けない。世界の夢を、今ここにかなえて。

DIGITAL PROGRAMMABLE ALGORITHM SYNTHESIZER



¥258,000

DIGITAL PROGRAMMABLE ALGORITHM SYNTHESIZER



【フロッピーディスク・ドライブ内蔵】 ¥298,000

NEW

feelin' YAMAHA

INTERNATIONAL DAY OF PEACE

PEACE BELL CEREMONY



16 September 1986

9.45 a.m.



Songs performed by the United Nations Singers

Statement by the Secretary-General

Ringling of the Peace Bell and Observance of a Moment of Silence

Statement by the President of the Security Council

"In Your Eyes" - Song by Peter Gabriel and Youssou N'dour

*(Performance dedicated to children and peace
from the Music for Peace Program of the University for Peace)*

*At the conclusion of the programme, all guests are invited to
proceed to the North Terrace for the lighting of the torch and start
of the First Earth Run.*

国際平和デー
平和のベルの式典

1986年9月16日午前9時45分

国連合唱隊による歌

国連事務総長のことば

平和のベル及び黙とう

安全保障理事会事務局長のことば

"In Your Eyes" (歌・ピーター・ガブリエル、ユースー・ンドゥール)

(この式典は、平和大学のミュージック・フォー・ピース・プログラムより
子供たちと平和のために捧げます)

本日、第41回国連総会の開催日に当たり、国際平和デーを記念したいと思います。本年はあたかも、国連平和年でもあるということから、この日は特別な意味を持つものであります。国際平和年は、現在の国連情勢における危機的要素とともに明るい展望もあることを明確に認識して始められました。人類が直面する複雑な問題に対して、早急で奇跡的な解決を期待するのは現実的ではありませんが、より安全な方向へ国際問題が推移するよう、確かなスタートを切ることを望むのは、ごく自然なことでもあります。

このような希望はまだ満たされてはおりません。緊張は、世界の多くの地域に根をはっています。軍拡競争を抑制するに当たっての目立った進展もまだ得られておりません。核による破滅の危機は、今なお人類に暗い陰を投げかけています。安全保障は、軍事的観点からのみ語られるために、常につかまえていくことがなく、ますます遠のいていきます。近代的兵器技術の不断の進歩の結果、安全は永遠に得られないものとの空気が増長されています。人類が自己破滅の恐怖と可能性から解放されなければならないとすれば、核兵器廃絶に向けた全面核実験禁止は最優先課題であります。信頼をつくり出し、集団安全保障の制度を復活するための新たな努力が必要です。この二つなくしては、平和の基礎は定まらないのであります。平和の経済的、社会的側面を無視することは、世界秩序の安定を脅かすことにつながります。非常に多くの人が、今日なお絶対的貧困に苦しめられています。疾病や栄養不足が、余りに多くの人々の命をむしばんでいます。アパルトヘイトをはじめとする人種差別がはびこり、苦悩と混乱の原因となっています。このような大々的な人権侵害を終焉させることなしには、人類の良心が安まり、その関係が安定することもないのです。世界は危機に満ち、その解決への行動は、包括的で統合されたものでなければなりません。大胆で大きな身ぶりや悲壮な訴えかけに目を奪われてはならないのです。その歴史を通じて国際連合は持続的ですべての人々のためになる共通の努力の精神を養うよう努めてきました。しかし今日、国連自身がその存在力と効力を問われているのです。しかも、国連が「平和の統一者」として行動できる唯一の地球的機関であることに疑問をさしはさむ人はいないのです。国連の力の源泉は、究極的には真の安全保障への希求、平和に対する渴望にあり、それは国や文化、イデオロギー、信条などのすべての相違を越え、世界中の人々の統一の力となるのです。国際平和デーに当たり、本日国連本部の敷地をわれわれの未来の希望そのものである子供たちに解放いたしました。今世紀の終わりまでに、地球上の人口の半数近く、25億以上が20歳以下ということになりますが、25億といえますのは、1950年の世界人口と同じなのです。21世紀にかねらの生活が尊厳あるものになるためには、適切な栄養と住む場所、医療、教育を必要とし、そしてまた何よりも平和を必要とするものです。今日われわれの義務は、忍耐をもって努力することであり、それによって初めて明日の世界が核戦争ないしは通常兵器による戦争の危険性を脱することができ、かつ今日の紛争に悩まされずにすむのです。これがわれわれが若い人たちに向けてした約束なのです。われわれが展開させる政策において、われわれがとる措置において、どんな事態に至ろうとも、これこそ欺いてはならない誓いなのであります。

Press Release 86/19
16 September 1986

STATEMENT BY SECRETARY-GENERAL JAVIER PEREZ DE CUELLAR
FOR INTERNATIONAL DAY OF PEACE, 16 SEPTEMBER 1986

Today, the opening day of the 41st Session of the General Assembly, we continue the traditional observance of the International Day of Peace. Coming as it does during the International Year of Peace, it carries a special meaning. The year was inaugurated with a clear articulation of the elements of danger and promise in the present international situation. Although it was not realistic to expect quick, miraculous solutions to the complex problems facing humankind, yet it was only natural to hope that a credible beginning would be made towards a healthier and safer course of international affairs.

The hope still remains unfulfilled. Tensions persist in many regions of the world. No significant progress has been made in curbing the arms race. The danger of nuclear catastrophe continues to cast a grim shadow over human existence. Security remains an ever elusive, ever receding goal as it is viewed solely in military terms. The relentless advances in modern weapons technology add dangerously to a climate of perpetual insecurity. If humanity is to be saved from the fear and possibility of self-annihilation, a comprehensive nuclear test ban treaty leading to the elimination of nuclear weapons is a matter of the highest priority. Fresh efforts are needed to build confidence and revive the system of collective security without which the foundations of peace remain precarious.

Nor can the economic and social dimensions of peace be neglected without peril to a stable world order. A sizeable proportion of the human race is still trapped in absolute poverty. Disease and malnutrition continue to blight too many lives. Apartheid and other forms of racial discrimination still persist, causing much suffering, bitterness and turmoil. The human conscience cannot be at peace with itself nor relations secure unless such massive violations of human rights are finally ended.

The world is in a crisis. Action to resolve it must be comprehensive and integrated. It must go beyond the obvious but often superficial appeal of a bold or sweeping gesture. Throughout its existence, the United Nations has sought to foster this spirit of sustained, common effort. Today, however, the Organization itself is faced with challenges to its viability and effectiveness. Yet few can question that the United Nations remains the only global agency which can act as a "unifier for peace." It derives its sanction ultimately from the need for genuine security, the hunger for peace, that transcends all differences of nation or culture, ideology or creed and provides a powerful source of unity for peoples around the globe.

In marking this International Day of Peace, we have opened the grounds of United Nations Headquarters today to children who represent our most solemn commitment to the future. By the end of this century almost half of the population, over two and a half billion people on this earth, will be under the age of 20 -- about the same as the total world population in 1950. In order to lead their lives in dignity in the twenty-first century, they will require proper nourishment and shelter, medical care and education and most of all, they will need peace.

Our obligation today is to strive with perseverance so that the world of tomorrow is free from the danger of nuclear or conventional war and is not plagued by the conflicts of today. This is a promise we have made to the young. In the policies we evolve and the measures we take, it is a pledge that must on no account be betrayed.

STATEMENT OF THE PRESIDENT OF THE SECURITY COUNCIL
ON THE INTERNATIONAL DAY OF PEACE
16 SEPTEMBER 1986

The International Day of Peace, observed today, marks an important occasion within the observance of the International Year of Peace, proclaimed during the commemoration of the fortieth anniversary of the United Nations. The many programmes and activities initiated in the context of the International Year of Peace reflect an ongoing commitment to the quest for world-wide peace and international security.

The United Nations Organization was founded "to save succeeding generations from the scourge of war". The Charter of the United Nations conferred on the Security Council primary responsibility for the maintenance of international peace and security. Today this principal mandate of the Council has become ever more pressing.

On the occasion of the International Day of Peace 1986 the Security Council reaffirms its deep commitment to the discharge of its primary responsibility under the Charter for the maintenance of international peace and security and renews its appeal to all Member States to help the Council to fulfil its functions effectively by accepting and carrying out its decisions in accordance with the Charter.

The prevention and removal of threats to international peace, as envisaged in the Charter, is a collective aim. In order to advance toward that condition of universal peace, all States must implement the purposes and principles of the Charter and seek effective means to realize the full potential of the United Nations for peace and justice.

On this International Peace Day I am confident that the Security Council is aware that in the present age the establishment of a lasting peace on Earth constitutes the necessity for the preservation of civilization and the survival of mankind, which underscores the urgent need to foster the principles of peace and to renew all our efforts in the interests of world peace.

本日ここに祝うことができました国際平和デーは、国連の40周年を記念して宣言された国際平和年において重要な機会をしるすものです。国際平和年にのっとり行なわれた数々のプログラム及び活動は、世界平和と国際間の安全保障を希求する上での前向きな約束のあらわれです。国連組織は“これからの世代を戦争の災難から救うため”に設立されました。国連憲章は、安全保障理事会に国際間の平和と安全を維持するという主要責任を授けています。今日、この理事会の最上の使命はますますもって急を要するものとなっています。

1986年の国際平和デーのこの機会をとらえて、安全保障理事会は、憲章下における国際間の平和と安全の維持という主要責任の確かな遂行を再確認するものであり、すべての加盟国に対して、理事会の運営が効果的に進むよう憲章にそくした決定を受入れ遂行するようにというアピールを再び起こしました。

国際平和に対する脅威の防止と除去は憲章にもしるされている通り、共同の目的です。全世界的な平和に向かって前進するためには、すべての国家が憲章の目的と原則を実行し、平和と正義のために国連のすべての可能性を実現するよう効果的な方策を模索しなければなりません。この国際平和デーにおいて、私は、安全保障理事会も認識しているように、地球上における永遠の平和の創造が現在においては文明の保護と人類の生存にとって必要不可欠のものであり、そしてそのためには平和の原則をつちかい、世界平和のために私たちすべての努力をより新しいものとする必要がますます求められているということを確信しています。

平和大学の概念



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITE POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES/AS/52/3/XI/1980
Teléfonos 09-1072 - 69-1324 - Apartado 199, Escazú, Costa Rica, C. A. Telex 2231 Mopan C. R.

Universitat Internacional de la Pau

SOME CONCEPTS OF THE UNIVERSITY FOR PEACE

The University for Peace is an international Institution devoted to seek peace through education with humanistic purposes and according to the principles of the Charter of the United Nations and the Universal Declaration of Human Rights.

Approved by the XXXV General Assembly on December 5th, 1980, its creation responds to one of the most pressing needs of modern times; the disarmament of the mind for the building of peace.

The goal of the University is to contribute to the great universal task of educating for peace by engaging in education, research, and the dissemination of knowledge to the promotion of peace.

Placed outside the organizational framework of the United Nations, but at the same time not simply a national project, the University For Peace is particularly suited, because of the academic freedom it enjoys, to set out and to deal with the problems of human survival through justice and peace.

Among its main subjects is the study of irenology, a new conceptual analysis that encompasses a philosophy of peace which must be developed and strengthened through education for peace, complementary areas of study include the Communication Media and respect and implementation of Human Rights.

Besides these elements, additional integrated fields of study include: the area of Natural Resources and Quality of life, the area of Scientific and Technological Cooperation; Conflict and Peace; Attitude, Analysis and Behavior; International Organizations; Mediation in International Conflicts; International Social Justice, and the study of two great world problems: External Debt and Refugees.

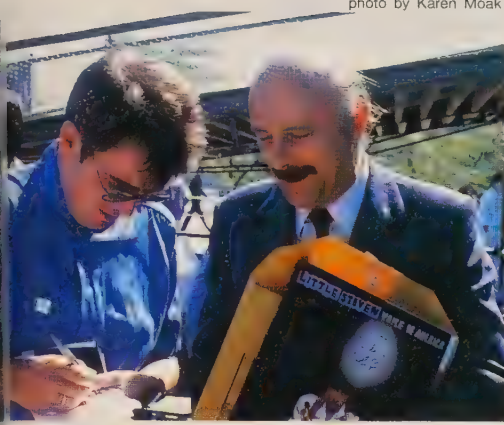
Education for Peace must make humanity abandon the idea that its culture, ideology or way of thinking is something which can be imposed on others through violence or by force. Only two alternatives can be seen on the near horizon, tragedy or education.

A problem of such magnitude, decisive for the human race, cannot be left in the hands of politicians or diplomats, nor does it depend solely on the ability to negotiate. This is an international and personal problem, and we must all take part in solving it. We must change our personal attitudes and act to prevent problems rather than reacting to them after the fact. In truth, we must apply the equivalent principles of preventive, rather than curative medicine, in all fields that deal with the integral development of mankind.

"AMONG PEOPLE AS AMONG NATIONS THE RECOGNITION OF THE RIGHTS OF OTHERS IS PEACE"

Benito Juarez

"Pax vis pacem, paxa paxem"



平和大学とは、人道的目的を持った教育を通じ、国連憲章と人権宣言の原理に基づき、平和を追求することに専心する国際機関である。

1980年12月5日の、第35回総会で承認されたように、その活動は、現代の最も緊急の要請のひとつである、平和のための心の非武装の要請に答えるものである。

平和大学の目的は、平和増進のための教育、研究、知識の普及に着手することにより、平和教育という偉大な世界的事業に貢献することにある。

国連の組織構造の外に位置づけられるが、同時に、単に国家事業ではないので、学術的自由のある平和大学は、正義と平和を通して、人類が生存していくという課題を提示し、扱っていくということに特にふさわしい。

それらの中で主要な課題は、平和教育を通じて発展し、強化される平和哲学をめぐる概念の新しい分析、情報伝達手段を含む補足的分野の研究、人権の尊重と充足の研究である。

これらの要素のほかに、付加的な統合的研究の分野として、天然資源とその埋蔵量の分野、科学的技術的協力の分野、戦争と平和の分野、行動、分析、慣習の分野、国際組織の分野、国際戦争の仲裁の分野、社会正義の分野、二大世界的問題である対外債務、難民の研究の分野がある。平和教育により、人類に文化、イデオロギー、考え方を暴力により、あるいは強制により、他に押しつけてはいけない、と教えなければならない。

人類にとってのこのような大きい、決定的問題は、政治家や外交官の手によって扱われてはならず、交渉能力のみに依存してもいけない。これは、国際的であるが、個人的問題であり、我々はみな、それを解くことに参加しなければならない。私たちは個人的態度を変え、事後にそれに対応するより、問題を未然に防ぐよう行動しなければならない。実際、私たちは、人類の完全な発展に関係する全ての分野で治療薬より予防方法の研究に専心しなければならないのである。



ミュージック・フォー・ピース・プログラムの目的



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITE POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES.35/55/5/XII/1980
Télefono: 40-1072 - 40-1324 - Apartado 199, Escazú, Costa Rica, C. A. Telex 2331 Macao C. R.

La Universidad de la Paz

OBJECTIVES OF THE MUSIC FOR PEACE PROGRAM

To establish a global communication and computer network of the most original and influential international thinkers and institutions active in peace efforts. This is happening by bringing together the necessary people, resources and public attention and, more specifically, will seek to:

1- Document and catalogue all the existing groups, projects and events that are moving us towards a peaceful world (The Peace Yellow Pages), including addresses, objectives, areas of endeavor, achievements, etc. Provide a complete listing of all works in related areas, such as human rights, international economic order, intermediate technology and energy in the context of the environment, environmental management and the quality of life, etc.

2- Develop a simple and effective communication and interactive link amongst these groups, and between them and the world media, or any others interested.

3- Establish international advisory boards, composed of respected specialists in each field, to analyze and advise on the issues being dealt with.

4- Establish a think-tank at the main campus of the University For Peace in Costa Rica, with a full time, selected group of distinguished men and women, who in consultation with the international advisory boards, will:

- * Redefine some important concepts, such as progress and development, and define others not so commonly utilized but just as important, such as cultural identity, cultural security, etc.

- * Analyze past wars to diagnose their causes and possible solutions, seeking to prevent future recurrences, as well as provide assistance for solving present ongoing conflicts.

- * Suggest ways of accelerating and implementing the world disarmament and demilitarization process.

- * Point out the inter-relationships existing between the objectives of the policies developed by some of the multinational corporations, as well as some of the world financial institutions, and their tendency to ignore social impact.

- * Provide a voice for those people of the world whose voices up to now have not been heard, basically minorities and indigenous groups.

- * Study ways to strengthen the United Nations in its world peace keeping role.

We believe that the United Nations has played a most significant role in the relations between the governments of the world. Now it has created The University For Peace to expand and strengthen a more direct relationship between the peoples of the world. To this end, we will expand the Gandhi Center, the communications division of the University For Peace, and convert the documents produced by this program into educational materials, which will then be disseminated throughout the world. (NDU '87)

"Si vis Pacem, Para Pacem"



影響力がある独自の現代の思想家たちと共に、地球規模のコミュニケーションとコンピューター・ネットワークを作り上げるために必要な人間、物質、大衆の注目をひとつにまとめるため、我々は次のような活動を行なう。

1. 平和世界に向けて活動する現存の団体、プロジェクトやイベント、そして人権、国際経済体制、環境に関する技術とエネルギー、環境管理、生活向上などの各分野での仕事をカタログ化し、住所、目的、分野、達成したことなどの完璧なリストを作り上げること。

2. これらグループ、世界のメディア、そして興味を持っているほかのグループなどを結ぶ効果的なコミュニケーションの方法と相互作用の密接な関係を作りあげること。

3. 各分野で活躍中の専門家で構成された国際顧問委員会を結成し、問題事項に関する分析とアドバイスをしてもらうこと。

4. コスタリカの平和大学のメイン・キャンパスにシンクタンクを設立し、常勤の男女グループが国際顧問委員会と相談して、以下のことを行なう。

* 進歩と発展といったコンセプトを見直し、文化的なアイデンティティーや文化的安全といった、一般には取り上げられないが重要な課題について考える。

* 過去の戦争を分析し、原因と可能な解決法を調査し、将来的に戦争を防ぐ方法を求め、現在進行中の争いを解決するための提案を行なう。

* 世界の軍備撤廃と非武装化促進の方法を提案する。

* 多国籍企業や世界の経済団体が発展させた政策面の利益の相互関係や、彼らが社会に与えるインパクトを無視する傾向を指摘する。

* マイノリティや土着の人々といったこれまで声を大に発言する機会がなかった人々の意見に耳を傾けること。

* 世界平和を守る国連の役割をさらに強化するための方法を研究すること。

国連はこれまで、世界中の政府間で最も重要な役割をになってきた。

そして、今、世界の人々のあいだのより直接的なつながりを広め、強化するために、平和大学を設立した。

このために、我々は、国連大学のコミュニケーション専門機関のガンジー・センターを拡大し、その研究成果を教育プログラムに組み込み、それを世界に広めるつもりでいる。



photo by Karen Moak



photo by Karen Moak

ピーター・カブリエルからのメッセージ

Hello Japan,
I am very happy Japan is going to be the
host for "Hurricane Irene". It can be a very powerful
event and will be exciting for me as it is
the first time I will come to
your country. See you soon
Peter Gabriel



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITÉ POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES./35/55/G/XII/1990
Teléfono 40-1072 - 40-1324 - Apartado 199, Escazú, Costa Rica, C. A. Telex 2331 Macasa C. R.

Asociación Internacional de la Paz

HURRICANE IRENE PRESS CONFERENCE Message from Peter Gabriel

I have been working with the University For Peace for two years.

It is because I believe that out of this organization a powerful movement is beginning to form; a movement that is based on the will and the power of the people of this world, not dependant on the governments or their armies.

"Peace is too important to be left only in the hands of the politicians and diplomats" - so goes the philosophy of the university. We want participation - we want the word "peace" to become active not passive.

The military has built a formidable network of resources and talent. In the same way, we wish to unite and develop those working for a peaceful world. We want to see a network of men and women of all countries, using this nucleus to give a voice and a strength to their work, not for death and for war but for life and for peace. It will include work on human rights, justice, the environment, poverty, starvation and most of all education.

This event was initiated by the Music For Peace Team this summer, with the generous support and help of Japan-Aid.

From these concerts, we wish to raise the funds, amongst other things to provide the sophisticated computer data-base which will operationally lie at the heart of the network.

We need the support of all the journalists in this room to give this event the push that it needs. We need the musicians of Japan to show that they are as concerned about the world as the musicians in America and Europe.

This event does not belong to the musicians, it does not belong to Japan-Aid, it does not belong to the University For Peace, it belongs to anyone who will work for a future, for a future for their children.

Hurricane Irene is on her way to sweep across Japan.

"Si ais pacem, para pacem"

ほくはこの2年間、平和大学の仕事をしてきた。という
のも、この組織を通して、力強いムーブメントが形づく
られはじめたと確信するからだ。このムーブメントは、
政府や軍隊に依存することなく、世界中の人々の意志と
力によっている。

「平和は、政治家や外交官の手だけに委ねるには重すぎ
る」これが、この大学の考え方だ。我々は参加者を募って
いる。「平和」という言葉が、受け身ではなく、積極的な
ものになってほしいと願っている。

軍隊は、財源や才能の膨大なネットワークを築き上げて
きた。同じように、我々も平和な世界に役立つものを結
集したいと思っている。あらゆる国の男女で作ったネット
ワークを使って、死と戦争ではなく、命と平和に寄与
する人々の仕事——人権、正義、環境、貧困、飢餓、そ
してなによりも教育に関するもの——に声援と力を与
えたい。

このイベントはこの夏、ジャパン・エイドの寛大な力添
えがあって、ミュージック・フォー・ピースのチームによ
って発案された。

これらのコンサートを通して基金を集め、ネットワー
クの中心部で機能する高性能のコンピューター・ベースな
どを設置したいと思っている。

このイベントを成功させるために、我々は、すべての
ジャーナリストに協力を要請する。日本のミュージシャン
は、アメリカやヨーロッパのミュージシャンたちと同じ
ように、世界の動きについて関心を抱いていることを示
してほしい。

このイベントはミュージシャンにも、ジャパン・エイド
にも、平和大学にも属さない。これは、未来のために、
子供たちの未来のためになんらかの働きかけをしている
人々のものだ。

ハリケーン・アイリーンは、日本全土をまもなくかけめ
ぐるだろう。

ピーター・カブリエル



リトル・スティーブンからのメッセージ



UNIVERSITY FOR PEACE
UNIVERSITE POUR LA PAIX
UNIVERSIDAD PARA LA PAZ



ASAMBLEA GENERAL ONU RES./35/55/G/XII/1980
Téléphone: 49-10-72 - 49-13-24 - Apartado 199, Escazú, Costa Rica, C. A. Telex 2331 Macasé C. R.

Atto Internazionale de la Piz

HURRICANE IRENE PRESS CONFERENCE
A message from Little Steven

I am very much looking forward to my first trip to your country. I haven't had much chance to speak with the Japanese people and I am anxious to do so - to learn from you and to find the common ground that exists amongst all peoples from all countries.

I believe right now the world, and particularly Japan, has reached a critical point in its history, while we continue to surpass our own extraordinary technical achievements every day and with greater than ever economic strides being celebrated by a fortunate few, the evolution of mankind as a whole has come to an almost complete stop. This is an unacceptable contradiction we must take responsibility for and begin to take action to correct.

It is in our definition of what "progress" is that our road to understanding must begin. Can our success continue to be measured only by the failure of others? Can any amount of profit justify the permanent pollution of the earth? Can we continue to blindly venture into countries foreign to our own to extract their resources without any regard or respect for the traditions and welfare of the local indigenous people?

As we look around all we see is the grey haze of fear, anger, oppression, manipulation; we see polarized political extremes; we see a nuclear arsenal ready to explode; we see nuclear waste with nowhere to be disposed; we have toxic chemicals in our air, land, water and food at levels (we are told) that are "acceptable" amounts; we see less and less people able to read; we see traditional spiritual values of the indigenous peoples of the world being systematically exterminated and we see how hunger and sickness continue unabated. This is the legacy of our "progress".

If the governments of the world are unable to show leadership in the redefining of what progress should be, which must happen immediately if there is to be a future for mankind, then it is up to the peoples of the world to wake up, stop waiting for someone else to lead them, communicate with each other more directly and begin to get the job done.

It is my hope that the University For Peace, with your support and mine, will help fulfill the promise that is within the reach of all of us - a realization of the potential of humanity.

Solidarity

Little Steven
"Si vis pacem, para pacem"

初めての日本訪問はとても楽しみだ。これまで、日本の人と話すことはほとんどなかったので、これをいい機会にしたいと思っている。あなた方から学ぶべきこともあるだろうし、世界中の人々に共通するものも見つけられるだろう。

今現在、世界、特に日本はその歴史の中でも大変重大な局面を迎えている。日ごとに達成される優れた技術的偉業、幸運な僅かな人々が満喫する経済発展。人類の進歩はまるで止まってしまったようだ。このようなひどい矛盾は我々の責任であり、我々はこの状態を正しい方向へ導くための行動を起こさなければならない。

何をもって「進歩」とするか。まず、これを理解することからすべて始まる。成功とは、常に他人の失敗の上に成り立つものなのか。利益が上がれば、地球上の汚染も正当化されるのか。よその国に手当たり次第に侵入し、そこに住む人々を無視して資源を取ってしまっているのだろうか。

まわりを見まわせばどこもかしこも、恐怖、怒り、抑圧、搾取といった灰色のかすみに覆われている。極端に偏向した政治団体、いつでも爆発可能な核兵器、捨て場所のない核廃棄物、空気中、土地、水、食料にさえ入り込む有害な科学製品、そして、この程度の量なら「安全だ」という人たちが、ますます高くなる文盲率、飢餓と病気の蔓延。これが、我々の「進歩」が生み出したものだ。

人類の将来のためには、進歩というものをただちに見直しにかかるべきなのだ。

しかし、それが政府の手ではできないというなら、世界中の人々が目ざめ、自らの手で始めなければならない。人々がもっと直接的なコミュニケーションを計り、やるべきことをやりはじめなければならない。

平和大学があなたがたや多くの支援とともに、約束を達成できることを願う。それは決して我々の手の届かない約束ではない。人類の可能性を認識することなのだから。

リトル・スティーブン

Solidarity!
Little Steven



ハワード・ジョーンズからのメッセージ

HOWARD JONES MESSAGE FOR UPEACE

"THE THING THAT INTERESTED ME SO MUCH ABOUT HURRICANE IRENE AND JAPAN AID IS THAT THIS IS A FABULOUS OPPORTUNITY TO BE INVOLVED IN SOMETHING WHICH GIVES THE ACTIVE PURSUIT OF PEACE AND EXCITING AND PRACTICAL OUTLOOK.

THE PURSUIT OF PEACE MUST BE AT THE TOP OF EVERYONE'S LIST IF THIS WORLD OF OURS IS TO ACHIEVE IT'S FULL POTENTIAL AND NOT END AS A LIFELESS ROCK FLOATING IN SPACE. THE UNIVERSITY FOR PEACE BECAUSE OF IT'S UNIQUE POSITION OF NEUTRALITY IS A GREAT VEHICLE TO BE RISING ALONG WITH.

I HOPE THAT EVERYONE ATTENDING AND VIEWING THE CONCERT WILL FEEL THAT WE ALL ARE INVOLVED IN SOMETHING MUCH MORE THAN A MUSICAL EVENT. WE ARE FOCUSING ON THE GLOBAL OBSTACLES WHICH STAND IN THE WAY OF PEACE, AND THE SETTING UP OF A COMPUTER BASED COMMUNICATIONS NETWORK SHOWS US HOW WE CAN APPLY TECHNOLOGY, OUR GREAT THINKERS AND OUR RESOURCES, TOWARDS BATTLING THESE OBSTACLES.

HERE'S TO THE CONCERT AND MAY IRENE BRING US FABULOUS WEATHER."

HOWARD

ハリケーン・アイリーンとジャパン・エイドに熱烈な関心を抱いた理由といえば、これが実にエキサイティングかつ実践的な形で平和を積極的に追求するものだからだ。我々のこの世界が最大限の能力を発揮し、宇宙をさまよう生命体のいない岩と化するのを避けるためにも、平和の追求は誰もが一番に考えなければならない。きわめて稀な中立的な立場をとる平和大学は、そのための最高の手段といえる。

コンサートに参加する誰もが、たんなる音楽イベントに参加している以上のものを感じてくれるよう願う。我々は平和への道に立ち足る地球規模の障害物に焦点を合わせると同時に、コンピューターをベースとしたコミュニケーションのネットワークを作ることによって、テクノロジーや我々の時代の偉大な思想家たち、そして我々の持つ資源がこれら障害と戦うための有力な手段になることにも注目している。

コンサートの成功とハリケーン・アイリーンが素晴らしい天候を運んでくれることを祈ってやまない。

ハワード・ジョーンズ



ハリケーン・アイリーン記者会見



1986年10月13日、キャピトル東急ホテルにおいて、平和大学が日本において行なう活動の概要を発表する記者会見が開かれた。出席者は、以下の通り、平和大学およびジャパン・エイド・コミッティーのメンバーが中心となっている。

バリー・ロバーツ(平和大学総長補佐、ミュージック・フォー・ピース・プロジェクトのチーフ・コーディネーター)

加藤宏史(平和大学総長常任顧問、日本平和大学委員会委員)

服部年伸(ジャパン・エイド・コミッティー代表、日本平和大学委員会委員)

原 滋(東京放送事業推進局長)

以下は記者会見における発表の概略である。

「平和大学は、『平和を欲するならば、平和のための教育をしなければならない』という信条のもとに機能し、この教育の過程が社会のあらゆるレベルを通じて行なわれるべく、あらゆる創造的な方法の探究に挑戦している。その結果、今回、地名度も高くかつ人気のあるミュージシャンたちの全面的な支援協力を得て、『ミュージック・フォー・ピース』と称する計画に着手した。そして、平和大学の長期的活動の一環として、ジャパン・エイド・コミッティーと共に、1986年12月19、20、21日、東京において、教育的でしかも楽しいピース・フォーラムとチャリティー・コンサートを開催することを決定した。この模様は全世界にテレビ中継される予定である。また、これは国際平和年公式記念行事の一部でもある」

Miyako Hotel Tokyo



最高のゆとりとくつろぎを

都心とは思えない緑豊かな閑静な環境、港区白金台。

その緑に美しく映える「都ホテル東京」は、野生のリスも時折姿を見せる広大な日本庭園に囲まれた、美しいホテルです。

直線美をいかした外観はアメリカの著名な建築家ミノル・ヤマサキ氏の設計、

内装と庭園の設計は元芸術院会員故村野藤吾氏の手によります。

そして、日本の伝統美を織りまぜた落ち着きと温か味のあるインテリア———。

「都ホテル東京」は、みなさまにくつろぎとやすらぎをお約束いたします。

緑ゆたかな美しいホテル———

都ホテル東京

〒108 東京都港区白金台1丁目1-50(清正公前)

お問合せ・ご予約… ☎ (03) 447-3111

〈交通のご案内〉 国電田町・品川・五反田・目黒各駅から車で約5分。 浜松町駅(モノレール)から車で約15分。 東京駅・羽田空港(芝浦ランプ経由)から車で約25分。 田町・三田駅経由浜松町駅・銀座4丁目、目黒駅へ無料ホテルバス運行。 浜松町バスターミナルよりホテルへ無料ホテルバス毎日4便運行。

〈館内のご案内〉 ●客室500室 ●9つのレストラン・バー ●20タイプの宴会場 ●結婚式場 ●写真室 ●美容室 ●着付室 ●理容室 ●ショッピングアーケード ●デリカショップ ●ヘルスクラブ(25㎡室内プール・トレーニングルーム・サウナ) ●駐車場完備

〈近鉄・都ホテルチェーン案内所〉 札幌(011)241-3631 仙台(022)264-3541 東京(03)572-8301 名古屋(052)583-1877 京都(075)681-0018 大阪(06)341-3323 広島(082)246-9221 博多(092)715-0001



The University for Peace is an International Institution devoted to seek peace through education with humanistic purposes and according to the principles of the Charter of the United Nations and the Universal Declaration of Human Rights.

Approved by the XXXV General Assembly on December 5th, 1980, its creation responds to one of the most pressing needs of modern times: the disarmament of the mind for the building of peace.

The goal of the University is to contribute to the great universal task of educating for peace by engaging in education, research, and the dissemination of knowledge to the promotion of peace.

Placed outside the organizational framework of the United Nations, but at the same time not simply a national project, the University for Peace is particularly suited, because of the academic freedom it enjoys, to set out and to deal with the problems of human survival through justice and peace.

To attain its objectives, the University prepares its programs according to problem areas, thus ensuring a multidisciplinary approach.

The epistemological axis of the University for Peace is peace, education for peace and human rights. Other problems which have a direct or indirect bearing on peace, such as environment, natural resources, technology, transnational corporations and others, will not be approached in a conventional or frontal fashion, but will be analysed in terms of their impact on peace.

The University for Peace is international in character, and it enjoys autonomy and academic freedom as declared in the Charter of the University. It is constituted by the Council, the Rector, the Vice-Rector, the Chancellor, an international Foundation for financial support, the International Center for Documentation and Information for Peace (CEDIPAZ), and an International Advisory Board.

The Council is appointed by the Secretary General of the United Nations in consultation with the Director-General of UNESCO and it is constituted by ten representatives of the international academic community (two for each continent), two representatives from Costa Rica, the Secretary-General of the United Nations University, and three representatives of the student body.

Students from all parts of the world are admitted by the University, after complying with the requirements established by the Council. The University grants master's degrees and doctorates, under terms and conditions established by the

Council. Seminars, meetings and international congresses with the participation of specialists in the specific goals and academic fields of the Institution, are part of the dissemination program of the University.

The Charter of the University considers the possibility of entering into association or concluding agreements with governments or similar organizations, and international or private organizations in the field of education and in particular, with the United Nations University and UNESCO, both of which have been in close relation with the University since the preliminary stages of its creation.

The campus is located on an area of 700 acres, belonging to the University for Peace, which were donated by the Costa Rican government for that purpose. Construction of the main building was finished in November, 1982, and plans for new constructions are already in study.

An area of 500 acres has been set aside to be preserved as virgin forest, and it will be the main source for programs on ecology and environmental education. The rest of the University buildings will be set up on the remaining 200 acres. The land, donated by the Costa Rican government, had been inherited to it by the late Costa Rican philanthropists Mr. Cruz Rojas Bennet, who conserved the primary forest considered priceless and at present, unique in Central America.

The University for Peace will progress by stages, according to its own possibilities and as different organs which constitute it are incorporated to the process. It is estimated that within 10 years, it will be able to have approximately 2000 students, and the corresponding administrative and academic staff, with the appropriate financial resources. According to article 18 of the Charter of the University, such resources shall be derived from voluntary contributions made by governments, by intergovernmental organizations and the foundations and other nongovernmental sources, and from tuition and related charges.

Considered as a basic investment for future generations, the University has received universal moral support and contributions. Several United Nations Member States have subscribed to the International Agreement for the creation of the University for Peace, which was put in effect on April 7, 1981. These nations have considered the fact that, throughout history, the world has only seen the establishment of institutions for military training, while there is no organized educational system aimed at establishing the fundamental principles of peace.

平和大学は、国連憲章および国際人権宣言の原則に基づき、人道的手段を用いた教育を通して平和を希求する国際的機関である。

1980年12月5日、第35回国連総会で決議されたこの機関は、平和の建設のための人々の心の軍縮化という、現代の最も必要とされるニーズに応えようとするものである。大学の目指すものは、平和をおし進めるために、教育、研究、知識の普及に従事することによって、平和教育という大きな普遍的目的に貢献することである。

国連の組織の枠外に位置づけられてはいるものの、同時に、単にある国家のプロジェクトとは異なり、平和大学は、その享受している学問的自由からも、正義と平和を通じて人類の生存に関する問題を提起し、扱うことに適している。

大学は、その目的を達成するため、学際的アプローチにより、それぞれの問題領域に従ってプログラムを準備する。大学の認識する活動の中心は、平和、平和のための教育、および人権である。直接的、間接的に平和をおびやかすような他の問題点、例えば、環境、資源、技術、あるいは多国籍企業等といった問題には、通常行なわれている方法でアプローチをするのではなく、平和に対する脅威という観点から分析を行なう。

平和大学は、その性格としては国家の枠を超えており、平和大学憲章に宣言されているように、自治と学問的自由を享受している。大学は、理事会、総長、副総長、学長、国際的に金銭的援助を行なう基金、平和のための文献および情報センター、ならびに国際審議会によって構成されている。

理事会は、ユネスコ事務局長の諮問に基づき、国連事務総長によって指名される。その構成は、各大陸おのおの2名ずつ計10名の学識代表、コスタリカより2名の代表、国連大学の事務局長、および学生団体の代表3名である。

学生は、理事会の定める基準を満たす者であれば、世界中どこからでも参加を認められる。大学は、理事会の定める

基準に基づき、修士号及び博士号を授与する。特定の目的や学問分野の専門家が参加して開催されるセミナー、会合および国際会議は、大学の知識普及プログラムの一部である。

平和大学憲章は、各国政府や同様の組織、および教育分野における国際的民間団体と協力し、協定を結ぶことを想定している。特に国連大学ならびにユネスコとは、平和大学の設立当初から緊密な関係を保ってきている。

平和大学のキャンパスは、その目的のために、コスタリカ政府より寄贈され、700エーカー（約2.83平方キロ）の広さを持っている。本部校舎の建設は1982年11月に終了し、現在、新校舎建設の計画が進行中である。

キャンパスのうちの500エーカー（約2平方キロ）の土地が原生林のまま保存され、ここは、エコロジーや環境教育のプログラムの中の中心的資源として利用される。そして残された200エーカーの土地に大学の校舎を建設する。コスタリカ政府から寄贈されたこの土地は、現在では中央アメリカでは唯一ともいえる非常に貴重な森林であり、この森林を保護したコスタリカの博愛主義者であった故クルーズ・ベネット氏から受け継がれたものである。平和大学は、それ自身の可能性と、構成する他の機関との協調とによって発展してゆく。ここ10年の間には、2000人の学生を受け入れるようになり、それに見合うだけの事務局員と教員、そして十分な財源を持つことになる。平和大学憲章第18条によれば、その財政は、政府、政府間組織、基金、他の非政府的財源からの自発的寄付と、学費およびそれに関連する諸収入によってまかなわれる。

将来の世代への基本的投資として、平和大学は、普遍的な道義的支持と助力を受けている。いくつかの国連加盟国は、1981年4月7日に発効した平和大学の建設に関する国際協定に署名している。それらの国々は、過去の歴史において世界は軍事訓練のための施設のみを建設し、一方平和についての基本原則の確立を目的とした組織的教育システムを持たなかったと認識している。



Costa Rica is located geographically in Central America; to the North it has a boundary with Nicaragua, to the South it shares a border with Panama, to the East with the Atlantic Ocean and to the West with the Pacific Ocean. It has an area of 50.900 km². With pleasant temperatures during most of the year, Costa Rica's agricultural lands are extremely productive.

Costa Rica can be presented historically as a cultural cross-road which has given shelter to Indian cultures of strong Maya, Aztec and Chibcha inspiration. The arrival of the Spanish during the colonial period, and later arrivals of European immigrants, Black minorities, Chinese and others, have contributed to shape a culture open to the outside. The country's regional, climatic and ecological variety, as well as its two oceans and mountain ranges, allow us to suppose that these aspects would contribute greatly to the success of undertakings such as the creation of the University for Peace, which would generate research within ideal micro climates, as well as within a cultural reality open to positive and universal influences. The University for Peace takes advantage of the best of the country; researchers, professors and students from all over the world would be welcome to it, thus converting it into a true crucible of cultures.

Costa Rica appeared as an independent nation in the year 1821, after a liberation process took place in Guatemala, headquarters of the Captaincy-General. Later, history would mold a special type of human being who loves, above all, to live in peace with himself and with his neighbors. Costa Rica's peace has been reached thanks to the conscientious work of its citizens.

One of the vital aspects in understanding the Costa Rican reality lies in the analysis of the efforts made since Independence towards bettering the educational possibilities of the population. The Superior Governing Board declared in 1823

that public instruction is the basis and the principal foundation for human happiness and common prosperity. The central role that this concept implies is very clear: the Constitution of 1869 would establish that primary education be free, compulsory and paid for by the State.

Its peaceful life, its evident social, political and economic progress, as well as the respect for the human dignity of its citizens, constitute the basis for the proposal to create the University for Peace at an international level. An effective democratic system and the constitutional abolition of the army as an institution in 1949, contribute to the understanding of its historical singularity.

Thus, after one hundred and fifty eight years of independent life dedicated to educational and cultural improvement, there came forth the great initiative of creating a new educational experience, this time with a global projection in the permanent search for an active peace, sole guarantee of survival for the human race.

Our wish is that the University for Peace be, above all, a product of international participation. Costa Rica wants the University for Peace to be the union of the best experiences and criteria, and for it to be as global and universal as the desire for peace and the United Nations's obligation to reach that peace.

Costa Rica considers that the University for Peace would effectively contribute to the strengthening of world peace. Its research and teachings, within the concept of "EDUCATE FOR PEACE", produce models for society as well as concrete instruments in the reduction of tensions. Men and women, the principal subjects in its actions, have a propitious and creative environment, coupled with the direct interchange of different cultures, in which to produce the answers necessary for the attainment of that distant and ardently desired goal.



コスタリカは地理的には中央アメリカに位置し、北はニカラグアと、南はパナマと国境を接している。東は大西洋、西は太平洋に面している。面積は50900平方キロである。1年を通じて気候は温暖で、農地は非常に肥えている。

コスタリカは歴史的には、インディアン文明を強力なマヤ、アステカ、チブチャ文明から守った文化の交差点として位置づけられる。植民地時代にスペイン人が来、その後ヨーロッパ人が移住し、少数の黒人、中国人などが外国に対してオープンな文化を形成することに貢献した。この国の地域特有の気候や生態の多彩さ、ふたつの海と山脈を持つといった特徴が、平和大学建設のような事業の成功に多大に貢献していることは想像に難くない。

平和大学は、この国の最もよい面を享受している。つまり、世界中からの研究者、教授、学生は、それを自由に使い、本来的な真の文化のるつぽに転換してゆくのである。コスタリカは1821年、グアテマラ総督領の独立の宣言によって独立国となった。その後、歴史はコスタリカの人々を、自身が隣人を愛し、何よりも平和に暮らしたいと願うような特別なタイプの人々につくり上げていった。コスタリカの平和は、市民の良心的な活動の甲斐あって達成されたものである。

コスタリカの現状を理解する上で、重要な側面のひとつは、独立以来なされてきた国民の教育機会の拡大への努力に関する分析である。1823年に最高統治委員会は、人民の教育は人間の幸福と国家の繁栄の基本であり基礎であると宣言した。この原則の持つ中心的な役割は明確であ

る。1869年の憲法は、初等教育は「無償、義務、かつ国家が経費を負担する」と定めている。

この国の平和な生活、めざましい社会的、政治的、経済的発展は、国民の人間としての尊厳の尊重とともに、国際的なレベルでの平和大学を設立するという提案の根底をなしている。有効な民主主義のシステムと、1949年の機関としての軍隊の憲法による廃止は、この国の歴史的特殊性を理解する上で重要である。

このように、158年間の独立を教育と文化の進歩に捧げたのち、このたび、人類生存の唯一の保障である積極的平和の恒常的追求における世界的な動きとともに、新しい教育の実践への大いなる率先の時が来たのである。

我々の希望は、何よりも平和大学が国家を超えた参加を生みだすことである。コスタリカは、平和大学が最も有益な経験と規範とを融合させるものであり、それが平和を希求する欲求や、国連の平和を達成する義務と同様に地球的であり、普遍的であってほしいと願う。

コスタリカは、平和大学が世界平和の強化に効果的に寄与すると信じている。

「平和のための教育」の理念に基づき研究及び教育を行なうことは、社会への基準づくりと共に緊張緩和の現実的機関をつくり出すことである。平和への行動の基本的対象であるすべての人々が、理想的で創造的な異文化同士の直接交流のできる環境を持つことにより、遠くはあるが、強く望む目標の達成に向けて必要な答えを見つけることができるであろう。



SONY

その胸に、
いい音を
聴かせたい。

見るもの聴くもの、吸収力が大きい少年少女。
音楽の心も質の良い音で吸収してほしいものです。
ディスクマンはCDの素晴らしい音を手軽に体験できる
ポータブルCDプレーヤー。ソニーの技術によって、
クリアな音が、部屋の中や、外や、車の中でも楽しめます。
伸びやかさを育む、伸びやかな音がここにあります。

《音楽と、深く楽しくつきあえる。》

- デジタルフィルター採用でピュアな再生。
- 曲の好きな部分を繰り返して聴けるA↔B区間リピート、
聴きたい曲を高速で頭出しするAMS、聴きたい部分を
確認しながら探せるミュージックサーチ、など充実の多機能。

《持ち運べば、いい音といつも一緒。》

- 19.8mmの薄さと420gの軽さが手軽。
- 付属の専用充電電池パックで長時間曲を楽しめる。
- 省電力設計。

あなたにいちばん近いCD。

Discman

D-100 白と黒で発売中 ¥49,800

※ 付属/ACアダプター、専用充電電池、
キャリングケース、キャリングベルト、接続コード



高浜虚子が和服姿でロンドンを尋ねてペンクラブで日本の俳句の話をしたことがあった。

其の時作られた句に

雀等の人を恐れぬ国の春

というのがあり、虚子の五女夫妻（高木氏）がキューガーデンに句碑を建て寄付されたことは3年前のことであった。

いつも此の句を思い出して何故英国の雀は人を恐れぬかが疑問であった。

スウェーデンの公園でも、シカゴの公園でも餌をやればすぐ人のそばまで来、掌にのせた餌さえもついばむ様な人なつこさを自分でも経験した。又、早稲田大学の英文科の東浦教授も其の著書で同様のことを指摘されている。

其の後いろいろと調べてみると、英国の雀は主として、Ploceidae、ハタオリドリ科のスズメ属科(Passer)であり、英国雀(P.domesticus又はHouse sparrowというのであるが)は、1871年北米に連れて行かれ、種々の土地の雀と混合し90種にも及び、其の中でもHouse sparrow、Lark sparrow、Grasshopper sparrowが人なつこいことがわかった。

しからは日本のスズメは、Passar montanus、ニューナイスズメ、P.rutelansが主であるが、どちらも秋になると、人間の主食である稲を大群をなしておそい荒しまわることは有名である。米作は弥生時代（2000年以前）から作られており、恐らく日本の雀はこの時代からいたので、種々の退治法、音響による方法、案山子、カスミあみ、おどし銃、とりもちなどいろいろと使われたので、人間は恐ろしいものという観念がスズメにこびりつき、その遺伝子の中につたわっているという考えにいたり様々な方と話し合った結果こんな結論となった。し

かし小さい卵のうちから飼っているものはちがうと思う。

動物は音、或は他の方法で連絡をとるが人間の様にしゃべることは出来ない。犬でも猫でも、脳細胞は決して少なくはない。言語中枢はどうなってるのであろうか？誰もむずかしいと答えるばかりである。

人間も初めは言語がなく、次第にこれを見出し使い始め各地方が各々特別な言語を使う様になったことはよく知られていることである。

言葉の通じない鳥獣はお互いに争うことがあるのは勿論であり、主として食物に関してであろうが、人間は言葉がしゃべれるし、通訳すればお互いによく話し合いお互いに理解し合えば争いをさけることが出来るのではあるまいか。この小さな地球上で少しの利害で殺人行為まで行なわれることは余りにもおろかではあるまいか。理性、道徳、あらゆることの理解できる知識、それが平和を保てぬのは不思議でならない。

空を見ればいつ大きな隕石が落ちて来て地球をこわすかも知れない。氷河時代の様に寒冷がおそい動植物が皆生存しなくなる、或は巨大な北南極の氷がとけて地球が水底にもぐるかも知れない。

或は火山の多い国では噴火のため国が消失したり、海底に沈下し、地球が水の底に没するかも知れない。ノアの箱船のようなことがあるかも知れない。

そんな危険な地球上に住んでいて「争う」ことは何とおろかなことであろう。自然と話し合うことは出来ないが、話し合える人間同士が平和を愛し平和の中にこの異変の少ない世をおくことは出来ない筈がなく、又しなければならぬことであろうと思う。

田中憲二 順天堂大学名誉教授

1985年7月13日に行なわれたライブ・エイドは、アフリカの飢餓を救うために世界中から7千万ドルもの義援金を集めました。現在までに、1億ドル以上の寄金がすでによせられていますが、今なお、ライブ・エイド関連事業を通じて追加される金はかなりの額に達しています。その上、政府筋からも2~30億ドルの寄金が集まったとのこと。

一方、日本において集まった額は、わずか70万ドル程度に足りません。これはたぶん、アフリカ被災がヨーロッパとアメリカ社会にもたらす影響に比べて、日本に対する影響の程度が極めて小さかったということに起因しているのかもしれませんが。すなわち、大多数の日本人はエチオピアなどの国の政治、経済、文化的状況にうとく、そのため、メンギツ政権のひどい独裁政治のためライブ・エイドの甲斐もむなしく、救援物資と医薬品の多くが暴君勢力に荷担している地域のみで配られているということに気づいていないからです。ひとことで言えば、メンギツ政権は国民を支配する道具として食料を利用しているのです。しかし、それでも、これら食料品を送り届けることは、それが確かに幾名かの人命を助けることにつながるのであれば正当化されるという意見もあります。日本人は、たぶん西欧人よりも動機づけということにくぶんこだわって、それゆえにチャリティー的なものに渋るのでしょう。テレビを媒介とするチャリティー電話においてもその歴史は短く、そのためテレビによるライブ・エイドの呼びかけにも満足に応じられなかったのでしょう。加えて、日本人の間には毎年慈善・宗教施設に寄付をするという習慣がありません。新年に神社でおさい銭を投げるということは、教会で多額の寄付を行なうこととは同等ではないのです。また、朝のラッシュ時に駅前で立っているボーイスカウトの少年たちに、カンボジア難民を救うためにくばくかのコインを寄付することも、定期的に慈善団体に寄付を行なうこととは違ってきます。日本の企業も、チャリティーのために寄付を行なったり、公的な文化事業を無料で支援したりという習慣

は持ちあわせていません。メトロポリタン歌劇場での無料公演やサイモン&ガーファングルのコンサートに匹敵するものはなく、その代わりに日本の企業は、聴衆に“企業助成”のコンサートに法外な値のチケットを買わせて、企業の“高品質の”イメージを持ちあわせているアーティストを呼びます。米国とは違い、日本には視聴者の援助を受けてはいるが、その支援は義務ではないラジオやテレビ局などはありません。

世界では、音楽家や歌手が、政治候補者のためやその他さまざまな理由で並みはずれた額の資金を集める力を持っていることが繰り返し証明されてきました。しかしながら、球場やホールで聴いている、あるいはテレビで見ている聴衆が、なんとすばらしいショーを見たかと感激し、そのうち幾名かでも何らかの意義ある目的のためにお金と時間を喜んで寄付しようとするかということ、これは疑問です。ライブ・エイドの呼びかけに対する日本人の冷めた反応をみて、私は、ジャパン・エイド・コンサートからあがる基金についてはあまり期待をしないでおく方が無難だと思います。しかしながら、ライブ・エイドは明らかに、飢餓に苦しむアフリカの窮状について人人の意識を高めるということについてはプラスとなりました。そのため、このジャパン・エイド・コンサートについても、私たちのすべきことは、平和活動に対する音楽の役割の重要性を人々に理解してもらい、人々の関心を（特に日本において）より平和な世界を将来創りあげるために必要とされる幅広い活動に注力させることだと考えています。

今日および将来にわたり、多くの日本人音楽家たちが立ちあがり、平和な世界を築くために努力している人々に対して尽力を惜しまないことを期待します。そして、平和大学の活動、および同じ目標に向かって無類のグループのより密接な結びつきにより、この世界から人類の不幸が消え去ることを。

ハワード・ゴールドバーグ

東京外国語大学社会科学科政治学助教授

Charityは、慈善、或いは博愛などと訳される。海外では、あらゆる種類のチャリティーが、さまざまな機会に行なわれ続けている。しかし、なぜか私たち日本人には、いまひとつピンとこない部分がある。歴史的な影響、日本が島国である、他さまざまな理由が考えられるが、最も大きな原因は、Charityとは、聖書に説かれた愛“Christian Love”であることから明らかなように、キリスト教の布教が行き渡らなかったせいではないか。慈善という訳語も固苦しくてよくない。

もっとカンタンに考えてみよう。老人に席をゆずる。子供たちを交通事故から守る。身障者に手を差し伸べる。これらごく当たり前の行為、日常生活にある思いやり、小さな親切、これこそがチャリティーではないだろうか。富めるものが貧しい者に与えるという公式にとらわれるべきではない。

ロックとチャリティーの間にあるちょっとした違和感も素直にとらえれば、たちまちにして氷解するのではない。こうした催しに参加した皆さんそれぞれが、たとえ数時間であっても、この問題をもっと素直に考えることができれば、そこに新しい価値観が芽生えることだろう。

ロックン・ロールの草創期(1950年代半ば)においては、R&Rとチャリティーほどそぐわないものはなかった。R&Rは、社会への反抗、大人への抵抗から生まれた音楽であったからだ。

チャリティーなんて、ピング・クロスビーかボブ・ホープにまかせとけばいい——俺たちはやりたいことをやるんだ、その姿勢が若者の共感呼んだ。1960年代に入ってもそれは変わらず、俺はアンディ・ウィリアムスじゃねえぞ、という声が聞こえてきそうだった。

しかし、1980年代に入り、ロック・ミュージシャンの意識も大きく変わっていった。バンド・エイドに始まり、USAフォー・アフリカ、サン・シティなどの活動は、めざましいものがある。このチャリティー・ムーブメントは、ロック・ミュージシャンの提唱であり、表現であったからこそ世界中の若者の共感呼んだのである。意識の変革にまで迫るのは、若者と一体感をもつ彼らにこそ果たせたことなのだ。

政治家や俳優などの呼びかけでは、とてもこうした大きな波を生み出すことはできなかった。Rockこそが、ストレートに訴える最大の武器になったのである。

反逆の音楽であったR&Rが、世界を救おうと立ち上がるRockに変貌するその過程には、さまざまな出来事があった。ここでは、ロックとチャリティーの歴史について語りたいと思う。

1960年代のロックは、ビートルズを抜きにしては語れないが、チャリティー・コンサートの口火を切ったのも、やはりビートルズだった。ビートルズは、1970年に解散したが、それ以降メンバーは、独自にチャリティー・コ

ンサートを行なうことになる。

ロックのチャリティー・コンサートの歴史に第1ページを記したのが、1971年8月に催された“バングラデシュ救済コンサート”である。飢餓に苦しむバングラデシュの人々を救おうと立ち上がったのが、元ビートルズのジョージ・ハリスン。このコンサートは、正に画期的なものだった。当時、ロック・フェスティバルは、ウッドストックに始まり大きな盛り上がりを見せてはいたが、スーパースターの参加はなかった。チャリティーによって初めてスーパースターのジョイントが見られたのが、このコンサートであった。

ジョージ・ハリスンの提唱に賛同したのは、アメリカ最大のスーパースター、ボブ・ディランである。彼は1960年代初期からプロテスト・ソングを歌い社会性をもつシンガーであったが、当時は人の前に姿を見せることも稀だった。元ビートルズのリンゴ・スター、そしてジョージの親友エリック・クラプトン(ジョージの前妻と結婚するほど仲が良い)、当時大きな人気を誇っていたレオン・ラッセルも参加。ジョージは、この催しのために“バングラデシュ”という曲を作るほどの入れこみようだった。このコンサートは映画としても上映され、大きな収益と、大きな実りをもたらした。バングラデシュなしには、現在のチャリティー・コンサートもなかったかもしれない。

続いて、1972年8月には、ジョン・レノンが、アメリカのマジソン・スクエア・ガーデンで“ワン・トゥ・ワン・ベネフィット・コンサート”を行なった。これは心理的なハンディキャップを背負った子供たちのためのチャリティー・コンサートで、彼は1980年に射殺されるまで、さまざまな形でチャリティーにかかわりあっている。ジョン・レノンのチャリティー精神は、ミュージシャンのみならず、大きな影響を与え続けたことは特筆されねばならない。

ポール・マッカートニーのプロジェクは、さらに大がかりなものだった。国連のワルト・ハイム事務局長と手を取りあい、1979年12月、ロンドンのハマースミス・オデオンにおいて4日間にわたり“カンボジア難民救済コンサート”を行なった。

出演した顔ぶれが凄い。ポール・マッカートニー&ウィングスをメインに、ザ・フー、クイーン、ロバート・プラント、プリテンダーズ、クラッシュ、エルヴィス・コステロ、スペシャルズ、そして全員によるロックストラというバンドを一時的に結成、大きな収穫をあげた。これらのコンサートは、それぞれレコードとしても発売され、それが恒例となってゆく。

一方、アメリカ人による1970年代最大のチャリティー・コンサートが、“原子力発電反対コンサート／ノー・ニュークス”である。1979年9月、ニューヨークのマジソン・スクエア・ガーデンで行なわれ、ドゥービー・ブラザーズ、ジャクソン・ブラウン、ブルース・スプリングス





ティーン、トム・ベティ、クロスビー・スティルス&ナッシュなどが出演。5日間で17万人の観客を動員し、75万ドルの収益を上げた。

これに先立ち、1978年9月には、マサチューセッツのテルマークで“原子力反対、及び自然のためのベネフィット・コンサート”が行なわれている。出演者は、カーリー・サイモン、ジョン・ホール、アレックス他。

当時、大きな人気を集めていたレゲエ・ミュージシャンたちは、特に強い政治意識を持っていた。政情不安のジャマイカを本拠地としたため、政治的理由で最大のスターであったボブ・マーリーは狙撃されたこともあるほどだ。

こうしたジャマイカのミュージシャンたちが平和運動のために集結したのが、1978年3月の“ワン・ラブ・ピース・コンサート”である。ボブ・マーリー&ザ・ウェイラズ、ピーター・トッシュ、デニス・ブラウン、カルチャー・インナー・サークルなどレゲエのスーパースターたちが、キングストンのナショナル・スタジアムに3万人の観衆を集めた。狙撃以来ジャマイカを離れていたボブ・マーリーが、1年半ぶりに故郷に帰ったこともコンサートを盛り上げた。

民族運動では、1978年9月に、ブロックウェル・パークで“反民族運動デモンストレーション”が行なわれ、エルヴィス・コストロなどが出演。10万人を集めた。

ちょっと風変わりなチャリティーに、キース・リチャードの“盲人のためのチャリティー・コンサート”がある。1979年4月にカナダのオタワで行なわれたこのコンサートは、いかにもキースらしい。当時、彼はドラッグ中毒のまっただ中で、とても他人のために立ち上がるような状況ではなかった。では、なぜこのコンサートを行なったかというと、麻薬不法所持で裁判所から義務づけられたものであった。アナタには、ロックという社会的な仕事がある。その音楽で人々を楽しませ、収益を寄付しなさい——ということで、このコンサートには、ローリング・ストーンズの仲間たちも出演した。

一方、1970年代の日本には、ロック・チャリティーに立ち上がる風潮は、ほとんどなかった。1972年に、ジョージ・ハリソンの“バングラデシュ救済コンサート”の日本版が行なわれたが、ワンダ・ジャクソン、テックス・リッターなどのカントリー&ウエスタン(C&W)の大物が来日出演した。

1970年代で最も大きな話題と議論を呼んだのが、1977年4月、東京・晴海貿易センターで行なわれた“ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン・コンサート”だろう。ジャクソン・ブラウン、J・D・サウザー、デビッド・リンドレー、オデッタ、ジョン・セバスチャン、カントリー・ジョー・マクドナルド……これほど大勢の有名アーティストが一挙に来日したのは初めてであった。日本側からも岡林信康、泉谷しげる、細野晴臣、久保田

真夢と夕焼け楽団などが参加。

これだけ大がかりなイベントであったにもかかわらず盛り上がりには欠けたのは、このコンサートの主旨が“鯨を救おう”というものであったからだ。日本人にとって（それは現在も同じだが）鯨問題は、非常に微妙な問題である。海外の人たちのいい分と日本人の意見とでは、大幅な相違が認められる。日本人にとって鯨は実に身近なものであり、獲った鯨は捨てる部分がないほど大切に利用する。にもかかわらずアメリカなどの諸外国は、油をとるためにだけ大量に捕獲し、あとは捨ててしまう。いや、そんなことはない、鯨は知能の高い動物である——カンカンガクガクの意見が続出した。その後も、イルカ問題とからめ、意見の対立は続いている。

その他の有名なチャリティー・コンサートをいくつか紹介しよう。

“ザ・シークレット・ポリスマンズ・コンサート”は、アムネスティ・インターナショナル（国際政治犯救済の会）を援助するためのもので、主にイギリスで活動するミュージシャン、俳優、コメディアンが出演している。アムネスティは、市民のボランティアによる国際的な権擁護運動で、1977年にはノーベル平和賞も受けている。1975年に、モンティ・パイソンで有名なジョン・クリーズによって初めてチャリティー・ショーが行なわれたが、1979年、ザ・フーのビート・タウンゼントが出演した時から“ザ・シークレット・ポリスマンズ・コンサート”と名乗るようになり、2年に1回ずつ開催されている。1981年のコンサートは、アルバムもリリースされているが、スティング、ジェフ・ベック、エリック・クラプトン、フィル・コリンズ、ドノバン、そしてバンド・エイドで名を上げたボブ・ゲルドフも参加している。

今年は、アムネスティの創立25周年ということもあり、6月15日米ニュージャージー州ジャイアンツ・スタジアム他、6都市で行なわれた。出演者は、コンサートの名前にピッタシ（だからというわけでもないが）ポリスが、久びさに登場して大きな話題となった。他にもピーター・ガブリエル、U2のボノ、ブライアン・アダムス、ジャクソン・ブラウン、ジョーン・バエズ、マイルス・デイビスなどが出演、総計12万6千人のファンを集め、最終的な収益は、300万ドル近いといわれる。

多発性脳脊髄硬化症という病気の研究機関（ARMS）のためのチャリティー・コンサートも有名である。“アームズ・コンサート”は、1983年9月、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホールで、ジェフ・ベック、ジミー・ペイジ、エリック・クラプトンの3大ギタリストが顔を合わせている。

また元スモール・フェイススのロニー・レーンがこの病気にかったことも、ロック・チャリティーに結びついた大きな要因となっている。ロニー・レーンの基金のために結成されたのが、ウィリー&ザ・ブア・ボーイズと



いうグループ。ローリング・ストーンズのビル・ワイマン、チャーリー・ワッツを中心にベテラン・ミュージシャンのグループで、チャリティー・アルバムも発売されている。

プリンス・オブ・ウェールズこと英国のチャールズ皇太子が、福祉や失業者対策のための基金を集めるために作ったのが“プリンス・トラスト（皇太子信託）”である。チャールズ皇太子は、ロック・ミュージックに理解のあることでも知られ、昨年のライブ・エイドにも列席している。

“プリンス・ギャラ”と呼ばれるコンサートに参加したのは、フィル・コリンズ、ロバート・プラント、ケイト・ブッシュ、イアン・アンダーソンなどだが、今年のコンサートはプリンス・トラストの10周年ということで、信じられないほど豪華な顔合わせとなった。

今年は特に“ダイアナ・エイド”と呼ばれたのだが、英国のロンドン・ウエンブリー・アリーナのチャリティー・ショーに出演したのは、ポール・マッカートニー、ミック・ジャガー、デビッド・ボウイ、フィル・コリンズ、ブライアン・アダムス、ティナ・ターナー、ジョージ・マイケル、ロッド・スチュアート、スティング……正にタメ息の出そうな顔ぶれである。チャリティーでなければ、とうてい実現しなかっただろう一夜であった。収益は25万ポンドといわれている。

プリンス・トラストは、チャリティー・アルバムも発売していて、ダイアナ・ストレイツ、フィル・コリンズ、デュラン・デュラン、エリック・クラプトン、ジェネシス、ポール・ヤング、ジミー・ペイジ、スティーブ・ウィンウッド、ロバート・プラント、プロコル・ハルム、シャーディなどの曲が収録されている。絶対にお買得のアルバム（『トラスト・コレクション』）。

“グリーンピース”も、さまざまな活動で有名である。日本人の感覚だと、すぐに「あの、クジラの」グリーンピースということになるが、活動はそれにとどまらない。1979年に、アメリカの核実験に反対したグループが中心となって作られた国際団体であり、環境保全、自然運動、動物実験や原子力反対、そして捕鯨反対のグループである。『われらグリーンピース』というチャリティー・アルバムには、ジョージ・ハリスン、ユーリズミックス、ブリテンダーズ、ティアーズ・フォー・フィアーズ、ピーター・ダブリエル、クイーン、ハワード・ジョーンズ、トーマス・ドルビーなどが曲を提供している。

子供たちのためのチャリティー組織として最も伝統があるのがユニセフ（UNICEF、国連国際児童緊急基金）である。1979年は、国際児童権利宣言が宣言されてから20周年、国際児童年であったが、この時のチャリティー・コンサート“ミュージック・フォー・ユニセフ・コンサート”も思い出深い。出演したアーティストは、ピー・ジーズ、アバ、ロッド・スチュアート、オリビア・ニュートン・ジョン、ドナ・サマー、アース・ウィンド&ファイヤー、ジョン・デンバーなどで、このコンサートは日本でも衛星中継され、アルバムとしても発売された。コンピレーションのチャリティー・レコードも数多いが、核軍備縮小キャンペーン・レコード『狂気の掟／俺達は生き残る』は、ニュー・ウェイヴのアーティストが中心となった。ジャム、クラッシュ、スペシャルズ、マッドネス、イアン・デューリー、エコー&ザ・バニーメン、ストラングラーズなどで、ここにもピーター・ダブリエルが協力している。

その他、簡単にチャリティー・コンサートを列挙してみると――

“グラストンバリーCNDフェスティバル”。CNDとは核廃絶運動の団体で、毎年行なわれるヨーロッパ最大のピースフェスティバル。人種差別に反対する“ロック・アゲinst・レイシズム”、“若者を奴隷扱いする職業訓練反対アピールのツアー”、“炭鉱労働者のストを支援するチャリティー”、反ファシズム同盟による“アンチ・ナチ・リーグ”、エチオピア救済のためのアルバム『スタヴェーション』、アフリカのための“レッツ・メイク・アフリカ・グリーン・アゲイン”……。と実に枚挙にいとまがない。日本では想像できないほどの種類のチャリティーが、数え切れないほど催されているということだ。なんらかのチャリティーに関わらなかったロック・ミュージシャンは、ひとりもいないといってもよいだろう。これはミュージシャンの意識だけでなく、それに参加する聴衆、つまり私でありあなたである人間の意識と相関関係をもっている。

チャリティーとは、空気を呼吸するのと同じように海外では、当然のこととして受けとめられていることの証明である。

何事も発端は、ちょっとしたキッカケである。ひとりの人間がふと感じたことが、世界を変える場合だってある。ひとつの出来事に、感じるか感じないか、ちょっとしたことが大きな成果を産み出す。

世界中の話題と期待をさらったエイド・ブームも、発端はささいな出来事だった。ひとりの男がTVを見ていた。画面はエチオピアの大飢饉のニュースを伝えていた。

「……俺にできることはないだろうか？」

ひとつの素朴な疑問が、世界を変えた。男の名は、ボブ・ゲルドフ。ブームタウン・ラッツのヴォーカリストである。彼は、ただちに行動に移った。ほんの1カ月の間に、ひとつの曲がレコーディングされ、1カ月の内に発売された。1984年11月。

「ドゥー・セイ・ノウ・イツ・クリスマス」イギリスのスーパースターたちによってレコーディングされたこの曲は、たちまちの内に大きな共感を呼び、500万枚以上を売り上げ800万ポンド（約27億円）の収益が、アフリカに送られることになった。





このニュースは、世界に大きな刺激を与えた。「やれば
できる」。ちょっとしたキッカケで、みんなが力を合わせ
れば、世界を救うことだってできる……と。

この運動をさらに拡大しようと、ゲルドフは、世紀のチ
ャリティー・コンサート“ライブ・エイド”の構想を得
た。イギリスとアメリカで同時にコンサートを行ない、
それを衛星中継し（VTR放映を含め）世界140カ国、20
億人の人々に届けようというのである。

この実現が“ザ・地球コンサート”1985年7月13日に行
なわれたライブ・エイドである。アフリカの飢饉を救う
ために、コンサートに登場した顔ぶれは、正に驚くべき
ものであった。

ボブ・ディラン、ミック・ジャガー、デビッド・ボウイ、
ティナ・ターナー、ホール&オーツ、ポール・マッカ
ートニー、デュラン・デュラン、フィル・コリンズ、ロバ
ート・プラント、ジミー・ペイジ、エリック・クラプト
ン、マドンナ、トンブソン・ツインズ、ニール・ヤング、
パワー・ステーション、エルトン・ジョン、ジョージ・
マイケル、ブライアン・フェリー、フレディ・マーキュ
リー、ダイアー・ストレイツ、クイーン、プリテンダーズ、
ザ・フー、サンタナ、ビーチ・ボーイズ、スティング、
ポール・ヤング、ブライアン・アダムス、エルヴィス・
コストロ、レッド・ツェッペリン……。

恐らくこれを超えるコンサートは、二度と見られないだ
ろう。日本側からも、ラウドネス、オフコース、矢沢永
吉、佐野元春が通信衛星で参加、フジTVから15時間に
わたり、リアル・タイムで放映されたことは、記憶に新
しい。

バンド・エイドの「ドウ・セイ・ノウ・イツ・クリス
マス」がリリースされ、アメリカでも同じ動きが始まっ
た。キッカケを作ったのは、ベテラン・シンガーのハリ
ー・ベラフォンテだった。

ゲルドフはTVに触発されたが、ベラフォンテはアフリ
カの現状を伝える映画に心を動かされ、眠れぬ夜が続
いたという。

「イギリスのバンド・エイドは、人間としての同志愛で
アレを行なった。なぜアメリカでできないことがあるだ
ろう？」

ベラフォンテの発案から実現までは、電光石火の早業だ
った。1985年1月28日、アメリカ中のスーパースターた
ちが集まった。空前というべき豪華な顔合わせに、世界
中が興奮した。

レイ・チャールズ、ボブ・ディラン、ブルース・スプリ
ングスティーン、マイケル・ジャクソン、ライオネル・
リッチー、ビリー・ジョエル、シンディ・ローパー、ヒ
ューイ・ルイス、ダイアナ・ロス、ポール・サイモン、
スティービー・ワンダー、ティナ・ターナー、ボブ・ゲ
ルドフ……51人のアーティストが一堂に結集してレコー
ディングを行なった。この様子は、ビデオで世界中の人

たちが見、身体中を熱くして声援を送った（私たちも何
かをやるべきだ……）。

詞・曲を担当したのが、マイケル・ジャクソンとライオ
ネル・リッチー。

USAフォー・アフリカによる「ウイ・アー・ザ・ワー
ルド」である。やがてアルバムも発売され、アフリカ救
済基金（USA for AFRICA）に送られた。

こうしたキッカケで、現在の世界の問題点が次々と浮き
彫りにされていった。

南アフリカの人種差別政策＝アパルトヘイトに反対する
ために立ち上がったのが、“サン・シティ”である。

ブルース・スプリングスティーンのE・ストリート・バ
ンドのメンバーだったスティーブ・ヴァン・ザントによ
る提案で作られたこのレコードには、ブルース・スプリ
ングスティーン、ボブ・ディラン、ホール&オーツ、ハ
ービー・ハンコック、キース・リチャード、ピーター・
ガブリエル、ビート・タウンゼント、ルー・リード、マ
イルス・デイビス、リンゴ・スター、パット・ベネター、
ジャクソン・ブラウンなど50名以上のアーティストが名
をつらねた。

（サン・シティとは、南アフリカの高級リゾート地で、
常に世界的イベントが行なわれている。この曲の歌詞は
（アパルトヘイトが続く限り）“サン・シティなんかで
演奏するものか”と歌われている）

他にもさまざまなチャリティーが催され、とても紹介し
きれないほどである。

アメリカの農民に手を差し伸べる“ファーム・エイド”、
自由の女神の改修資金を集めるための“ロック・フォー
・リパティ・コンサート”、アメリカを手と手でつなごう
とする“ハンズ・アクロス・アメリカ”、ガンの研究資金
を集めるためのアルバム『ライブ・フォー・ライフ』、反
ヘロイン運動の資金を調達するための“ライブ・イン・
ワールド”、英バーミンガムの小児病院の運営補助を目的
とする“ブラム・エイド”、米ニュージャージーのアーテ
ィストによる食糧銀行へのチャリティー・レコード『ラ
イブ・ゴット・ザ・ラブ』(by JAM)。

10月3日にカリフォルニアで行なわれた視聴障害をもつ
子供たちのためのベネフィット・コンサートは、アンプ
を一切使用しないアコースティック・コンサートであっ
た。登場したのは、ブルース・スプリングスティーン、
トム・ペティ、ドン・ヘンリー、そして、クロスビー・
ナッシュ&ヤングの再結成、主催は、ニール・ヤング。

以上は、数あるチャリティー・コンサートの一部である。
経済大国日本、そろそろ本物のチャリティー精神が芽生
えてよいころである。なにも大げさなことではない。政
治とは関わりのないチャリティー、老人を助け、子供の
手を引く、そんなちょっとした行為こそが、真実の行動
へと向かわせることだろう。（Y・I）





イギリスで行なわれた21の効率のよいチャリティー・ショーでは1ポンドの献金に対して9.5ペンス以下しか事務費用として使われていない。

1984年から85年にかけて、3億6千万ポンドがこの21のチャリティー・ショーに献金され、全体としての収益は6億ポンド近くになった

そのなかで最も評判の高かったものは、“Band Aid” “Oxfam” “Save the Children” “National Trust” “the Royal National Lifeboat Institution” と、非常に効率よく活動をしている “Cancer Research Campaign” である。

チャリティー・コンサート収益リスト

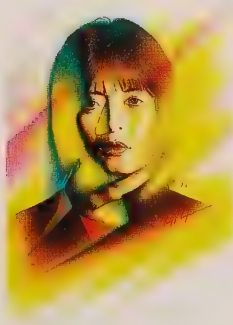
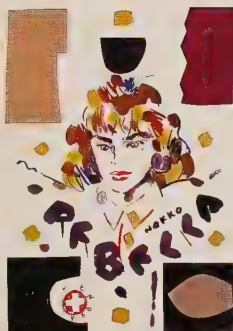
	寄付	総収入	事務経費	基金募集	事務等に 使用した額の パーセント	チャリティー額	チャリティーに 使用した額の パーセント
	£000	£000	£000	£000	%	£000	%
1984～85年に行なわれたチャリティー							
BAND AID	56,500	69,000	39	—	0.056	23,000	33.33
OXFAM	49,533	57,430	1,060	3,936	8.70	42,177	73.44
SAVE THE CHILDREN	35,469	42,673	719	2,448	7.42	22,974	53.84
NATIONAL TRUST	27,701	70,219	4,783	2,932	10.99	48,649	69.28
RNLI	23,548	25,823	1,105	1,175	8.83	17,283	66.93
CANCER RESEARCH CAMPAIGN	20,051	22,321	318	1,436	7.86	21,359	95.69
SALVATION ARMY	19,743	43,264	2,589	581	7.33	26,725	61.77
DR BARNADO'S	19,473	42,753	992	4,328	12.44	26,143	61.15
IMPERIAL CANCER RESEARCH FUND	18,169	32,433	341	1,371	5.28	21,837	67.33
NSPCC	17,564	21,182	584	1,301	8.90	10,135	47.85
CHRISTIAN AID	17,374	20,357	567	1,505	10.18	17,394	85.44
SPASTICS SOCIETY	12,463	32,645	744	3,380	12.63	24,738	75.78
RNIB	11,304	23,125	278	1,799	8.98	15,947	68.96
TEAR FUND	11,019	11,790	977	—	8.29	8,175	69.34
ACTION AID	10,500	11,317	1,012	1,248	19.99	7,665	67.73
CATHOLIC FUND FOR OVERSEAS DEVELOPMENT	10,115	11,882	132	307	3.69	11,298	95.08
BRITISH HEART FOUNDATION	9,595	12,316	351	1,253	12.73	6,997	56.81
GUIDE DOGS FOR THE BLIND	9,533	14,943	439	1,579	13.50	5,796	38.79
RSPCA	9,301	12,347	1,070	454	12.34	8,157	66.06
MARIE CURIE(CANCER RESEARCH)	9,164	9,656	176	674	8.80	8,337	86.34
WAR ON WANT	9,133	9,231	70	89	1.72	6,620	71.71

(オブザーバー紙より・単位千ポンド)

PARTICIPATING ARTISTS

FOR

“HURRICANE IRENE”





高橋健太郎 KENTARO TAKAHASHI

PETER GABRIEL

Peter Gabriel (Vo)

David Rhodes (G)

Manu Katche (Dr)

Tony Levin (B)

David Sancious (Key)



photo by Seiji Matsumoto

ピーター・ガブリエルは、さまざまな意味で今のポップ・ミュージック界の最も重要なアーティストと言えます。今年、1986年には「スレッジハンマー」が世界的ヒットになり、広く名を知られるようになった彼ですが、1970年代のジェネシス在籍時から、ピーター・ガブリエルは独自の深遠な音楽世界を切り拓き、熱心なファンを生み続けてきた人です。そして、1980年代に入っからは、ロックと第三世界の音楽の融合を彼自身の音楽を通じて提示していくと同時に、世界中の音楽やアートの出会いの場とするべく、WOMAD (ワールド・オブ・ミュージック・アーツ・アント・ダンス) というプロジェクトを発案したりして、音楽界に静かな影響を与え続けています。ヒューマニスティックな魅力にあふれ、未来への示唆に富んだピーター・ガブリエルの音楽は、きっと日本の聴衆にも強烈な印象を残すことでしょう。その前に、ここでは簡単に彼の足跡をふりかえっておくことにしたいと思います。

「ツアーの間もお茶の時間は守る」——そんな伝説のあったジェネシスは、英ロック界には珍しい貴族階級出身のメンバーで固められたグループでした。ピーター・ガブリエルは、トニー・バンクスとともにそのジェネシスを創始したひとりであり、1975年にグループを脱退した後は、ソロ・アーティストとして活動を続けています。

生まれは1950年の2月13日。両親はともにグレート・ヴィクトリア王朝の流れを汲み、大農園を持つ裕福な家庭でした。僕は3年前の夏、まったくの偶然から彼に会う機会を得ましたが、レコード会社やプロダクションの紹介もない僕に直接インタビューをOKし、自ら飲み物を用意してもらってくれたピーターは、やはり他のロック・ミュージシャンらしからぬ、柔らかな雰囲気を持った人でした。

photo by Seiji Matsumoto



PETER GABRIEL

ともに、ロックと第三世界の音楽の融合を計ったアーティストの先鋭に数えられるようになりました。

1983年には、トニー・レヴィン以下の強力なメンバーを揃え、ジェネシス時代を越える素晴らしいパフォーマンスを観せるようになったピーターのライブを収めた『プレイズ・ライブ』がリリース。その翌年に、僕は『プレイズ・ライブ』と同じメンバーによる彼のコンサートを観ていますが、アフリカのプリミティブ・アートに影響されたというメイクを凝らしたピーターのパフォーマンス、コンピューター操作によるライティングを駆使した夢想的なステージ美術、そして驚異的なグループの演奏力を含めて、それは過去のコンサート体験の中でも最高のものでした。

その後、映画『バーディー』のサントラをはじめ、いくつかの映画音楽の仕事をした後、1986年にアルバム『So』を発表。前作までの民俗音楽的な要素を引きつぎつつも、十代のころに親しんだソウル・ミュージックやゴスペルの感覚を前面に出したスタイルで、大ヒットを生んだのは、最初書いた通りです。よりシンプルなソングライティング、パーソナルな表現をめざしたというこのアルバムは、彼の音楽に今までにない親しみやすさを与えました。

新しいバック・グループを率いて来日するというピーター・ガブリエルが、どんなコンサートを観せてくれるのか。ここであまり言葉を重ねるよりは、ただ全幅の信頼を置いて、ステージを見守りたいという気分で、僕は彼との再会を待っています。今回のハリケーン・アイリーン・コンサートの発案者でもある彼のことヒューマンスティックな感動を与えてくれるのは間違いのないでしょう。

カルなメロディーと幻想的なサウンドを持つ独自のロックを展開し、聖書やマザー・グースなどの寓話に影響を受けたピーターの詩作、奇抜なコスチュームや仮面を使ったライブ・パフォーマンスでも話題をまきました。が、2年連続でメロディー・メイカー誌のベスト・ライブ・バンドに選ばれた直後、彼はグループを脱退。ピーターはツアーの多いロック・ミュージシャンの生活から身を引き、静かなソロ活動に入ります。最初のソロ・アルバムが発表されたのは1977年。そして、1980年に発表された3作目で、ピーターはジェネシスの影を振りきり、新しい世界へ進み出しました。

XTCやU2のプロデューサーとして知られるスティーブ・リリホワイトをプロデューサーにしたそのアルバムは、斬新なドラム・サウンドでロック界に衝撃を与えましたが、それ以上に重要だったのが、ラストに収められた『ピコ』という1曲です。惨殺された南アフリカ共和国の民族運動の指導者、スティーブ・ピコのことを歌ったこの曲は、同時にピーターのアフリカ音楽へのアプローチの最初の成果でした。そして、1982年には前出のWOMADを発案。『ピコ』での試みを大きく発展させた4枚目のソロ・アルバムを発表して、トーキング・ヘッズと

つたない英語に熱心に耳を傾けてくれた誠実さ、そして優しさと同時に、どこか悲しげなものを感じてしまった彼の目の奥の表情を僕はずっと忘れられずにいます。

英国サリー州の名門校、チャルターハウス・パブリック・スクールでピーター・ガブリエルとトニー・バンクスが出会ったのは1964年のこと。ジェームズ・ブラウンやオーティス・レディングが好きで意気投合したふたりは、いくつかのバンドを経て、1967年にジェネシスを結成。ピーター、トニー、アンソニー・フィリップス、マイク・ラザフォード、クリス・スチュワートからなったこのジェネシスは、その後、幾多のメンバー・チェンジを経験して、現在はトニー、マイク、そしてフィル・コリンズからなる3人組となっているのは、多くの人をご存知でしょう。ピーターは、1968年のデビュー・アルバム『創成期』から1974年のアルバム『眩惑のブロードウェイ』まで、7枚のアルバムに参加。ヴォーカルとソング・ライティングを手がけ、グループの最も重要なメンバーでした。

ピーター在籍時のジェネシスは、クラシ

根強い人気と、高い評価を受ける 超ロングセラー・アルバム!!

至高の音楽性、稀代のカリスマ性、個性派ロック・シンガー&ライター、ソロ・キャリア最高峰のプロジェクト!!
「スレッジハンマー」に続くシングル・カット「君の瞳に」収録!!

So

Peter Gabriel

ケイト・ブッシュ ジム・カー(シンプル・マインズ)
スチュワート・コーブランド(ボリス)他豪華メンバー参加!!

ピーター・ガブリエル

発売中 ㊦28VB-1088 ㊦28VC-1088 各¥2,800

CDでも発売中 ㊦32VD-1021 ¥3,200

レッド・レイン スレッジハンマー ドント・ギヴ・アップ ザ
ット・ヴォイス・アゲイン 君の瞳に ビッグ・タイム 他全8曲
●カセット、CDのみ「ザ・ピクチャー」収録全9曲!!

ヒット・シングル

「君の瞳に」●07VA-1854 ¥780



全世界に大反響を巻き起こした傑作アルバム!!

リトル・ステイヴンの呼びかけで、「サン・シティなんかで、プレイするものか!」とアパルトヘイト
に反対して、ブレース・スプリングス・ティーン/ボブ・ディラン/ホール&オーツ/マイルス・デイビス
全米の総勢50名を超えるミュージシャンが集まった!!

サン・シティ

アパルトヘイトに反対する
アーティストたち

発売中 ㊦MHS-91149 ㊦ZR28-1345 各¥2,800

サン・シティ/ノー・モア・アパルトヘイト/レヴォリュ
ーショナリー・シチュエーション/サン・シティ(ヴァ
ージョンII)/レット・ミー・シー・ユア・I.D. 他全7曲



LITTLE STEVEN

リトル・ステイヴン
ニュー・アルバム来春発売予定

MAN
HAT
TAN

NONA HENDRYX

ノナ・ヘンドリックス ニュー・アルバム来春発売予定



STEVE VAN ZANDT AND THE DISCIPLES OF SOUL

LITTLE STEVEN

Little Steven(G & Vo)

Steven Jordan(Dr & Vo)

Thomas Stevens(B & Vo)

Thomas Mandel(Key & Vo)

Patrick Thrall(G & Vo)

Zoe Yanakis(Oboe & Per)



1981年9月14日、アメリカはシンシナティのリバーフロント・コロシウムでのコンサートを終え、広いコロシウムに背を向けて歩き始めたひとりの男が、この日“独立”した。

“マイアミ”スティーブ、リトル・スティーブン、スティーブ・ヴァン・ザント、いろいろと呼び名は変わったが、この小柄なギタリストは、1975年7月20日にギリシャのロード島で行なわれたコンサートで、初めて“ボス”の横に立って以来、6年もの長い年月にわたって、“ボス”の右腕をつとめてきた。

“ボス”ことブルース・スプリングスティーンとスティーブ・ヴァン・ザントとの関係は、ある意味ではローリング・ストーンズのミック・ジャガーとキース・リチャードの関係にも似ているように感じられる。それは、クラレンス・クレモンズやロイ・ピタンといったE・ストリート・バンドの他のメンバーたちと、ブルースの横にある群よりも、もっと深い部分でつ

ながっていたのかもしれない。実際の話、ブルースがこの11月に発表したら枚輻ライブ・アルバムの特選曲についても、スティーブ・ヴァン・ザントが参加して以降のステージから収録されているし、スティーブがE・ストリート・バンドを脱退した後は、体格といいギター・スタイルといい、どこかスティーブに似た雰囲気を持ったニルス・ロブグレンを迎え入れたことでも、“ボス”がスティーブに特別な想いを抱いていることを、うかがい知ることができるのだ。

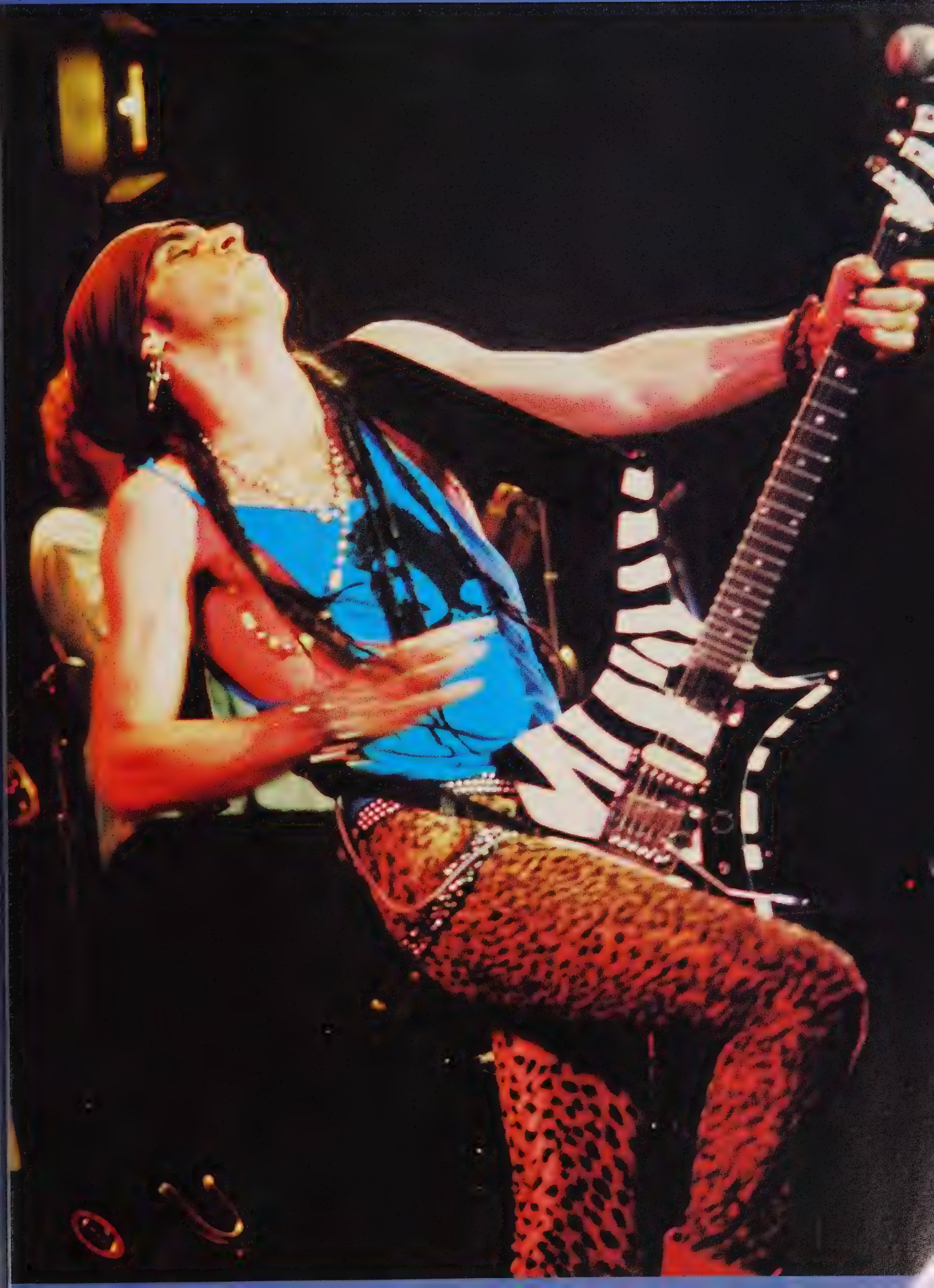
特に、スタジオでのレコーディングよりも、ライブ・ステージで、“ボス”をサポートするスティーブのパワーが、“ボス”をロックン・ロールへとかりたてていったことは、間違いないだろう。ニュージャージーのフリーホールドで生まれ、アズベリー・パークで音楽活動をスタートさせたブルースと、スティーブの出会い、まだふたりとも学校に通っていたティーン・エイジのころだという。サンダンス・ブルース・バンド、アルビー&ザ・ハイアード・ハンズ、ドクター・ズーム&ザ・ソニック・ブームといったバンド名で、ふたりは地元のクラブなどに出演していたという。しかし、ブルースは1973年にニューヨークへ向かい、Greetings From Asbury Park, New Jersey (アズベリー・パークからの挨拶)で、ソロ・シ

ンガーとしてデビュー。1974年にバンド・サウンドを求めたブルースが、スティーブにE・ストリート・バンドへの参加を要請するまでの約2年間、ふたりは同じバンドでステージに立つことはなかった。

1975年、あの歴史的なアルバム『Born To Run (明日なき暴走)』をレコーディングしたスティーブは、7月20日に行なわれた前記のコンサートで、初めてE・ストリート・バンドのメンバーとして、ブルースの横に立ったのだ。

それ以来スティーブは『Darkness On The Edge Of Town (闇に吠える街)』(1978年)、『The River (ザ・リバー)』(80年)、『Born In The U.S.A. (ボーン・イン・ザ・U.S.A.)』(84年)と、全部で5枚のアルバムをブルースと共に作り、世界中をツアーしてまわった。ただし、1981年9月14日のコンサートを最後に、E・ストリート・バンドを去ったスティーブは、『Born In The U.S.A.』では、プロデュース&ゲスト・ギタリストという形で、レコーディングに参加したのだが……。

スティーブがブルースの元を離れるきっかけとなったのは、ブルースの客分として彼の音楽性をサポートするのに飽き足らなくなった彼が、自分自身の音を追求しようと考えたからにほかならない。2枚組の大作、『The River』を発表し



STEVE VAN ZANDT

LITTLE STEVE AND THE DISCIPLES OF SOUL



たブルースが、たったひとりで「Neb-raskal(ネブラスカ)」(82年)のレコーディングにとりかかった時、スティーブは自分自身のバンドを結成して「Men Without Women(N.Y.スーパー・バンド)」のレコーディングに参画していた。リトル・スティーブン&ザ・ディサイブルズ・オブ・ソウル——仮のニュー・バンドはこう名づけられ、デビュー・アルバムも好評のうちに、スティーブはソロ活動への第一歩を踏み出したのだ。そして、「Born In The U.S.A.」の熱狂が巻き起こっている1984年度、スティーブはセカンド・アルバムである「Voice Of America(ヴォイス・オブ・アメ

リカ)」を発表。ブルースとスティーブの間には、おたがいのアルバム・タイトルが示しているように、太い絆が結ばれていることを、それとなく示したのだった。こうしてソロ・アーティストへの道を歩み始めたスティーブが、度々手がけたものこそ、ひとりの、ただのロックン・ローラーの運命をまえ、1985年12月の寒風吹きすさぶ日本へと連れてきてしまう原動力となった。南アフリカ共和国の人権差別に反対し、南アのリゾート地であるサン・シティへの出演を拒否するという、アパルトヘイト問題に関心を持ったスティーブは、1984年に南アに飛び、サン・シティをその

目で確かめてから、アメリカに戻って、アーサー・ペイカーと話をしたという。スティーブ以前にも、「ウィ・アー・ザ・ワールド」のレコーディングに参加した翌日、南アのアパルトヘイトに抗議するデモに参加したハリー・ペラフォンテが逮捕されたり、ペラフォンテと同じようにデモに参加したスティービー・ワンダーも逮捕されるなど、南アとサン・シティの問題は、ミュージシャンたちの間で話題となっていた。しかしスティーブは、自分がミュージシャンであることを考えたうえで、「サン・シティ」という曲をレコーディングすることを決め、さっそく数多くのミュージシャンに声をかけたのだった。親友ブルース・スプリングスティーンを筆頭に、RUN,D.M.C.、ボブ・ディラン、ピーター・ダブリエル、ホール&オーツ、マイルス・デイビス、ハービー・ハンコック、キース・リチャード、ボブ・ゲルドフ、ジミー・クリフ、ロン・ウッド、ボノ(U2)、リンゴ・スター……とても書き切れないほど数多くのミュージシャンが、スティーブの呼びかけに応え、「サン・シティ」は全世界の注目を浴びたのだった。そして、1986年12月、ピーター・ダブリエルと共に、スティーブが発案した「A PAN AID」が行なわれることになった。たったひとりのギタリストが、自分がミュージシャンであることを考え、音楽で何ができるかということに悩み、そしてこの日本にやってきたのだ。できることなら、その生き方に、その姿勢に、その演奏のすべてに、大きな声援を送り、そして彼の訴えたいことを、じっくりとこみしめてもらいたい。今、スティーブ・ヴァン・ザントは、あなたの前に立っているのだから……。

★全英チャート急上昇「オール・アイ・ウォント」、
全米チャート急上昇「ユー・ノウ・アイ・ラヴ・ユー」収録!!



ハワード・ジョーンズ ワン to ワン

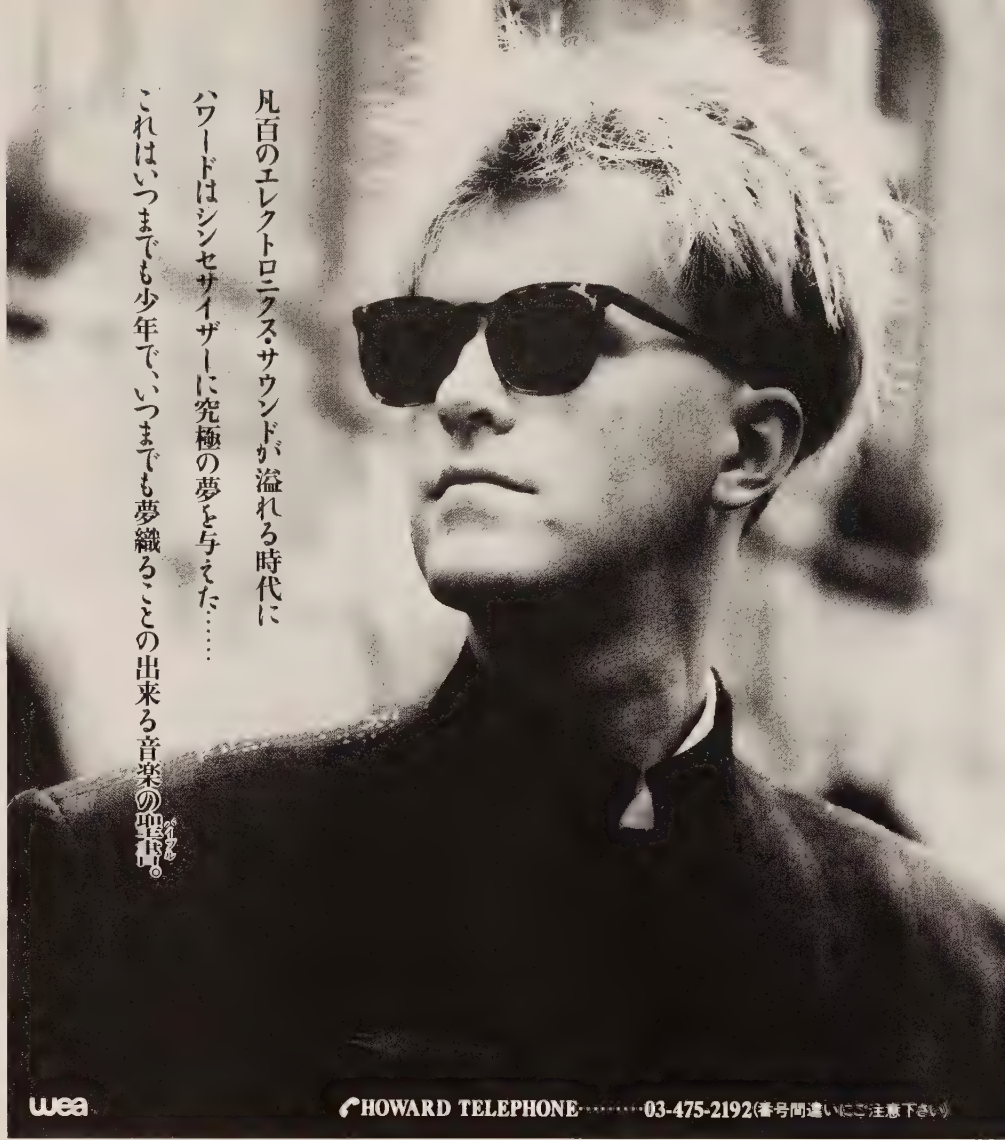
『かくれんぼ』『ドリーム・イントゥ・アクション』に続く待望のサード・アルバムが遂に完成!! プロデュースにマリフ・マーティン、そしてエンジニアにはケヴィン・キルンを迎え、ハワードの独創的なポップ感性は、さらに磨きがかかった。

- ゲスト・ミュージシャン: アフロディシア・アーク・マーカス・ミラー、アーク・スティーヴンス他<BACKING VOCALS>/トレヴァー・モレイス、スティーヴ・フェアローン<DRUMS>/ナイル・ロジャース、フィル・パーマー他<GUITAR>/マーティン・ジョーンズ、モー・フォスター<BASS GUITAR>/ボブ・ゲイク<ALTO SAX>/ゲイリー・バートン<VIBRAPHONE>
- CD: 32XD-528 ¥3,200<CDのみ"悲しき願い"1曲多く収録>
- LP: P-13401/カセット: PKG-3207 各 ¥2,800 <全10曲収録>

LP・CT・CD 好評発売中!

■12インチ・シングル「オール・アイ・ウォント」
●全3曲 ●P-3605 ¥1,200 ▶発売中

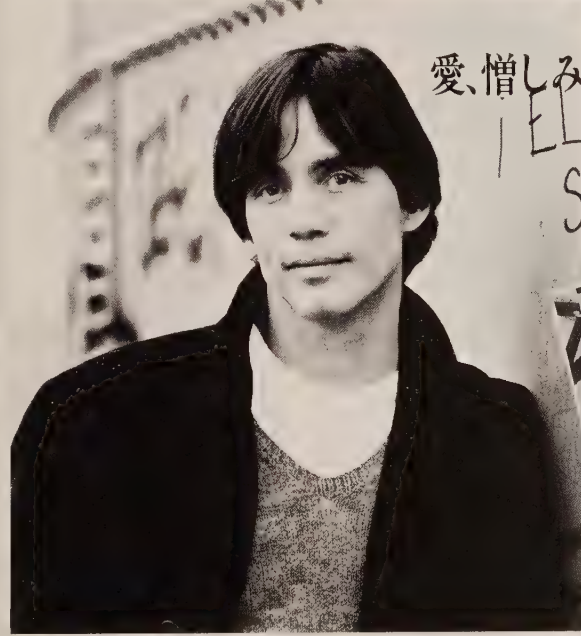
■VIDEO & レーザー・ビジョン・ディスク
ラスト・ワールド・ドリーム 12月21日発売
●VIDEO: 09JV(X)-42005 VHS β 各 ¥8,800/ステレオHi-Fi/デジタル・マスタリング/59分/カラー/13曲収録 ●LVD: 08JL-42005 ¥7,800 ステレオ CLV デジタル・サウンド 59分/カラー 13曲収録



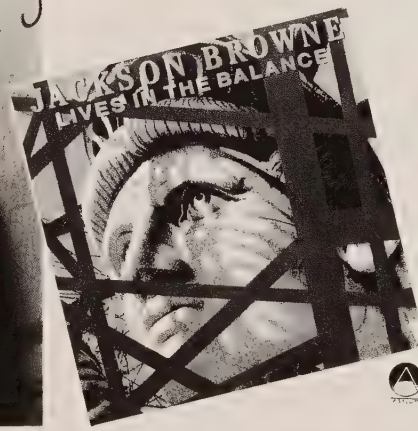
凡百のエレクトロニクス・サウンドが溢れる時代に
ワードはシンセサイザーに究極の夢を与えた……
これはいつまでも少年で、いつまでも夢織る、この出来る音楽の聖域。

wea

HOWARD TELEPHONE.....03-475-2192(番号間違いにご注意下さい)



愛、憎しみ、自由、失望、争い、———すべてがアメリカ合衆国。
大いなる祖国にジャクソン・ブラウンが贈る'80年代の熱きメッセージ!!



★ヒット・シングル「フォー・アメリカ」収録/ ジャクソン・ブラウン ライヴズ・イン・ザ・バランス

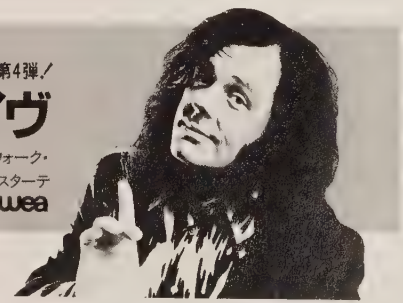
●プロデュース: ジャクソン・ブラウン ●ゲスト・ミュージシャン: デイヴィッド・リンドレー、スティーヴ・ルカサー、ダニー・コーマチ(g)/ラス・カンケル、ジム・ケルトナー(ds)/ビル・ペイン(key)/ボブ・グローブ、フィル・チェン(b) 他
収録曲▷フォー・アメリカ/ソルジャー・オブ・ブレンティ/シェイプ・オブ・ア・ハード/キャンディ/ロウレス・アヴェニュー/ライヴズ・イン・ザ・バランス/ティル・アイ・ゴー・ダウン/ブラック・アンド・ホワイト 全8曲 ●LP: P-13246/カセット: PKG-3159 各 ¥2,800 ●CD: 32XD-393 ¥3,200 ▶発売中



ウェスト・コースト・ミュージックをひたすら支えてきた偉大なギタリスト、デイヴィッド・リンドレーの第4弾/ デイヴィッド・リンドレー/Mr. デイヴ

収録曲▷プリティ・ガール/ワールド/トゥルリー・ドゥ/ルック・バッド・フィーレ/ベター/心は燃えて/ウォーク・トゥ・ザ・サン/ハンズ・ライク・ア・マン/フォロー・ユア・ハート/ハーツ・ソー・バット/エイリアンの侵入/スターティング・オール・オーバー・アゲン 全10曲 ●P-13160 ¥2,800 ▶発売中

wea



WARNER-PIONEER CORPORATION

HOWARD JONES

Howard Jones (Vo & Key)

Trevor Morais (Dr)

Roy Jones (Key)

Claudia Fontaine

Karen Wheeler

Naomi Osborne

ハワード・ジョーンズは、1955年2月23日にイギリスのサザンプトンで生まれました。サザンプトンといえば、イギリス南部の港町で、沖合にはワイト島のあるところ。

両親の仕事の都合で、子供のころは引越し続きの生活でした。そんな生活の中で6歳からピアノを習いはじめ、15歳のときにはバンドで演奏するようになっていました。そのころはエマーソン・レイク&パーマーやジェネシスが好きだったそうです。キース・エマーソンの影響を受けて、19歳のときには、クラシックの勉強のためマンチェスターのノーザン・スクール・オブ・ミュージックに入学しましたが、そりがあわずに、中退しています。その後ロンドンの北西にあるハイ・ウェイカムに移り、そのころからシンセサイザーに興味を持ち、徐々に現在のような音楽をやりはじめました。そして地元のクラブで、ダンサーのジェド・ホイルと共にステージに立つうちに音楽関係者の注目を集め、1983年夏には大手レコード会社のWEAと契約。秋にはデビュー曲「ニュー・ソング」が、続いて冬には「ホワット・イズ・ラブ」がヒットして、一躍大型新人登場と騒がれるようになりました。

その後、イギリスばかりでなく、ヨーロッパ、アメリカ、日本でも大成功を収め、1980年代のイギリスを代表するソロ・アーティストのひとりとして華々しく活動をくりひろげています。


これまでに日本発売されているレコードはLPが『かくれんぼ』(1984年)、『ドリーム・イントゥ・アクション』(1985年)、『ワン・ロマン』(1986年)の3枚、12インチ・シングルで出たものを集めたミニ・アルバムが『君を知りたくて』(1984年)と『オンリー・ゲット・ベター』(1985年)の2枚、シングルが最新の『オール・アイ・ウォント』を含めて9枚あります。代表的なヒット曲としては、先にあげた初期の2曲の他、「一日の生命」「悲しき願い」などがあげられるでしょう。デビュー当時から現在まで、ハワード・ジョーンズは、シンセサイザーをメインにした音楽をやっています。しかしシンセサイザーやコンピューターを多用した音楽につきものの機械的なイメージと彼の音楽は無縁です。むしろ暖かみのあるダイナミックな音楽が多いのが特徴で、彼にとってシンセサイザーとは、単に自分の音楽を表現するためのひとつの道具であることがよくわかります。彼の音楽が非常に幅広い層のファンから支持される理由も、ひとつにはそこにあるのでしょう。

デビュー当時、彼はヒーローとして、故ジョン・レノンの名前をあげ「ものごとを歌にしてダイレクトにうたうやり方が好きだった」と述べていましたが、それは彼の音楽にもそのままあてはまるようです。

ロック・ミュージシャンには、奇行や派手なファッションで耳目を集める人がしば

photo by Seiji Matsumoto





HOWARD JONES

ですが、素顔のハワード・ジョーンズは、物静かな紳士で、いい意味での常識の持ち主のように見受けられました。嫌いな言葉は不可能という言葉だそうで、何事にも前向きに取り組むのが彼の信条。そんなところから、各種のベネフィット・コンサートへの参加も多く、1984年12月のロイヤル・アルバート・ホールで行なわれたエチオピア支援コンサート、85年7月のライブ・エイド・コンサート、85年12月のクリスマス・チャリティー、86年6月のアムネスティ・インターナショナル支援コンサートなどに参加しています。

「世の中をよくしようという運動にほくも関心を持っている。でも、運動しているときはカッコいいこといってるのに、家に帰ると奥さんを殴ったりするような人がいるのはどうかと思うね。だからぼくはいつも、人の内面に訴えるような歌を作るようにしている。ひとりひとりの人間が変わらないと、何もはじまらないだろう」

以前インタビューしたときに、彼はこんなことをいっていましたが、音楽と社会の関係をみつめながら生きている人ならではの発言だと思います。

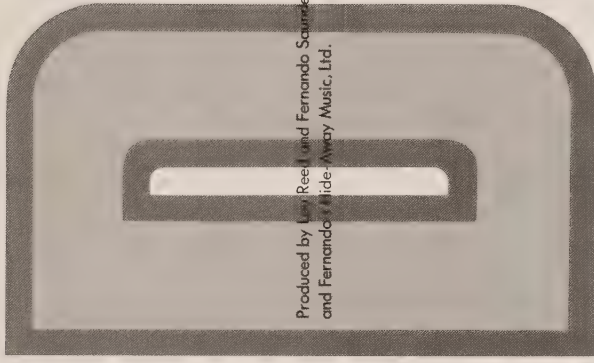
現在はアイルランドのダブリンに住み、奥さんのジャンと、今年生まれたばかりの愛児オシーンとの3人暮らし。ハワードもジャンも菜食主義者として知られています。

LOU REED

虚飾も伝説も要らない。

ルーはいつだってリードしている。

世界のロックン・ロール・ストリートのあり方を。



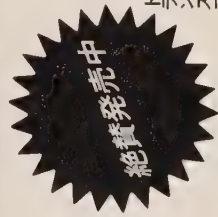
ミストライアル

MISTRIAL / LOU REED

Produced by Lou Reed and Fernando Saunders for Sister Ray Enterprises, Inc.
and Fernando's Hide-Away Music, Ltd.

ルー・リード

曲目▶ ミストライアル / ノー・マネー・ダウン / アウトサイド / ドント・ア
ハート・ア・ウーマン / ヴァイオレンス / スピット・アウト・ア
ウト ジ・オリジナル・ラッパー ママス・カット・ア・ラヴァー アイ・
リメンバー・ユー / テル・イット・トゥ・ユア・ハート
●RPL-8337 各 ¥2,700 (絶賛発売中)



●RPL-2117
グレート・エスケープ



●RPL-2118
ベビー



●RPL-3046 47
ライヴ・イン・イタリアー



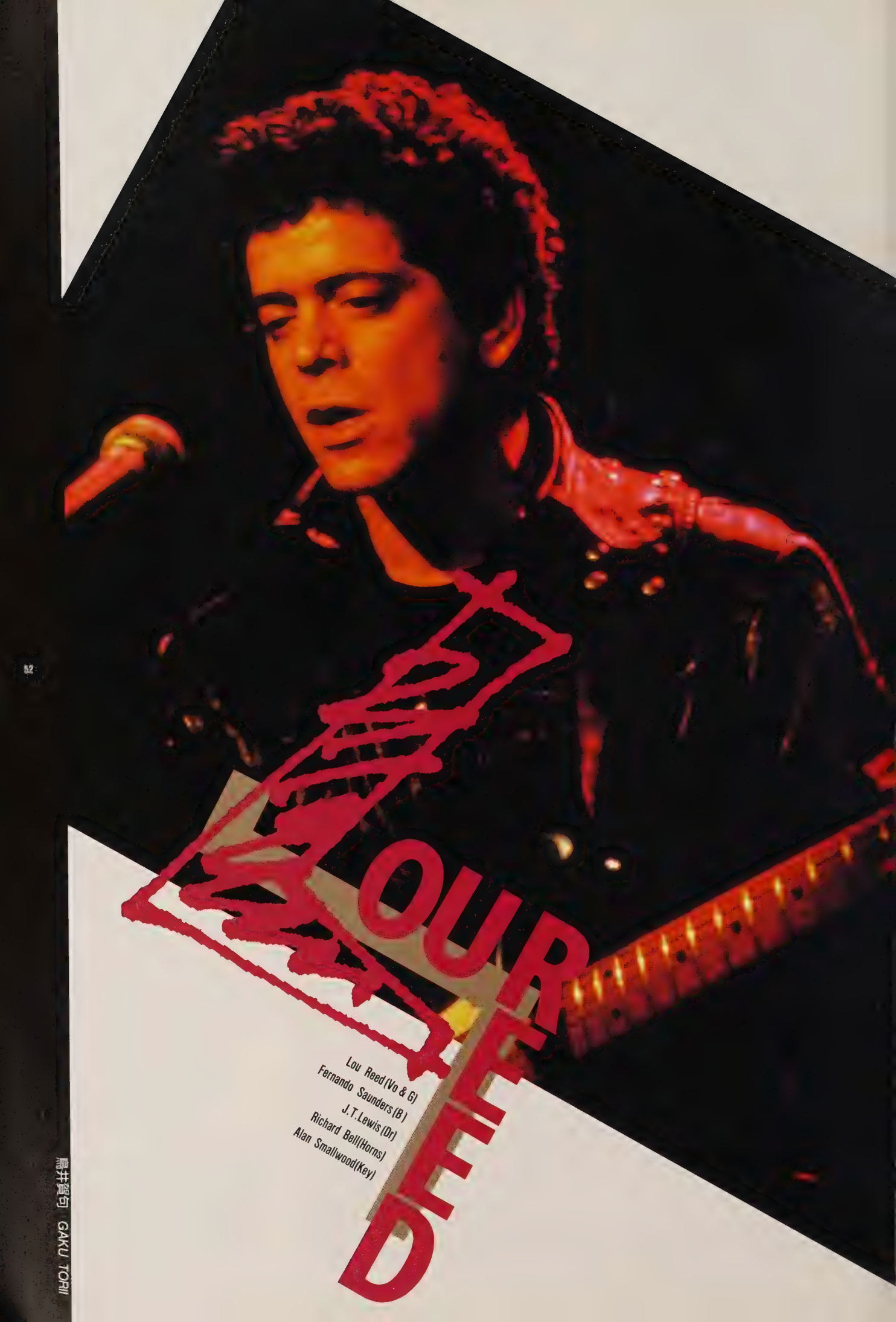
●RPL-8122
ブルー・マスク



●RPL-8184
ニューヨーク



●RPL-8249
ニューヨーク



52

Lou Reed (Vo & G)
Fernando Saunders (B)
J. T. Lewis (Dr)
Richard Bell (Horns)
Alan Smallwood (Key)



をうたった歌だった。

1965年、友だちの紹介でジョン・ケールに会ったルー・リードは、意気投合しプリミティブスというバンドを結成し、ピクウィック・レコードに数枚のシングルを吹き込むが、ほとんど話題にならなかった。65年11月、メンバーがためをしたルーとジョンは、SMの本のタイトルから名づけたヴェルヴェット・アンダーグラウンドというバンドを結成し、ニューヨークのブリーカー・ストリートにある「カフェ・ビザール」で演奏を開始する。彼らは当時のロック・バンドとしては珍しいジョン・ケールの弾くビオラ等をフィーチャーし、何ものにも捉われない自由なスタイルと、ルーの赤裸々な歌詞作りで徐々に話題を集めていった。彼らに大きな関心を抱いたのは、あのポップ・アートの創始者、アンディ・ウォーホルだった。彼は、ヴェルヴェットを自分の主催していた「ザ・エクスプローディング・プラスティック・インエヴィタブル」というサイケデリックなライト・ショウに出演させ、ヴェルヴェットの実在は、当時のニューヨークのヒップなアーティスト連中から熱狂的な支持を集めることになった。

1967年、ドイツ人女優ニコを女性ヴォーカルにフィーチャーしたヴェルヴェットはアンディ・ウォーホルのプロデュースのもと、ヴァーヴ・レコードから『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』のアルバムでデビューする。ヒロイン愛好者やサドマゾや背徳と淪落の世界を歌ったルー・リードとヴェルヴェットのこのデビュー作は、60年代のロック革命の中であのビートルズの『サージェント・ペパーズ』と並ぶ最も重要なアルバムとして、今もなお多くの評論家たちから高い評価を受けている。

1970年8月22日、ヴェルヴェットと4枚のスタジオ・アルバムを作った後、ルー・リードはグループを去り、ソロ・シンガーとしてのキャリアを歩き始めることになる。72年12月に発売されたルーのソロ第2弾『トランスフォーマー』のプロデュースは、なんとあのデビッド・ボウイが手がけ、この中の1曲「ワイルド・サイドを歩け」はチャートの上位まで昇る大ヒットとなった。その後もマイ・ペースでアルバム作りを続け、75年7月には『メタル・マシーン・ミュージック』という全編ノイズの実験アルバムを発表、だが75年12月に発表された6枚目のスタジオ・ソロ・アルバム『コニー・アイランド・ベイビー』からは、それまでの退廃的なイメージを捨て去り、都会に住む恋人たちや自分の生活をシンプルなビートに乗せて心のままに歌いあげるといふ、ヒューマンな作風を展開し始めることになった。それはかつての“ロック・ジャンキー”という風評を克服し、“死”ではなく“生きる”ことへ向かっての本当の強さとあらゆる優しさをすべて引き受けていこうとする、かけがえのないロックン・ロールの真実と良心への旅だった。

1982年、古巣のRCAレコードと再契約したルー・リードは、リチャード・ヘルム&ヴォイドイズのギタリスト、ロバート・グリン、元ジェフ・ベック・グループのベーシスト、フェルナンド・ソンドース、マテリアルのドラマー、フレッド・マハーらの強力メンバーを従え精力的なライブ活動を展開し始める。そんな彼の最近のエネルギッシュなライブの模様を捉えたのが、ビデオ『ナイト・ウィズ・ルー・リード』であり、『ライヴ・イン・イタリー』のアルバムであった。またアムネスティ・コンサートでの雄姿も記憶に新しい。

1986年6月、ルー・リードは彼にとっての通算18枚目のソロ・アルバムにあたる『ミストライアル』を発表し、そこでもシンプルで力強いロックン・ロールを聴かせ健在ぶりを示している。またニューヨークで活躍するアーティストのために設立された“ニューヨーク音楽賞”では見事“Hall of Fame”部門に輝いている。今回のジャパン・エイドでの来日はルー・リードにとって1975年7月の初来日公演より実に11年ぶりの再来日公演となる。デビッド・ボウイやブライアン・フェリーをはじめ、シンプル・マインズ、パウハウス、ジャパンなど、ニュー・ウェイヴの若手世代まで、ルー・リードやヴェルヴェットの曲をレコーディングし、彼を敬愛するアーティストは枚挙にいとまがない。セックス・ピストルズやジーズ&メリー・チェインの10年以上も前にパンクであった男ルー・リード、誰よりも深い夜の闇をくぐり抜けてきた彼だけが辿りついた本当の愛と優しさ……僕はそれを今回の来日公演ではっきりと確認するつもりだ。

“ニューヨーク・ストリート・ロックの重鎮”として、今もなお大きな影響力を誇るルー・リードは、1944年3月2日ブルックリンに生まれ、今年42歳になる。

ルー・リードが我々の前に登場したのは、1967年のことだった。大学で詩とジャーナリズムを専攻していたルーは、64年ごろからニューヨークのスモール・レーベル、ピクウィック・レコードのハウス・ソング・ライターとして、スーパー・マーケットに売りに出される三流ポップ・バンドに曲を書くという仕事をやり始めた。だがその一方で、ルーは自分自身のための歌を書き続けていた。それは“リアル・ライフ”……そう、ニューヨークという巨大都市の裏通りに生息するジャンキーや娼婦、オカマやストリート・ギャングといった“地下世界の住人”たち

西アフリカの西端に位置するセネガル、その首都ダカールは、アフリカ最西端のベルデ岬にあり、「アフリカのバリ」とも言われている。そのダカールでは、船やタクシー、そして自転車のボディにまで、ユー・スー・ンドゥールの名前が書かれていると言う。それほどまでに人気のあるスーパースターなのだ。

日本では去年サザン・オール・スターズと共演したトゥレ・クンダが有名だと思うが、トゥレ・クンダはあくまでパリを中心とした活動をしていて、ダカールにしっかり根をおろして活動しているユー・スーには、音楽的にも人気の点からいってもはるかに及ばない。

ユー・スー・ンドゥールは、1959年生まれの今年27歳。セネガルの総人口の3分の1以上を占めるウォロフ族の出身で、グリオ（楽器を弾きながら王や部族の歴史を歌い継ぐ、日本で言うところの語り部的なプロのミュージシャン）の両親を持ち、12歳の時にナショナル・タレント・コンテストに出場して、そのソウルフルなヴォーカルによって注目を集めたのが彼のミュージシャンとしての始まりだ。そして17歳の時に、あるプロデューサーの誘いで、スター・バンド・ド・ダカールのリード・シンガーとして、ダカールのナイトクラブに出演するようになったのが、彼が人気を得るキッカケであり、その後2年間スター・バンドと共演した。実はこの時期の活動が彼に大きな影響を与えたのではない、というのが僕の持論なのだ。このスター・バンド・ド・ダカールは意外と歴史が古く、1970年代に、セネガルの民謡のアレンジと、ラテンのコピーを中心としたアルバムを少なくと

も10枚以上は出していた。（なんと、エルトン・ジョンのカヴァーまである！）そのゴツアツ的な音楽性は、伝統的なものとモダンなもの、アフリカ的なものとカリブ海的なもの、さまざまな材料をぶち込んだ鍋の中で、ユー・スーも自分の個性を磨いたに違いない。

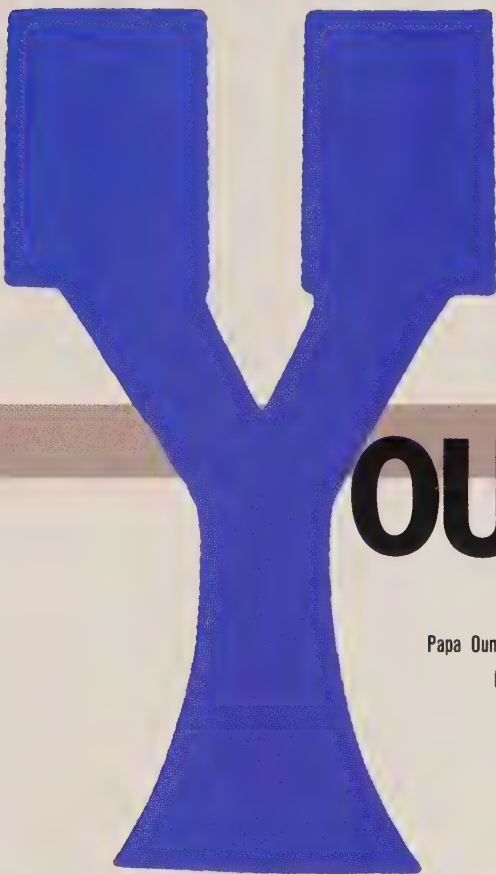


そして1979年に自分のグループ、エトワール・ド・ダカールを編成、しかし1982年にはグループが彼の率いるスーパー・エトワール・ド・ダカールとエトワール2000に大分裂。いろいろな変化の中で、ユー・スーは確実に大きく、そしてたくましくなっていた。それを証明したもののひとつが、84年にセルロイド経由でリリースされたアルバム『イミグレ』だ（Celluloid CEL6709）。その後の彼の活躍は、アフリカだけにとどまらず、84年には、アフリカ人によるアフリカ救済レコード『タム・タム・プール・エチオピア』（東芝EMI14VA-9022）に参加して素晴らしいヴォーカルを聞かせてくれた。

1985年に入ると自らのレーベル、「マグネティック・レコード」を設立する一方で、バンドを離れたソロ活動も多くなっていく。そんな中でリリースされたのが、『ネルソン・マンデラ』（Magnetic 240 446）で、フィラデルフィア・ソウルの名曲、「ザ・ラバー・バンド・マン」から、南アフリカの人種差別批判を歌った「ネルソン・マンデラ」まで多彩な内容になっていて、特に後者の歌が、ピーター・ガブリエルとの出会いを生むキッカケになったことは想像に難くない。アフリカのミュージシャンとしての自覚が強くなっていく中で、ピーター・ガブリエルの新作『So』（東芝EMI 28VB-1088）への参加や、世界の民俗芸能の祭典WOMAD（World of Music Art & Dance）への出演も自然の成り行きと言える。WOMADでのステージが素晴らしかったことや、ピーターが今度はユー・スーのアルバムに参加するというニュースも伝わってきている。そして最新ニュースとしては9月



16日(平和の日)に国連前で行なわれたコンサートにピーターらと共演している。彼のここ数年のインターナショナルな活動の裏には、彼のヴォーカルが西欧の人人の心をも揺り動かしてしまった、という紛れもない事実があるのは確かだ。彼は自分たちの音楽を"ンバラ(mbalax)"と呼んでいて、ドラムス、エレキギター、ベース、キーボード、サクソ、タムタム、それに"タマ"と呼ばれるトーキング・ドラム(ナイジェリアのサニー・アデで有名になった。日本の鼓に似て、ピッチを変えることができる)が加わる。そのサウンドはメリハリの効いたドラムスにギターの低いドゥーンという音が腰に響く、そしてそれらのすべてを包み込むかのようなユースーの圧倒的なヴォーカル。伝統的なグリオの唱法の上にイスラミックなメリスマの効いた絶妙の節まわしは一度聞いたら忘れられないほどの強烈な個性を持っている。本当に彼の高音の伸びのある、それでいてどこか哀愁を帯びたヴォーカルは素晴らしい。エルトン・ジョンのようにポピュラーになりたいと言う一方で、"ンバラ"がすべてと語る彼の、よりインターナショナルな活動の成果としての来日ステージ、大いに期待したい。



YOUSSEU

Yousseu N'Dour (Vo) Ousseynou Ndiaye (Vo)
 Seydou Nkoite (Sax) Habib Faye (B & Piano)
 Papa Oumar Ngom (Rhythm G) Mamadou Mbaye (G & B)
 Babacar Faye (Per) Assane Thiam (Talking dr)
 Fallou Niang (Dr) Ibrahim Konate (Tr)
 Ablaye Seck (Dancer) Marietou Kote (Dancer)

AND SUPER
 N'DOUR
 TOILE DE DAKAR



英・米なんかでは認められているが、我が国においては今ひとつ知名度の高くないミュージシャンというのがある。本格派と呼ばれる人にわりあい多い。ジョーン・アーマトレイディングもそのひとり。英黒人女性のAORミュージシャンという珍しさもあるが、なんといっても天才肌ゆえに、くろうとうけのシンガーソングライター&ギタリストとしてないがしろ(?)にされている。しかし、たしかにちょっぴりとっつきにくいかもしれないが、ホントにシブイ"音"を聴かせてくれる、まれなアーティストといえるだろう。1950年12月9日、西インド諸島内のセント・キッツ生まれ。7歳のとき、イギリスのバーミンガムに移る。

つまり幼いころ、カリビアン・ミュージックと欧米のポピュラー・ミュージックというふたつの音楽的洗礼をうけながら育ったというわけ。そのころから耳の方は肥えていたようで、マリアンヌ・フェイスフルに心情的共感を覚えるかなわら、ナット・キング・コール、ジム・リーヴス、トミー・スティールらにのめりこんでいったという。

そんな女の子が、ギターやピアノを覚え、ミュージシャンになりたいとねがうのは、ごくあたりまえのなりゆきだった。プライベートなバンドでベースを弾いていたという父の姿を見て育っていきや、なおさらである。ただし、父はどういうわけが娘が音楽界に入るのを好ましく思っていなかったらしく、ギターを隠したこともあったそうだが……。

自作曲をつくってバーミンガムのクラブなどで歌いだしたのは、17歳のとき。や

がてロンドンに移り、ライブをくりひろげるうちに、だんだんとその名を知られるようになる。1972年からは、曲づくりにおいて、ガイアナの作詞家パム・ネスターと組む。

そして1973年、アルバム『ホワットエヴァーズ・フォー・アス』(CUBEレコード)をリリースし、デビュー。ついで1975年にA&Mとサインし、実質的なデビュー・アルバムの『バック・トゥ・ザ・ナイト』をリリース。翌76年の『ジョーン・アーマトレイディング』がヒットし(英12位・米67位)、ブレイクアウトを果たしている。

1976年以降も、『ショウ・サム・エモーション』(77年 英6位・米52位)、『トゥ・ザ・リミット』(78年 英13位・米125位)、『ハウ・クルエル』(79年・ミニアルバム 米136位)、『ステッピン・アウト』(79年)、『ミー・マイセルフ・アイ』(80年 英5位・米28位)、『ウォーク・アンダー・ラダーズ』(81年 英6位・米88位)、『ザ・キー』(83年 英10位・米32位)、『トラッ

ク・レコード』(83年・ベスト 英18位・米113位)、『シークレット・シークレッツ』(85年 英14位・米115位)、そしてヒット中の初のプロデュース作『スライト・オブ・ハンド』と、10年以上コンスタントにヒット。

シングルも、『ラブ・アンド・アフェクション』(76年 第10位)、『ロージー』(80年 英49位)、『ミー・マイセルフ・アイ』(80年 英21位)、『オール・ザ・ウェイ・フロム・アメリカ』(80年 第54位)、『アイム・ラッキー』(81年 英46位)、『ノー・ラブ』(82年 英50位)、『ドロップ・ザ・バイロット』(83年 英11位)の6曲が英ヒットチャートに入り、ジミメながら理想的なヒットをとげている。それも、会社側の「もっとヒットするような曲をかけ」という商業的要求を、「私のやりたいようにやる」と、つっぱねてのうえだから、たいしたものである。

ジョーン・アーマトレイディングの音楽性を述べるにあたって、「黒いジョニ・ミッCHEル」という人がいる。それはそれで、

たんてきにいいあてているともいえる。たしかにその切り口の鋭さ、閃き、インシスト、テクニクのたしかさ、「深み」のある音楽的センスなどにおいて、似ている点は多い。しかしあのミッCHEルさえも、キャラクターの強さ、いいかえればあくの強さにおいて、アーマトレイディングにはかなわない。アーマトレイディングの「あくの強さ」は、かつて自ら憧れていたという、ジミ・ヘンドリックスやヴァン・モリソンゆずりのもの。いわば、「女」のたおやかさをとっぱらったところにある。そして、それが「ついてこれないものは、こなくてもかまわない」といわんばかりの雰囲気をもかもしだしている。たとえ(むろん)、アーマトレイディングにそんなつもりはなかったとしても……。ただしそれだけに、切れ味はほんもの。口あたりはわるくとも、こくのある100%「モルト」ロックが楽しめる。2〜3回も聴いたら忘れられない、そしてひいきにしても裏切られることのない、ミュージシャンといえるだろう。

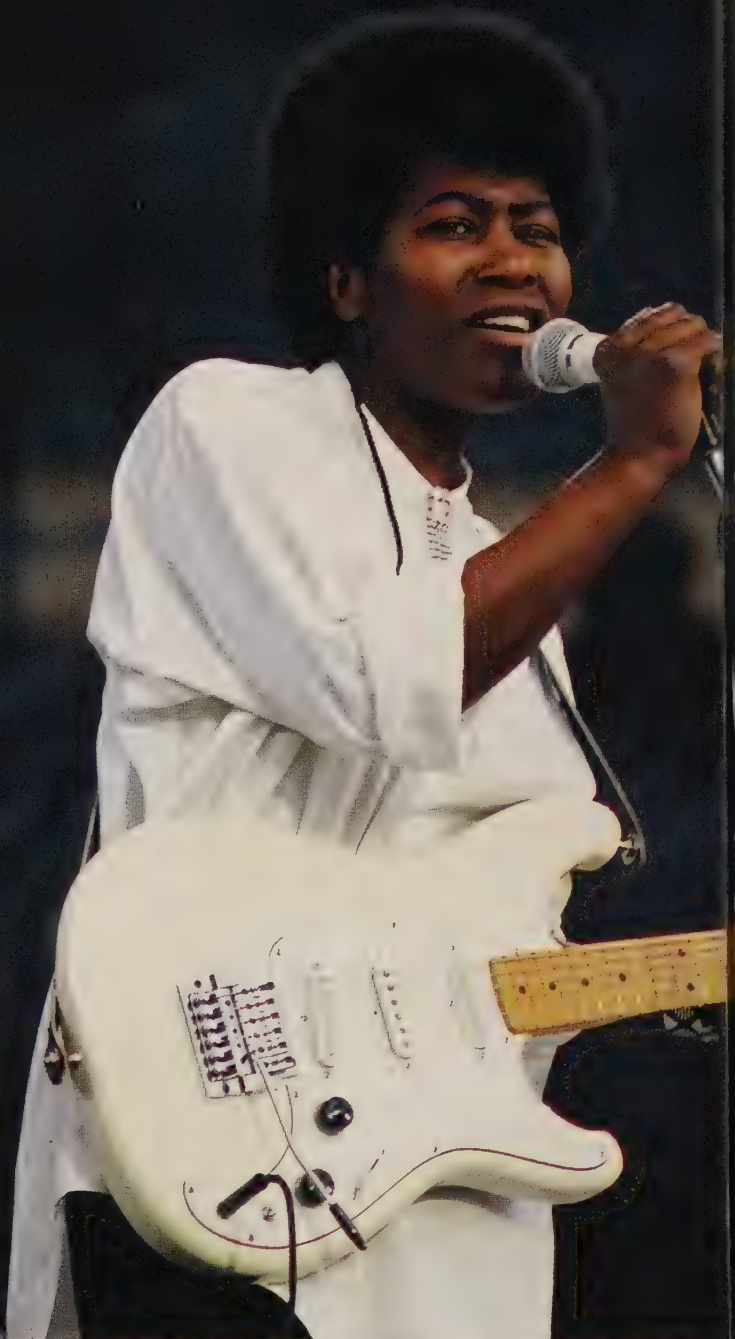




photo by Seiji Matsumoto

大変残念なことに、ジョーン・アーマトレイディングは病気のため今回のイベントに欠席するとの連絡がランニング・ドッグ・マネージメントより入りました。ジョーンとランニング・ドッグ・マネージメントより、コンサートの成功を祈るとの旨が伝えられています。以下は、ジョーン・アーマトレイディングのコメントです。

"I KNOW IT'S BEEN SAID BEFORE, BUT GIVE PEACE A CHANCE. SORRY I CAN'T BE THERE WITH YOU."

Joan Armatrading

JOAN ARMATRADING



ACKSON B BROWNE WITH DAVID LINDLEY

Photo by Randee St. Nicholas



Photo by Ron Delany



Photo by Seiji Matsumoto



Photo by Randee St. Nicholas



ジャクソン・ブラウンは70年代、80年代を通じての最も信頼のおけるソングライターのひとりであると同時に、聴く者の心を揺さぶる素晴らしい愛の歌い手として、ここ日本では特に馴染み深い存在だ。彼が今から12年前の1974年に発表したアルバム「レイト・フォー・ザ・スカイ LATE FOR THE SKY」は、世の中の風景がガラリと変わった現在もおお、未だ色褪せぬ愛のバイブルであるかのように、聴き手の心の奥にそっとキャンドルの灯りをともしてくれる。そして、ここ数年の彼は当時の織姫にして辛辣な愛の詩人の面影を留めつつも、個人のレベルを超えた立場からポジティブな姿勢に基づいた歌を書き、それを力強い意志を込めて歌う、いくぶんポリティカルな性格の強いプロテスト・ロッカーへと大きな変貌を遂げた。

1983年のアルバム「愛の使者 LAWYERS IN LOVE」、そして今年(86年)のアルバム「ライブズ・イン・ザ・バランス LIVES IN THE BALANCE」、この2枚の近作を聴き込んでおられる方なら、彼ジャクソンのうた作りの大きな変化、物事や社会情勢にどんどんシリアスになっていくさまがよくわかりいただけるのではないと思う。第3次世界大戦が勃発しても不思議じゃ

ないこの危険な時代に愛の可能性を問いかける「愛の使者 LAWYERS IN LOVE」、争うためではなく、人類の英知はもっと高尚な目的のために使うべきもの、と説く一方で、この目をそむけなくなるような現実を垣たと置ってくれ、と祈るように繰り返す「偽りの言葉 SAY IT ISN'T TRUE」。“この世界はあんたのおもちゃじゃない”というフレーズが際立った印象を残しながら、軍事政策批判を痛烈にやってのける「ソルジャー・オブ・ブレンティ SOLDIER OF PRENTY」、そして、あたかもブルース・スプリングスティーンの「BORN IN THE USA」と対の作品であるかのような印象を与えつつも、独自の発想と思想をもって祖国アメリカの病巣に挑んだ「フォー・アメリカ FOR AMERICA」などなど、このところの彼の作品からはそのような真摯な問題意識がよりロックン・ロール色を増したパワフルな演奏を通して、強くヒシヒシと感じられるのだ。

“音楽で僕らの魂をハイにするんだ。ビルが子供たちの心を荒廃させないためにも、素晴らしい創造の秘密を明らかにしてあげよう”……思い起こせば、ジャクソンは以前、先の12年前のアルバム「レイト・フォー・ザ・スカイ」の中の「ビフォー・ザ・デリュージ BEFORE THE DELUGE」でそのように歌ったことがあった。彼のそうした意識がやがて深く関わることになるさまざまなコミュニティ活動、運動への積極参加を裏付ける際のひとつの確かな動機、理由に

なっていることは、その後の行動ぶりにも明らかだ。わけても1979年の原子力発電所建設反対を目的とするノー・ニュークスのビッグ・イベントにおいては自ら発起人的な立場をとり、ジョン・ホール、グラハム・ナッシュ、ボニー・レイットらと共に、延べ5日間(9月19-23日)にわたるコンサートを大成功へと導いてみせた。

同イベント最大の呼びものとなったブルース・スプリングスティーンとのその後の交流もよく知られ、彼のよき片腕クラレンス・クレモンズとデュエット曲「フレンド・オブ・マイン YOUR FRIEND OF MINE」を吹き込んで話題をまいた他、同じスプリングスティーン・ファミリーのリトル・ステイブンは南アフリカのアパルトヘイト政策に反対して制作したレコード「サン・シティ SUN CITY」にも、彼ジャクソンはボブ・ディランと肩を並べて参加した。そのジャクソンが“JAPAN AID (MUSIC FOR PEACE)”に参加する。彼は今回のイベントに初めから積極的に参加の意を表明し、わずか1ヵ月にも満たない1987年早々の日本公演が決定しているにもかかわらず、盟友デビッド・リンダレーと2人だけの特別なステージを見てもらいたいと張り切っているそうだ。クリスマス・シーズンからニュー・イヤーにかけて2度も東京・ロサンゼルス間を往復することになるわけで、彼のこの積極的な姿勢はおそらく実際のステージでもポジティブで力強いメッセージとなって、観衆の心を強く強く揺さぶってくれることだろう。

“NOW LET THE MUSIC KEEP OUR SPIRITS HIGH”……そう、12年前に彼ジャクソンが口にしたこのフレーズこそ、今ほくらが歌うべき希望のピース・ワードなのかもしれない。

NONA H

Nona Hendryx (Vo)
 Ronnie Rojas (B)
 Trevor Gale (Dr)
 Steve Scales (Perc)
 Chuck Kentis (Key)
 Brenda Nelson (Vo)
 Benjamin Biggs (Vo)

ENDRYX

黒人ながらロック、ジャズなど幅広い音楽性を持っているインテリ女性シンガー、ノナ・ヘンドリックス。日本にも1984年に来日して一部のファンのあいだで注目された。ゴスペルをバックにした迫力ある歌唱と現代的なサウンドは、彼女を単なるブラック・シンガーの域にとどめておかない。

ノナ・ヘンドリックスは1945年8月18日ニュージャージー州トレントンという街に生まれた。子供のころから近くの友だちとグループを結成したりして音楽活動をスタート。1960年代に入ってから友人のサラ・ダッシュとともに「ザ・デル・カプリス」というバンドを結成。その後、このふたりは、パティ・ラベルが結成した「パティ・ラベル&ブルーベルズ」に参加。ローカル・レーベルからいくつかのヒット曲を出すようになる。しかし、このグループは黒人のしかも女の子だけのグループとしてもうひとつパツとしなかった。そこで1970年代に入って「ラベル」として派手な衣装を着たりして大きくイメージ・チェンジ。これが成功し1974年「レディ・マーマレード」の全米ナンバー・ワン・ソングを獲得する。この曲は、ニューオーリンズのベテラン、アラン・トゥーサンがプロデュース作品で、曲の中にフランス語が入っているというユニークな曲だった。

このヒットによってラベルはあちこちへコンサート・ツアーなどに出かけるようになるが、そのライブ・ステージは宇宙服のような衣装とロック的なサウンドで注目を集める。ところが、彼らのやったロックとブラック・ミュージックの融合した音楽は、当時としては黒人からはロックすぎると敬遠され、一方ロック・ファンからは、黒すぎるといってなかなか正当な評価を得ることができなかった。別の言葉でいえば、彼女たちが時代の先を行きすぎていた、ともいえる。従って、残念ながらこの「レディ・マーマレード」のヒットのあとが続かず、「ラベル」は1976年自然解散。3人のメンバーはそれぞれソロ・シンガーに転じた。ノナはエピックからソロLP『ノナ・ヘンドリ

クス』を出すのがヒットせず、その後第一線からしりぞき、他のアーティストのバックを務めたりするようになった。また、サラもパティもソロになる。そのうち、パティ・ラベルが1986年アルバム『ウィナー・イン・ユー』からマイケル・マクドナルドとのデュエット曲「オン・マイ・オウン」を大ヒットさせたのはご存知のとおり。

ノナの方はそうした中で、ロックのトーキング・ヘッズが彼女の才能を認め彼女をゲスト・ヴォーカルとして起用したりして、ロック・アーティストとの交流を深め、1983年RCAから6年ぶりにソロ・アルバム『ステディ・アクション』を出す。このアルバムで彼女は、ハービー・ハンコックに「ロックイット」の大ヒットを提供したビル・ラズウェル率いるユニークな音楽集団マテリアル、あるいは、ナイル・ロジャース、スライ・ダンバー（ジャマイカのリズム・セクション）などとのコラボレーションをみせ、こうした交流によって、ブラック系よりもむしろロック系のファンから注目された。

その後1984年LP『アート・オブ・ティフェンス』を出している。ここでも再びマテリアルがプロデュースしている。

さらに、彼女は昨年南アフリカの人種隔離政策として悪名高い「アパルトヘイト」に反対する「サン・シティ」のプロジェクトに参加、レコード、ビデオにも姿を出している。ビデオでは、やはりニューヨークの黒人プロデューサー、カシーフとならんで歌っていた。

さらに、彼女は1986年LP『ヒート』を出したが、残念ながら大ヒットには至っていない。最新情報では、今はRCAからはなれマンハッタン・レコードと契約したらしい。

ノナはインタビューで、彼女はラベル時代には曲を書くときに常にパティのことを思い浮かべて書いていたが、ソロになってからは常に自分自身のことを考えて曲づくりをすればよかった、といっている。

彼女は自分の好きなアルバム10枚のトップに、カラヤン指揮のベルリン・フィルの『惑星』を選んでいる。以下、ビートルズの『ホワイト・アルバム』、アレサ・フランクリンの『ヤング・ギフト・アンド・ブラック』、さらにザ・フーの『トミー』、ジミ・ヘンドリックス、トーキング・ヘッズ等を選んでおり、彼女のクラシックからロックへの趣味というものがよく出ている。

彼女は会って話すととても静かにしゃべる知性派だが、ひとたびステージにあがると別人のように変身してダイナミックな歌を堂々と披露する。

80年代は、音楽がブラックもロックもひとつになりつつある時代でもある。時代は彼女のブラック/ロックのユニークな音楽を求め始めているといってもいいだろう。

ノナ・ヘンドリックス、音楽性の広いインテリ・アーティストである。





YOSHIN

Y



photo by Kenji Miura

萩原健太 KENTA HAGIWARA

ROK A I

よしひろ

ひとりの新しいロック・シンガー。それも、間違いなくとびきりのやつだ。その大いなる旅立ちを、今まさに、ぼくたちは目撃しようとしている。OK。お膳立ては絶好だ。

12年間。そんな長い歲月、彼は屈強のロック・バンドを率いてシャウトし続けてきた。やすらぎ、苛立ち、不安、自由、限界、罪、神聖さ、伝統、先鋭、セックス、愛、自信、虚栄、無邪気、覇気、諦観……。バンドのメンバーたちが容赦なく繰り出す強靱なロック・サウンドと格闘しながら、彼は、街に渦巻くそうしたさまざまな感情をまるごとのみこみ、そして吐き出し続けてみせた。

おそろべきテンションに満ちた闘いの12年間。その歴史がクライマックスの第一ページを迎えたのは、1981年のことだった。彼らはニューヨークに向かった。当

時はまだ無名に近い存在だったポップ・クリアマウンテンというミキシング・エンジニアと新たな創造的ディールを交わすためだった。この魅惑的なコンビネーションはその年、『虜 TORIKO』という1枚のアルバムを産みおとした。

はるけき50年代、アメリカのティーンエイジャーたちのあいだで、やり場のないフラストレーションの発露としてロックン・ロールが自然発生的に炸裂した。それからすでに30年。その間、ロックン・ロールは、ロックは、徐々に膨張を続けながら、無数の抗しがたい魅力を培い続けてきた。『虜』という1枚のアルバムには、そうした魅力の——すべてとは言わないけれど——多くが確実に詰まっていた。正真正銘“ロック的な”魅力が、だ。そのアルバムでは彼は、あまりにも赤裸裸だった。真摯だった。求心的だった。時にはとてつもなくハードなドラム・サウンドの彼方で、ひたすら心の平静を願いながらシャウトしてみせた。また、時

には暴力と安酒に彩られた人生の一断面を、シャープに、荒々しく歌い綴りながら、奇妙に敬虔な一瞬を演出してみせた。いまいまでも素敵なお宝。何もかもがスリリングだった。ポップとのコラボレーションが作り出した完成度の高いサウンドが、すべてを裏打ちしていた。彼は、彼らは、ポップというかけがえないパートナーを得て、ついにまぎれもない“ロック”を盤上へと定着させることに成功した。

ポップ・クリアマウンテンと彼らとの無敵のコンビネーションは、その後、あしかけ4年間続いた。そして、さらに2枚の傑作アルバムを生んだ。1983年の『GO-LO』と85年の『LOVE MINUS ZERO』。

『虜』を含めたこの三部作は、数多くのトップ10ヒットに彩られた彼らの華々しい経歴さえもすべて途中経過にしてしまった。彼らは自らのバンドとしての歴史に、この上なく力強い形で堂々たる決着をつけたのだ。

1986年3月3日深夜。

東京青山のとあるクラブでのスペシャル・ギグを前に、彼は席上に集まったマスコミに対し、こんな発言をした。

「音楽的にも、もちろんエモーショナルな部分でも、充分やるべきことはやれた、と、今満足しています……」

彼らは解散した。

12年間の歴史にピリオドを打った。その最終ページを飾ったのは、日本のミュージック・シーン史上初の日本武道館5日間連続公演と、そのステージの模様を1枚に凝縮した素晴らしいライブ・アルバムだった。彼らはそのアルバムに、はじめて自分たちのバンドの名前を冠した。

『THE 甲斐バンド』。

過去、キング・オブ・ライブ・バンドの異名を欲しいままにし、数々の伝説的なコンサートをこなしてきた彼らにふさわしい幕の引き方。堂々たる結末だった。そして、彼——甲斐よしひろはソロ・アーティストとしての道を歩みはじめた。1986年6月のことだった。

今、甲斐よしひろは、甲斐バンドを解散後、はじめてステージに立とうとしている。誰もが待ち望んでいるソロ・アルバムの完成も間もなくだ。

何が起ころうとしているのか。それはまだわからない。けれども、ひとつだけ確実なこと。それは、甲斐バンドが作り上げたロック的快感を継承し、かつそれを軽く上回ることができる男は、もはや甲斐よしひろひとりしかいないということだ。『虜』という1枚のアルバムがぼくたちにプレゼントしてくれた以上の衝撃に向けて、甲斐よしひろは着々と爪をとぎつつあるのだろう。その最初の一撃を、今、全身で受け止めてやる。

臨戦態勢は万全。いつでもこい、だ。

photo by Goro Iwaoka



REBECCA

NOKKO (Vo)

土橋安騎夫 (Syn)

高橋教之 (B)

小田原豊 (Dr)

友森昭一 (G)

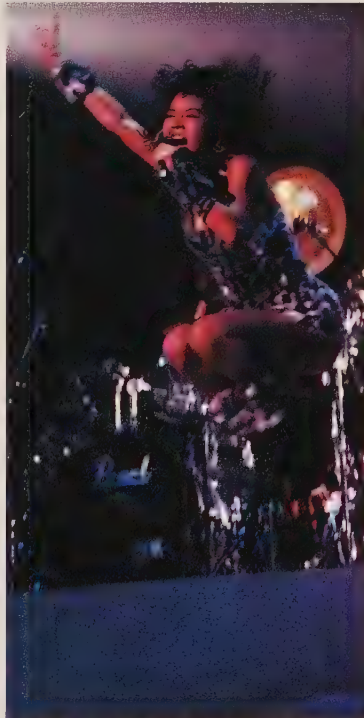
* Tour supporting musician





例えばヒューイ・ルイス&ニュースのアルバムなんかがい例だろう。かのロング・セラー『スポーツ』は一聴してスツと耳になじむが、いわゆる大作的な仰々しさが無い分、名盤のありがたみに欠けたりするものだ。ところが、ラジオで頻繁にオン・エアされ、ヒットチャートを上昇するに仕掛けて、改めて楽曲の良さに気がつき、ついには実質的愛聴盤に成り上がる……と。

レベッカの出世作(つーのかな?)『RE-BECCA IV Maybe Tomorrow』が飛躍的セールスを記録したのは、そういう実質面が充実していたからこそ結果だと思う。弾けるポップス、ダンスブルなビート感、ツブ揃いの楽曲、なんて書くにや簡単でも、能書きたれるにやラクでも、実現するのはエラク難しいに決まってる。しかも、ここで重要なのは、レベッカが単体ではなくてバンドだという点だ。セールス面では松田聖子級にな



ったとしてもだ。リードボーカルのNOKKOがバンド・カラーを印象づけているのは確かだけれど、それはあくまでもイメージ。レベッカのバンドとしての存在証明はライブで発揮されるだろうから、誤解されているムキにはその眼と耳で確かめてもらうのが一番だろう。

それにしても、同性の眼から見てもNOKKOは魅力的だ。80年代は女性ロッカーの進出が洋の東西を問わず目立った動きを見せたが、同性が受け入れるようなタイプとなるとまた話は別になってくる。歌が上手い、ルックスがカワイイだけでは共感よりむしろ反発を抱く可能性だってある。マドンナがフェミニズム派の女性から「女の価値観を10年逆行させた」と攻撃され、シンディ・ローパーを称賛するように、女性の女性観は微妙なのだ。なのに、NOKKOが同性からも熱烈に支持されているのはなぜか? 雑誌のバンド・メンバー募集欄に「当方明るくチャームアップな女性V.O.。レベッカ・タイ

プのバンドやりたし」なる個人広告もよく目につくらいだ。150cmの小さなカラダからほとばしる歌への熱い想いを、NOKKOは全身で表現できる歌い手だ。レコードを聞いても、ライブを観ても彼女の存在はエキサイティングこの上ない。「世界中の誰よりも輝いてみせる」という女性特有の上昇指向も彼女ならイヤミにならない。徹底して個人の感情を歌っているのも、焦点がハッキリしていて小気味イイ。メッセージやコンセプトで言い訳を探すようなコスイ真似をしなくても、「アタシはこうよ」と彼女は言っているような気がする。そこがNOKKO、すなわちレベッカの音楽の意志を表明しているのだ。

デビュー時はバット・ベネター、メンバー・チェンジ後はマドンナと何かと比較されもした。しかし、そんな無意味な思惑をよそに、精力的なツアーを行ない、バンドとしての成長著しい最近のレベッカ。つい先日観たコンサートは、1年前とは比べものにならないほど充実していた。アップ&ダウンが激しかったNOKKOのボーカルも一定のハイ・テンションを保ち続け、一種の気迫を感じさせたほどだ。「グループ」というんだらうか? バンドが渾然一体となったときの「高み」が備わって、「もう誰にも文句は言わせないぞ」的な自信が確実なものになった。と、まあここまでカタイこと書いてみたものの、イマイチレベッカの魅力なんてものが説明しにくいことにハタと気がつく。彼らにインタビューしても、「そうさなあ。時代に合ったんじゃないですか?」などと涼しい顔して答えるに決まってる。ウーム……。

「"ポップになった"ことを否定的にとらえる人もいるだろうけど、よくできたポップスほど難しいものはないと思う」。レベッカの曲の大半を書いているキーボードの土橋安騎夫が言っていたのを思い出した。ビートルズの『アビー・ロード』が生涯のベスト・アルバムという彼にとって、ポップスとはあらゆる可能性を秘めた音楽に他ならない。そう、レベッカは、今時のポップ・ミュージックの柔軟性をバンドの核にしているのだ。ハードコア・パンクも好きだし、レベッカもイイね。そんなノン・ジャンルの嗜好性が彼らの強味なのかもしれない。ちなみに新加入のギタリスト、友森昭一は元オート・モッドである。というくらいだから、これからのレベッカがますます楽しみなのだ、ワタシは!

ゆえにピーター・ガブリエルとジャクソン・ブラウンを同時に享受できる身も心も柔らかい音楽ファンこそレベッカを楽しめると、断言しておこう。彼らのライブは、カラダ半径3m以内に迫ってくるから、くれぐれも動きやすさを計算した姿勢で臨まれたい。

寒風吹きすさぶ屋外だから、ホット&スパイシーな音楽が必要なんでしょうが。レベッカの香辛料はちょっとキツイよ。ウンと暖ったまるけど……。

1959年1月19日生まれであるから、白井貴子は現在27歳になる。ビートルズ・エイジにしては若すぎるし、パンク・エイジとしては少しだけ年齢を取っている。いわゆる、音楽的には中途半端な世代に属する白井貴子だが、現在の彼女の音楽性は、こうしたところに起因することが多い。彼女の作り出す無臭な、固定観念にとらわれない身の軽いロックは、彼女自身の感性もさることながら、ヒーローが不在で、さまざまなポップスの表層だけを愛すればすんだ時代に育ったという背景があったからこそ作り得るものだと思える。

とりあえず、彼女のバイオを簡単に紹介してみよう。

ポップスの世界に足を踏み入れたのはローティーンのこと。多分にアイドル的な感覚でビートルズのファンになったのがきっかけだ。高校のころはソウルからハード・ロック、はたまたプログレッシブ・ロックまでを聴きまくるほどのポップス愛好家を自称。そして、大学では何とクラシックを専攻することになる。このあ

たりまでは音楽を“広く、浅く”聴く典型であったようだ。

卒業後、インテリア関係の企業に就職するが、このあたりからミュージシャンへの野望が生まれはじめ、“ビップ”というポップス系のバンドを結成する。1981年に自らの曲「夢中だいすき」でCBSソニー主催のSDオーディションを受け、合格。同年11月1日、シングル「内気なマイ・ボーイ」でレコード・デビュー。白井貴子22歳の時だ。

当時はまだ、彼女の中には確固たる方向性が存在せず、回りのスタッフの意向で“世界一キュートなシンガー・ソングライター”なるキャッチ・コピーがつけられ、ファースト・アルバム『DO FOR LOVING』などは、かなり都会的な、洗練されたものにされていた。現在の彼女が持つロック的な要素など、微塵も感じられない仕上がりがた。

2枚目のアルバム『I Love LOVE』、3枚目のアルバム『バスカル』あたりからは、ようやく作品の中にロック的な自我が芽生えるようになってくる。山下久

美子に次ぐ、“第二の総立ちの女王”などと呼ばれ始めたのもこのころのこと。音楽ジャーナリズムの煽りもあり、彼女自身も“男性には負けたくない”“自分だけのロックを作りたい”と躍起になっていた時期ではあったが、残念ながらこの時期の作品は、白井貴子というアーティストとのバランスが十分に取りきれていないものが目立った。

しかし、1984年5月に発表された、西本明のプロデュースによる4枚目の『HEART ATTACKER』、翌年4月の、彼女のツアー・バンドであるクレイジー・ボーイズとの協同作業による5枚目の『Flower Power』あたりから、彼女自身の中にある変な気負いを取り除くことに成功し始め、その人間性と、音楽的ルーツを素直に表現したロックを作れるようになっていく。今年に入ってから、6月に『Raspberry Kick』というアルバムを発表しているが、このあたりではほぼ完璧に近い形で自分自身のロックを演じることができるようになっている……。このように、かなりの試行錯誤を繰り返しながら、デビュー5年にしてやっと自分の世界を築きあげた遅咲きの白井貴子ではあるが、彼女の存在は今、いろいろな意味で非常に興味深い。例えばコンサートのやり方などをとってみてもそうだ。10日間連続でライブ・ハウス公演を行なうという試みをしたり、日本武道館や西武球場などでビッグ・イベントを行なうかたわら、京都の磔磔やロンドンのエンバシー・クラブなどで無告知のギグを開いたり、常に上にも下にも行ける身の軽さを保持している。こうした活動方針は、ある意味ではおざなりになりつつある日本の音楽産業自体に新しい息を吹き込む結果にもなるであろう。固定観念にとらわれていないことが、非常にいい形で表れている。

また、この11月12日に発売された最新シングル「COLOR FIELD」にも代表されるように、最近では“ラブ&ピース”というものを主張する内容の曲が彼女のレパートリーの中に増えている。いわゆるメッセージ・ソングの一種だが、ブラックな印象を与えずに、アンチでない発想でもってこういう曲を唄えるシンガーは彼女ぐらいのものだろう。彼女の自然な発露によるものだが、ティーンのころに抱いていたビートルズに対する信仰心がここへ来て、一気に出ているようで面白い。このように簡単に目につく事実だけを挙げてみても、彼女が今いる位置がユニークなのはよくわかる。この11月1日、この夏に行なわれた西武球場のコンサートが収録された2枚組のライブ・アルバム『NEXT GATE LIVE』が発表されたが、これに関して白井貴子本人は、“5年間の活動の総決算だ”とコメントしていた。「それまでの白井貴子はこれで完結し、新しい時代に入った」と。この先、サウンド面のみならず、その活動方法、メッセージャーとしての姿勢等々、白井貴子に対する興味はこれからまだまだ、尽きそうにない。



TAKAKO SHIRAI &

白井貴子&クレイジー・ボーイズ

白井貴子(Vo)

片山敦夫(Key)

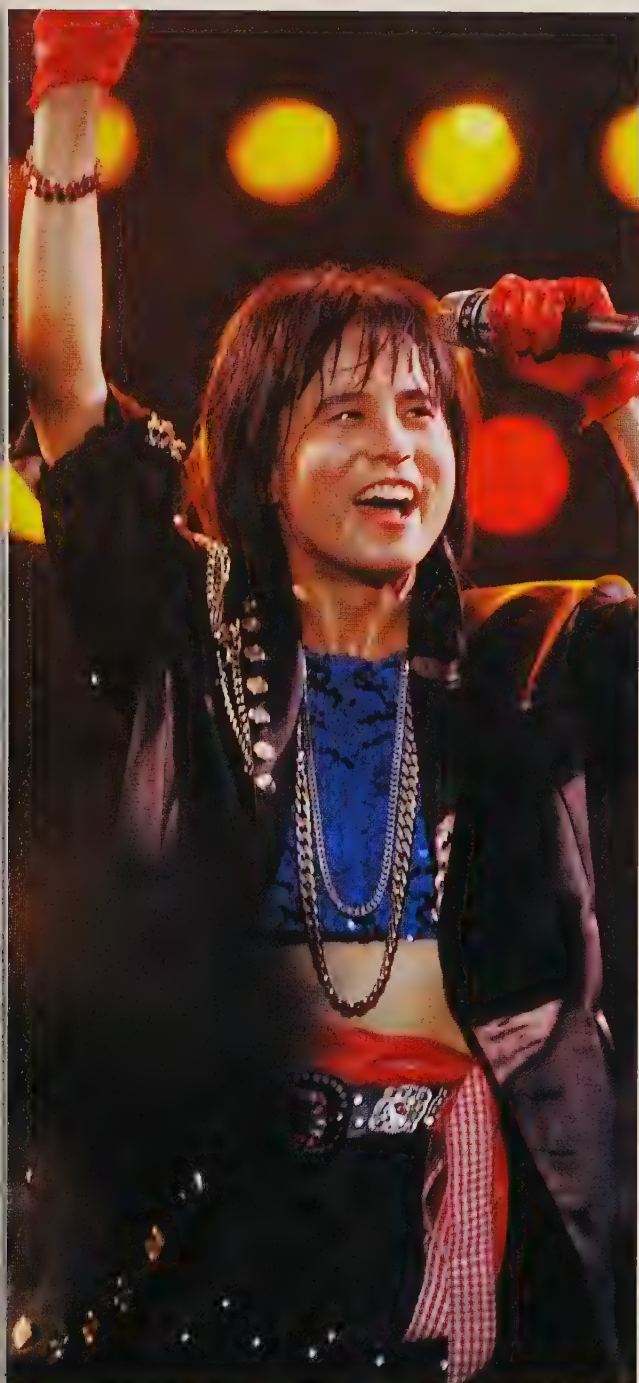
春山信吾(B)

南明朗(G)

本田清己(G)

河村智康(Dr)

CRAZY BOYS



SAN



DI &

サンディー&ザ・サンセッツ

THE SUNSETZ

SANDII (Vo)

久保田真穂 (G & Key)

井上憲一 (G)

恩蔵隆 (B)



ストイックなものや快楽的なものもいいが、リラックスした姿勢で作られた音楽には、他に替えがたい魅力がある。何年たっても色あせない、そんな強さを持っている。サンディー&ザ・サンセッツの音楽は、まさにそれで、TPOを選ばないし、聴き手をこばまない。生活の中にスーッと入り込んでくる柔らかさを持っていて、と同時に、ライブの場でもオーディエンスのエネルギーを内側から引き出すような盛り上げ方ができるバンドだ。こういうタイプのロックは、やろうとしてもすぐにできるというものではない。音楽的な才能ももちろん必要だが、キャリアがなければ生まれないものなのだ。サンディー&ザ・サンセッツがスタートしたのは、1980年。その前身である“久保田真穂&タ焼け楽団+サンディー”が発展したバンドだが、コンセプトの変化にともないメンバー・チェンジも行なわれた。まず、1980年にサンディーのソロ・アルバムが制作され、翌年には、ザ・サンセッツの名で『HEAT SCALE』をリリース、以前のトロピカル・サウンドをエキゾティシズムの方向に伸ばし、オリエンタルなニュー・ウェイヴ・バンドとしてのアイデンティティを固めた。1982年には、デビッド・シルビアンに誘われ、ジャパンのイギリス・ツアーに同行。前述した『HEAT SCALE』と新作の『イミグランツ』の2枚のアルバムは17カ国で発売され、“ニッポニーズ・ウェイヴ”の代表的なバンドとなった。これ以

降、サンディー&ザ・サンセッツはワールドワイドなバンドとしての性格を強め、世界各国でライブを行なうようになる。1983年には、インエクセスのラブ・コールによりオーストラリアで彼らとツアーを行ない、その後、84年の2月まで単独のオーストラリア・ツアーを敢行、これが見事に成功し、シングル「スティッキー・ミュージック」はヒット・チャートの11位まで上昇するヒットになった。その年の夏にはオランダ・ツアー。そして、9月にアメリカのシアトルで行なわれたユリズミックスのコンサートでは2万人のオーディエンスの前で演奏、翌年には、ジャマイカ政府の招聘によりキングストンのスタジアムで3万人のオーディエンスの前で演奏するという幸運をつかんでいる。1985年、日本のレコード会社を、アルファ・レコードから東芝EMIに移し、国内向けのシングル「だって夏よ」をリリース。16トラックのプライベート・スタジオが完成すると、アルバムの制作にとりかかった。今年の5月にリリースされた『ラ・ラ・ラブ』は、オリジナル・アルバムとしては3年8ヵ月ぶり、新録音曲も含む前作『ビバ・ラバ・リバ』からちょうど2年ぶりのアルバムに当たる。レコーディングは、今年の2月からロンドンで行なわれ、ミックス・ダウンには、ポール・ハード・キャッスルの「19」を担当したアルビン・クラークも参加、サン

ディーと久保田真穂、井上憲一のコンビによる曲のほか、デビッド・シルビアン、ピーター・ブラウン（マドンナの「マテリアル・ガール」のソング・ライター）、細野晴臣の曲も収められている。現在のラインアップは、サンディー（ヴォーカル）、久保田真穂（ギター、キーボード）、井上憲一（ギター）、恩蔵隆（ベース）と、サポート・メンバーの中山純一（キーボード）、湯浅ジョージ（ドラムス）の6名。このメンバーで、タイのタマサート大学での2日間にわたるコンサート、オーストラリアでの1ヵ月にわたるツアーから帰国後、“JAPAN AID”のステージに立つ。サンディー&ザ・サンセッツは、音楽的にも活動の上でも、脂がのっている美味しい時期である。沖縄民謡などアジア的なものを消化し、テクノの風味も残したポップなサウンドは、単にエキゾティシズムでは語れない今日的な匂いを発散している。まるで同じスタンスでやっているのに、これほど日本と海外での評価や支持のされ方が異なるグループも珍しい。ワールドワイドなものを吸収した日本がほこれるポップ・センスの持ち主、本物のポップ・バンドだ。来年早々にレコーディングをスタートさせ、春には、次のアルバムをリリースする予定とのこと。この機会に、サンディー&ザ・サンセッツを見直すのもよし。こういうバンドを海外のものにしておくのは、やはり惜しい。

フレバーなフリーズ。

ハヤリに流されずに流行の先端をゆくような、

チヨツトかなわない人つて

いると思う。



全米ヒット・シングル「カインド・ウーズ」収録
スライト・オブ・ハンド

SIDE・A ●カインドウーズ／キリング・タイム／リーチ
アウト／エンジェル・マン／ローレル・アンド・ザ・ローズ
SIDE・B ●ワン・モア・チャンス／ロシアン・ブルーレット、
ジェシー・フィギュア・オブ・スピーチ ドン・ファン

● L P / C 28 Y 3 2 4 2 * 0 0 8 , 2 ● D C D 3 2 Y 3 1 - 0 3 * 9 , 3 O O N



DISTRIBUTED BY CANYON RECORDS, INC.
PONY, INC.



編集 学生援護会
発行

「フリーワーカーの増加は」「どうも、アルバイトに」「は」「い」「ら」「し」「い」

一つのことをやりつつけるのもスゴイけど、
いろんなのをやってしまったらオモシロそう
な気がする。しばらくするのはイヤだけど、自
分でなら自然な感じがする。誰かのために働
くのはムリがあるけど、自身のためなら当然
だと思ったりする。

アメリカで、そんな意識の人たちを、フリー
ワーカーというそうだ。

おおげさかもしれないけど、アルバイトニュ
ースは、可能性をおさえこまないために、使
ってくれたら、うれしいです。

おつとめしない人は

フリーワーカーの

疑いがあります。



ライオンの

ヘアケア製品

ライオン株式会社

ツヤなら負けないヘアリスト。

HAIR RIST

シャンプー
リンス
スタイリングフォーム
ヘアリスト

石川晴美



洗うたびに、髪にツヤ。全10品そろって新発売。

光

が好きな髪になる。

どんな人でも生えたる根元の髪には自然のツヤがあります。この美しいツヤを毛先まで大切に育てるのがヘアリストです。コンディショニング成分配合のシャンプーで毛の表面をなめらかに整えて髪を保護した後リンスで髪の「改質」を。独自のつや成分が髪の表面を均一に包み、きれいな光の反射をつくり出します。だから、洗えば洗うほど髪にツヤ。太陽も思わず嫉妬する、光輝く髪の誕生です。

可能性360度。



ハツラツとした探求心で見まわせば、可能性は無限にあると思うのです。もちろんアプローチする方法も無限。あなたはどんな角度から、自分の明日にチャレンジしますか？デンカは創業70年の歴史と実績を誇る総合化学工業のパイオニア。無機から有機にわたる多彩な化学技術を活かし、エレクトロニクス、新素材、バイオケミカルなど、多様なハイテク分野にも果敢なチャレンジをつづけています。あらゆる角度から今日の、明日の可能性を見つめ化学する——デンカのおふれるチャレンジースピリットにご期待ください。

化学工業は進歩をめざす

デンカ

電気化学工業株式会社

東京都千代田区有楽町1-4-1 郵便番号100

本社 広報課 電話03-507-5071

プラスチック

合成ゴム

化学肥料

カーバイド

合金鉄

セラミックス

セメント

ファイン化学製品

——ご家庭のパソコンで株式投資——

ニューサービスが加わり、ますます魅力! 大和のホームトレード



〈ダイワ〉が先駆け、日に日にご利用者がふえているパソコンによる「大和のホームトレード」。11月からは数々の証券情報をはじめ、ニューサービスが加わり、さらに機能アップ。

もちろん、情報入手→株式注文→代金精算までのトータル・サービスはそのままご利用OK。これぞ、本格的ホームトレーディング時代の財テクチャネルです。ぜひご利用ください。

★ご利用いただける機種

MSXパソコン(各社) PC-9801(NEC)

★11月からのニューサービス

株価・指標データ推移、株価一覧、株式市況ニュース、株式売買代金・損益金計算ほか

★これまでのサービス内容

株式売買注文、各種残高照会、中期国債ファンドなどの買付・解約、リアル株価照会ほか

★今後は「各種株価チャート」や「持ち株分析」などのサービスを追加する予定です。

●「パソコン・ホームトレード」のお問合せ:

証券情報部 ☎0120-030303 (フリーダイヤル・受信人払い)
全国どちらからでもどうぞ

大和証券

〒100 東京都千代田区大手町2-6-4

V6Σ



新型シグマにV6ハードトップ/セダン誕生。

低速から中・高速域まで、優れたレスポンスを誇るサイクロン・エンジン。その頂点ともいうべきサイクロンV6エンジンを搭載したV6シグマの登場です。男たちの自信と誇りをそのスタイル全体にみなぎらせて、新しいステージに、いま悠々とそして堂々とデビューしました。時代が迎えた新しきハイグレード・カー、それがV6シグマです。V6シグマのエンジンは軽量・小型、高性能、そしてなによりも静粛性に優れています。V6シグマの心臓、サイクロンV6エンジンは技術の粋を集めた結果です。高級乗用車には不可欠な静粛性を特に重視し、徹底した防音・防振化を計り、ハイグレード・カーのなかでもクオリティの高い静粛性を獲得しました。また思い切った軽量・小型化にも成功し、燃費の向上をはかりました。さらに広い室内を生み、高速安定性や直進安定性に優れるFF

MMC
三菱自動車
いい街 いい人 いい車

走りの中味が、新しい。

photo:ギャラン Σ ハードトップ V6 2000 CSエクストラ

方式のためにも、大きな成果をもたらしました。エンジンの高性能化にも目をみはる進歩があります。全域で乗る人の感性を敏感に感じとる優れたレスポンス。ありあまるパワーを秘めながらも、ゆとりある大人の走りです。また高級車ででありながら、燃費の向上への努力も怠っていません。高い信頼性を得るための、エンジンの厳しいテストなど、ハイグレード・カーの名にふさわしいV6エンジンです。

ΣハードトップV6 2000CSエクストラ主要諸元 全長4660mm●全幅1695mm●全高1375mm●総排気量1998cc●最高出力105ps※(ネット)/5000rpm●最大トルク16.1kg-m/4000rpm●10モード燃料消費率11.0km/ℓ(5MT)(運輸省審査値)●60km/h時燃料消費率20.3km/ℓ(5MT)(運輸省届出値)◎ΣハードトップV6シリーズにはCSエクストラ、CS、VSの3類別があり、いずれも5MT・4ATが選べます。◎燃費は定められた試験方法での値です。従って運転条件により異なります。※「グロス」とはエンジン単体で測定したものです。「ネット」とはエンジンを車両搭載状態で測定したものです。

ギャラン Σ **シグマ**
エテルナ

ギャランΣはギャラン店で、エテルナΣはカーブライザ店でお確かめ下さい。
シートベルトを締めて安全運転を

HONORARY ADVISORS

RODRIGO CARAZO
ROBERT MULLER
KENSAKU MORIMOTO
KAZUO KINUMURA
KIICHI NAKAMURA

INTERNATIONAL YEAR OF PEACE

KRZYSZTOF OSTROWSKI
ROBBIN LUDWIG

EXECUTIVE PRODUCERS

BARY ROBERTS
HIROSHI KATO
HIROSHI IMANISHI
TOSHI HATTORI
MARINA KAUFMAN

CONCERT SUPERVISORS

RODRIGO CARAZO
HARVEY GOLDSMITH
TATSU NAGASHIMA
MORIHIRO KODAMA
MITSUO SHIROOKA
KAZUNORI SHIOKAWA
MAKOTO MIZOGUCHI

CONCERT PRODUCERS

PETER GABRIEL
STEVEN VAN ZANDT
BARY ROBERTS
MARINA KAUFMAN
DUDLEY ALLEN
PETE SMITH
HIROSHI KATO
TOSHI HATTORI
YOSHI HOSHINA
KAZUNORI SHIOKAWA
MORIHIRO KODAMA
TOM NAGASHIMA
TAKEO NAKANISHI
MICHAEL AHERN
MITSUO SHIROOKA

PEACE FORUM PRODUCERS

RODRIGO CARAZO
BARY ROBERTS
MARINA KAUFMAN
HIROSHI KATO
TOSHI HATTORI
ROBERTO DOMINGUEZ
BEATRIZ JAUREGUI
LUISA BERLIEZ
HIROSHI SUDA
RODRIGO CARAZO (Dr.)
CHARLES DUKE (Dr.)
HOWARD GOLDBERG

THE CONCERT CO-ORDINATION,**A&R AND PUBLICITY**

JOHN PEARSON
LISA ASTON
YOSHI HOSHINA
KUMA HARADA
KEITH HARRIS
YURI INOUE
ZOE YANAKIS
NORMA BISHOP
HIROSHI NAKAMURA
ANDREA SANDERS-REECE
BILL CAMP

UNIVERSITY FOR PEACE COUNCIL

RODRIGO CARAZO (Dr.)
GRAL, OLESEUN OBASANJO
ARTURO USLAR PIETRI
EDUARDO JIMENZ ARECHAGA
LUIS MARIA GOMEZ (Dr.)
SENATORE SUSANA AGNELLI
JOSEPHINE REYES
ARTURO ORTEGA
FERNANDO SAUQUILLO PAEREZ
DEL ARCO
OMAR NASSESS, H.E.
EDWIN LEON

UNIVERSITY FOR PEACE

MARINA KAUFMAN
STEPHEN KAUFMAN
BARY ROBERTS
ROBERTO DOMINGUEZ
BEATRIZ JAUREGUI
LUISA BERLIOZ
PETER BURNES-SMITH
DAIM BATANGTARIS
CARLOS ECHEVERRIA
HIROSHI KATO

AUDITOR

PEAT MARWICK MITCHELL & CO.

TOKYO BROADCASTING SYSTEM**(TBS)**

SHIGERU HARA
HIROSHI IMANISHI
SADAO GOTOH
YASUO TANI
TAKASHI TAMURA
MORIHIRO KODAMA
MITSUO SHIROOKA
KAZUNORI SHIOKAWA
TAKASHI MARUYAMA
MICHI FUKUDA
KAZUTOSHI AIJIMA
NAOKI ITOH
KEI KANOU
HIROYUKI KOHNO
NOBUHIKO TODOROKI
RYUICHI HIROSE
TOSHIHIRO MATSUNAGA

TEMS

MAKOTO MIZOGUCHI
NAOHITO TAKAHASHI
YOSHIROH UJIE
TEPPEI TAKAGI
MIKIO HATAKEYAMA
AKIRA KUWABARA
MIDORI KOJIMA
KATSUMI YASUDA
MAKIKO AOKI
NORIKO YOKOMIZO
MIKI NAKAMURA

JAPAN AID COMMITTEE

TOSHI HATTORI
YOSHI HOSHINA
KUNIO KATSUYA
YURI INOUE
KOJI HARADA
YOHICHI FUKUSHIMA
TETSUYA OKA
KAYOKO HOSOKAWA
KIZABURO NOTOMI
NOBUKO KAMAKURA
TOSHIO YAMASHITA
ISAMU KIMURA

JAPAN AID COMMITTEE'S VOLUNTEERS

YUTAKA TAMAMURA
YUKO KAYO
HIROYUKI SUDA
TOSHIFUMI SENDA
STAN GOLD
MIKE SHATZ
JEY INOUE
KENJI TANAKA
MARC WEATHERHEAD
HOWARD S. GOLDBERG

DOCUMENTARY VIDEO PRODUCTION

HART PERRY
DANNY SCHECTER
STEVE LAWRENCE
DENNIS BENATAR
BARRY REBO
BARRY MINERALY
YOSHIAKI NAKANISHI
HIROYUKI UMEHARA
VINNIE LONGABARDO
BARBARA KOPPEL
NILES SIEGEL
PETER GILBERT
HIROAKI ICHIKAWA
JYOJI IDE
KUNITOSHI TAKAHASHI

OFFICIAL PHOTOGRAPHERS

ARMAND GALLO
WATARU ASANUMA
YASUHISA YONEDA
JEY INOUE

STAGE MANAGERS

HARVEY GOLDSMITH
PETE SMITH
DUDLEY ALLEN
WILLIAM THOMPSON
GARY TREW
DAVID STALLBAUMER
SHAW KUBOTA
HIROSHI NAKAMURA

STAGE PLANNING

SHIGEKATSU KOBAYASHI
TOSHIHIKO KOSHIBA
TOSHIYUKI KIKUCHI

P.A.

BENJAMIN LEFEVRE
DAVID HUTSON
KEVIN MANCUSO
MICHAEL ROARTY
GEORGE GLOSSOP
KOHKI OKAMOTO
TATSUO OKADA

LIGHTING

SUSUMU TAKAHASHI
TAIZO YAMAMOTO
NOBUO WATANABE
JONATHAN SMEETON

SECURITY

SEIKŌ SIMIZU
YUINA ONE
SHIGERU NAGATSUKA

PEACE FORUM

LUIS MARIA GOMEZ
ROBERT MULLER
JOSEPHINE REYES
CHARLES DUKE
DENNIS WEAVER
NEWMAN PEYTON JR.
GLEN NORWOOD
RODRIGO CARAZO
MICHIKO YAMAOKA
KRZYSZTOF OSTROWSKI

CONCERT

PETER GABRIEL
DAVID RHODES
GAIL COLSON
ROY LAMB
HOWARD SMART
DAVID TARASKEVICS
JULIAN LAVENDER
ANTHONY LEVIN
DAVID SANCIOUS
DAVID WERNHAM
DAVID BOTTRILL
MARK RAFELSON
EMMANUEL KATCHÉ
ANDREW MOORE
HOWARD JONES
JANET JONES
JAMES MORAIS
EMER POWER
LISA BONI
FRANCIS HOILE
PETER JONES
DAVID STOPPS
HOWARD HOWES
DAVID NEWTON
CARON WHEELER
CLAUDIA FONTAINE
JENNIFER OSBORNE
JEREMY MORRISON
DEREK JHINGOREE
YOUSSOU N'DOUR
OUSSEYNOU NDIAYE
ABLAYE SECK
SEYDOU NKOITE
HABIB FAYE
PAPA OUMAR NGOM
MAMADOU MBAYE
BABACAR FAYE
ASSANE THIAM
FALLOU NIANG
IBRAMIM KONATE
MARIETOU KOTE
VERNA GILLIS
LOU REED
JOHN MILLER
ERIC KRONFELD
J. T. LEWIS
RICHARD BELL
ALAN SMALLWOOD
DAVID TAYLOR
WILLIAM THOMPSON

FERNANDO SAUNDERS
 NONA HENDRYX
 VICKI WICKHAM
 RONALD DRAYTON
 CARMINE ROJAS
 TREVOR GALE
 STEVEN SCALES
 CHUCK KENTIS
 KATIE MAC
 ANTHONY MELFA
 JACKSON BROWNE
 DAVID LINDLEY
 STEVEN VAN ZANDT
 STEVEN JORDAN
 THOMAS STEVENS
 THOMAS MANDEL
 PATRICK THRARL
 BENJAMIN NEWBERRY
 ZOE YANAKIS
 SHERWOOD JENKINS
 JOHN TISDELL
 MICHAEL SINCLAIR
 ROGER VITALE
 MICHAEL AHERN
 TAKAKO STEVENS
 CHRIS EVANS

LEGAL

LUBELL & LUBELL
 KIMURA LAW OFFICE

**THE UNIVERSITY FOR PEACE AND THE
 ORGANISERS WOULD LIKE TO THANK
 THE FOLLOWING CONTRIBUTORS TO
 THIS EVENT, FOR THEIR IMMENSE
 ASSISTANCE, MOTIVATION, ENTHU-
 SIASM AND BELIEF. WITHOUT THEM, IT
 WOULD NOT BE POSSIBLE.**

AKI INAGAKI
 KAIJI UCHIDA
 HIROYUKI UMEHARA
 TAMIO WATANABE
 YOSHIAKI NAKANISHI
 TSUTOM TOMIZUKA
 SHIGERU FUJITA
 TOHRU OHNISHI
 YOSHIO NIWANO
 TAKEO NAKANISHI
 TAKAO TAMURA
 TAKASHI MOURI
 KEI NISHIMURA
 SHIGENORI TANAKA
 MASATO NARITA
 PETER BARAKAN
 KEIICHI ISHIOKA
 NAOKI TACHIKAWA
 AKIKO SHIMOZATO
 MASAHARU TAMAKI
 HART PERRY
 TOM NAGASHIMA
 YOSHIO ICHIKAWA
 ARMANDO GALLO
 DONALD MILLER
 KAREN MOAK
 STEPHEN KAUFMAN
 KEN WARNER
 ERIC KRONFELD
 DANNY SCHECTER
 STEVE LAWRENCE
 VINNIE LONGABARDO
 MIKE UDAGAWA

NILES SIEGEL
 DENNIS BENATAR
 BARRY REBO
 BARRY MINERALY
 YASUO KUROKI
 KIYOSHI KIKUCHI
 SHŌHACHI SAKAI
 TAKURO UNO
 ANDREW KAUFMAN
 DOUGLAS KAUFMAN
 LISA ASTON
 VERA GILLIS
 JOHN PEARSON
 PETE SMITH
 KENNETH B. ANDERSON
 CYNTHIA ROBERTS
 CHRISTIAN ROBERTS
 ENRIQUE ROBERTS
 DEBORA ROBERTS
 MARIA SARA ROBERTS
 DAIM SARA ROBERTS
 PAT COSTELLO
 ANDREA SANDERS-REECE
 KUMA HARADA
 KRZYSZTOF OSTROWSKY
 KAIJI UCHIDA
 PAUL PENROSE
 TOM WHITSON
 SATOSHI YURA
 RONALD PERFIT
 JUDY PEARCE
 CAROL WILLIAMS
 KAZUMA NISHIWAKI
 TOHRU MACHIDA
 TOKUHACHI TAKAHASHI
 MASAYOSHI KUSUDA
 YASUO TSUIHIGI
 KIMINORI SATOH
 KUMI KOTAKEMORI
 TETSURO HAMADA

NAN K. SUZUKI
 BOB GELDOF
 MICHEAL APPLETON
 KENSHO OHNUKI
 RIKA IKARI
 TOMOHIKO MIYABE
 KIYOSHI ICHIKAWA
 MASANORI YAMADA
 SHUNICHIRO MORI
 GEORGE KAGE
 KYOKO SANO
 YOU ITAMI
 RYUICHI TAKAHASHI
 SATOSHI KOJIMA
 KENTA HAGIWARA
 HIROYUKI AIDA
 KENTAROH TAKAHASHI
 MASAHARU YOSHIOKA
 HIROMI AZUMA
 MASAHIKO EBIHARA
 MASAKAZU KITANAKA
 GAKU TORII
 YOSHIYUKI OHNO
 YUKIO KOBAYASHI
 SEISHI OHKUBO
 MASAHIRO HIDAKA
 SHIGERU YOSHIDA
 ICHIROH YOKOTA
 SHINJI MAENO
 MITSUHIKO HACHISUKA
 ICHIROH OHTA
 SHINSUKE OHMING
 GOH SATOH

 SOMETHING
 DENTSU INC.
 ASATSU INC.
 WARNER PIONEER CORP.

HOCHI SHINBUN
 YAMAHA MUSIC FOUNDATION
 AIU INSURANCE COMPANY
 RVC CORPORATION
 THOSHIBA EMI LTD.
 CBS/SONY INC.
 SONY PCL
 STUDIO DADA
 WITH
 GAILFORCE MANAGEMENT LTD.
 FRIARS MANAGEMENT LTD.
 RUNNING DOG MANAGEMENT LTD.
 THE HOLOGRAPHIC FILM
 COMPANY INC.
 THE NILES SIEGEL ORGANIZATION INC.
 MTV
 LITTLE STEVEN PRODUCTIONS
 ABC TV BROADCASTING
 L.O.E. ENTERTAINMENT LTD.
 THE ALLIED ENTERTAINMENTS GROUP P.L.C.
 NEC CORPORATION
 SONY VIDEO SOFTWARE
 INTERNATIONAL CORPORATION
 NIPPON GAKKI CO., LTD.
 YAMAHA SHIBUYA SHOP
 MIZUNO
 MIYAKO HOTEL TOKYO
 MITSUBISHI MOTORS
 NP CANON
 SISTER RAY ENTERTAINMENT LTD.
 ROCK-IT CARGO
 JAPAN AIR LINES
 TAKE-OUT PRODUCTIONS
 FRIENDS OF THE UNIVERSITY
 FOR PEACE
 ORION PRESS
 IMPERIAL PRESS
 KYODO STAGE FAMILY
 PEAT MARWICK MITCHELL AND CO.
 KIKKO INC.

KEISHICHŌ YOTSUYA KEISATSU
 STUDIO DADA
 STUDIO JO
 KEIKYUKO BUS
 PACIFIC HOTEL
 POP GEAR
 KAI OFFICE
 SHŌCHIKUEN
 SHUKUICHI
 BUNSHŌDŌ
 EURO CREATIVE TOURS (U.K.) LTD.
 SHINKO MUSIC
 NHK
 MITSUBISHI ELECTRIC
 FINETEC CO., LTD.
 SHIMIZU BUTAI KOGEI LTD.
 SHIMIZU SPORTS SOSHOKU CENTER
 KYORITSU LTD.
 NIHON SŌGYŌ INC.

THE JAPANESE RED CROSS SOCIETY

YUKO OHMURA
 YOSHIHRO OGOMA
 ATSUKO NODA
 SHINICHI HYOUMI
 AYA YOSHIZAKI
 AKIKO YOSHIDA
 KAYO NIGO
 MARIKO SUMIYA
 KAZUHITO ISHII
 HIROSHI SUDA

**THE NATURE OF THIS EVENT PRE-
 VENTS THE ABOVE CREDITS AND
 THANKS IN ANY PARTICULAR ORDER.
 OUR SINCERE THANKS ARE ALSO
 EXTENDED TO MANY CONTRIBUTORS
 WHO ASSISTED AFTER THE PRODUC-
 TION OF THIS PROGRAMME.**

(Names above are randomly listed.)

MONTHLY

REAL TIME MUSIC MAGAZINE

POP GEAR



POP GEAR

brings you hottest news

POP GEAR

shows precious photos of artists

POP GEAR

interviews noteworthy artists

CONTENTS

TOP GEAR : ARTISTS' NEWS

HOTTEST INTERVIEW

PHOTO DOCUMENT

NEWS BEAT : REMARKABLE ARTISTS

FILE : HISTORY OF ROCK'N'ROLL

WIDE POSTERS & PIN-UPS

HITSVILLE : LYRICS OF HIT SONGS

WE BELIEVE IN THE POSITIVE ENERGY OF MUSIC

▶JAPAN AID 1stについて、本誌1月号(1/10発売)では、ピーター・ガブリエルとハワード・ジョーンズのインタビューを掲載。2月号(2/10発売)では、コンサートの模様を豊富な写真でレポート致します。

●ポップ・ギアはロック・シーンの最新情報を、豊富なカラーページでお届けします。●特定アーティストにかたよることのないオールラウンドな音楽情報誌です。●大判ポスター、ポスト・カード、最新ヒット曲集付。

POP GEAR毎月17日発売

●定価550円
1月号好評発売中

19TH. DECEMBER

《PEACE FORUM》

RODRIGO CARAZO (Dr.)

ROBERT MULLER (Dr.)

LUIS M. GOMEZ (Dr.)

JOSEPHINE C. REYES (Dr.)

CHARLES M. DUKE, JR. (Dr.)

MICHIKO YAMAOKA

20TH. DECEMBER

TAKAKO SHIRAI & CRAZY BOYS

YOUSSOU N'DOUR & SUPER ETOILE DE DAKAR

LITTLE STEVEN & THE DISCIPLES OF SOUL

JACKSON BROWNE & DAVID LINDLEY (ACOUSTIC SET)

LOU REED

REBECCA

HOWARD JONES

YOSHIHIRO KAI

PETER GABRIEL (+GUEST/NONA HENDRYX)

21ST. DECEMBER

SANDII & THE SUNSETZ

NONA HENDRYX

STAS NAMIN

LOU REED

JACKSON BROWNE & DAVID LINDLEY (ACOUSTIC SET)

LITTLE STEVEN & THE DISCIPLES OF SOUL

HOWARD JONES

YOSHIHIRO KAI

PETER GABRIEL (+GUEST/YOUSSOU N'DOUR)

発行日	1986年12月19日
編集人	服部年伸
編集	K&K事務所、鎌倉伸子、保科好宏
デザイン	HOT ART+平塚重雄+斉田俊朗
カバーフォト	オリオン・プレス
発行所	JAPAN AID COMMITTEE
	〒150 東京都渋谷区恵比寿西2-3-9
	MKY恵比寿ビル407号室
印刷所	大日本印刷株式会社
	©1986 by JAPAN AID COMMITTEE

三者三様

個性派アーモンド
新発売¥100



栄養スナック
カルモンド



グリーンオニオン
アーモンド



スイーティ
アーモンド



カリフォルニア・アーモンド

カリフォルニア・アーモンド・グローヴス・エクスチェンジ日本支社 東京都千代田区隼町3-16 TEL.03-263-0211 〒102

きつと好きな
味に出会える。

いい旅、楽しみたい。
快適な旅行は京浜急行の観光バスで——。



京浜急行電鉄株式会社

〒108 東京都港区高輪2-20-20



SONY

世の中には、 面白い芸術も、 あります。

ドイツ(バウハウス)の画家オスカー・シュレンマーによる「トリアディック・バレエ」は1922年初演以来、数十年もの時を経て再現された。この色彩、このフォルム。その美しさを幾度でもお楽しみいただくならソニービデオテープ。美しいと思ったら、いつもソニーですね。



美しいと思ったら、 ソニービデオテープ。



(メタル磁性体(コスミックライト)採用、)
(ソニー8ミリビデオテープ、新発売。)



VHS T-60 HiFi ¥1,800・T-120 HiFi ¥2,100 IB L-250 HiFi ¥1,500・L-500 HiFi ¥1,800・

L-750 HiFi ¥2,100 IB P6-15MP ¥1,000・P6-30MP ¥1,200・P6-60MP ¥1,500・P6-90MP ¥1,800・P6-120MP ¥2,100

■あなたがテレビ放送や録画物などから録画したものは、個人として楽しむなどのほかは、著作権法上、権利者に無断では使用できません。

■ソニービデオテープのカタログをあげます。ハガキにソニービデオテープ・住所・氏名・年令・職業を明記のうえ、〒106東京都高輪局区内ソニーカタログ係へ。

©OSKAR SCHLEMMER THEATER ESTATE, BADENWEILER WEST-GERMANY 1986 ©AKADEMIE DER KÜNSTE, BERLIN.

暮らす気分で旅してみたい。

あなたはどんな旅をお望みですか。計画も立てず、カメラも持たず1日を足のむくまに過ごしてみる。街の生活の空気が伝わってくるようです。すべてにゆとりがある旅をお望みならやっぱりJALPAKです。



サンフランシスコ・アラモスクエアパークでちょっとひと休み。

お問い合わせ、パンフレットのご請求はリン・リン・ダイヤルへ。


東京…(03)435-5311/大阪…(06)341-4689

●東京・大阪用～金9:00～18:00 (土9:00～12:00 13:00～17:30受付。

名古屋…(052)561-8910/福岡…(092)291-1254

札幌…(011)221-5513/●名古屋・福岡・札幌
用～金9:00～12:00 13:00～17:30受付。

いい旅しよう

JALPAK  日本航空

主催/旅行開発株式会社(運輸大臣登録一般旅行業第133号)(JATA会員)